
嘆きの月夜

矢川 智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘆きの月夜

【Nコード】

N4862W

【作者名】

矢川 智

【あらすじ】

『さよなら、父さん、母さん——』過去に実の親を殺した、などという暗い闇をもった少女・夜切 蘭は並盛中学校1年生。彼女は全てを隠しながら静かに毎日を過ごしてきた。しかしリボンが来てから生活は一変、関わりたくないのに親友が山本という理由でで巻き込まれることに。

第0ワ。 プロフィール（前書き）

初めての投稿です。

読んでいただけたら幸いです。

第0ワ。プロフィール

夜切ヨギリ 蘭ラン

性別 女

年齢 12歳

一人称 私

容姿

黒髪で腰くらいのロングヘアー
左前髪に銀の髪留めをつけている
瞳の色は深紅
細長いプレートのパendantを常につけている
基本シンプルな格好

武器

刀が主
クナイ、中剣も使う

その他

- ・二重人格である
- ・黒いトランクと
キツネみたいな白いお面常備
- ・トランクの中身
- ・黒コート
- ・黒い手袋

- ・ 予備のクナイ
- ・ 鎖鎌

トーヤ

蘭のもうひとつの人格

性別

女？

精神的には男

一人称

オレ

武器

鎖鎌が主

蘭と同じでクナイなども使う

その他

- ・ トーヤになるには
重傷を負う、面をつけるなどの事を
しないといけない
- ・ トーヤになると
雰囲気が別人のようになる
また、瞳が黒くなる

阿部 沙絵

性別 女

一人称 あたし

容姿 黒髪のショートカット
黒目

その他 誰からも好かれるが、
唯一無垢の友達は蘭しかいないと思ってる。

木崎 実歌

性別 女

一人称 わたし

容姿 黒髪で長さは肩くらい

その他 なんか山本が気になってるらしい。
で、いつも話している蘭に嫉妬してるらしい……？

第0ワ。 プロフィール（後書き）

まずはプロフィールでした。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

温かい目で見守ってくださいると良いなあ…とおもっています。
投稿は不定期なので…

本編は次回からです。

第1ワ。 死ぬ気の炎!?!—前編—(前書き)

更新遅くなりました。

蘭の過去の一部と転入生です…? ?

第1ワ。 死ぬ気の炎!?!? —前編—

—?!?!? SIDE —

「…こうなる事は知っていたが…」

「さよなら。父さん。母さん。」

「実際なってみるとなごり惜しいな。」

なあ? 蘭よ。」

「サヨナラ。」

シュツと空を切った音を最期に、

父さんと母さんは死んだ——————

—蘭SIDE—

「!?!?」

何かの気配に気づき、

起き上がる蘭。

「お。」

おはよ、蘭。」

蘭の数少ない友達の一人、

阿部^{アベサエ} 沙絵が話しかけてきた。

「ああ、沙絵か。」

ビックリした…」

「あはははは…

あ、そーだ…」

苦笑いしながらも

話を別のものに変える。

「今日、

転校生がくるってハナシなんだけど…」

「へえ、なんてゆー人？」

「さあ…

でも帰国子女らしいよ？」

「ふうん…ねむ…」

ガラッと先生が扉を開ける。

「席に着けー」

と先生が言ったところで

また眠気が襲ってきた。

もちろん勝てるハズもなく、

「Z z z …」

眠ってしまった。

第1ワ。 死ぬ気の炎!?!—前編—(後書き)

あと一歩で獄寺登場でしたねー

すいません。…次回、原作キャラ登場です。

更新はなるべく早くします…

第2ワ。 死ぬ気の炎!?!—後編—(前書き)

やっど…原作キャラ登場です…

第2ワ。 死ぬ気の炎!?!? ―後編―

―蘭SIDE―

「蘭ー起きろー」

「んあ…」

蘭を起こしたのは

「おはよ、武。^{タケ}」

「ああ、おはようなっ」

武こと山本 武であった。

「ん…もうこんな時間かあ

屋上行ってきます」

「ああ!」

こうして蘭は屋上へ向かった。

「んん…ん!?!?」

ふと下を見ると、

『うおおおおお!!』

死ぬ気で消火活動!!』

なんて事をやっている奴らがいた。

なにより信じられないのは、

…大空の…死ぬ気の炎!?

さらに視界を広くしようと

体をフェンスから乗り出した。

「リッ（リボーン!?!）」

瞬間、体を引っ込ませ、座り込む。

なんで…リボーンが?

スキーモン・ボムもいるし…

大空の炎って…

「綱吉が…

10代目候補…?」

授業開始のベルが鳴っても

その場に座り続けていた蘭だった。

—リボーンSIDE—

アイツは…

誰だったんだ？

一瞬だけ気配を見せてすぐに

気配消してを引っ込むなんて…

ニヤ、と笑い

「誰だか知らねーが

絶対ファミリーにいれてやるぞ」

と、誰にも聞こえないような声で

つぶやいたのだった。

第2ワ。 死ぬ気の炎!?! ―後編― (後書き)

すいません。

ダメだ：原作キャラのセリフが：

すいません。全然ないですね、ハイ。

できるだけからめます：

蘭がなぜあのタイミングで屋上に行くかは分かりません。
もう：こういうことは極力へらします。

第3ワ。 最強の並中生！

放課後。

―沙絵SIDE―

なんだか帰ってきてから蘭が元気ない。

どうしたんだろう？

「はああ…」

「？どったの？」

元気ないじゃん」

「いや…実は…」

―蘭SIDE―

さかのぼる事数時間前。

「リボーン…綱吉…スキーモン・ボム…

いったい…」

ガチャ、と扉を開ける音がする。

「…君、ナニしてるの？」

「!？」

ひ…雲雀恭弥…先輩？」

「何してるの？」

「ソッソラヲミテマシタッ」

正直、汗だく。

「ふうん。」

でも君…授業サボったよね？」

「あっ…やばいですね…」

「噛み殺す!!」

チャキッと構えるヒバリさん。

そして――――

ヒュッ

仕方無い…か。

キイイイイン…

「!？」

ああ…そういうことか。

すばらしいね。でも…」

「？」

「武器の所持は禁止だよ？」

ヤツツツベエエエエエー!!!

忘れてたああああ…

「来なよ。」

「?..？」

「いいから。」

「はあ…」

と、半ば強制的につれていかれた。

「……………ここは…」

「なにしてるの？」

「入りなよ。」

「…はい」

私は応接室に入った。

「この書類書いてね。」

「ハイ…はい？」

つまり、

「風紀委員になりなよ。」

そうすれば今日の件は見逃してあげるよ。」

「いや…でもですね…」

「君に拒否権はないよ。」

「…はい。」

なにか私にとってのメリットが

あるのなら…」

「そうだね。」

・武器の所持を認める。

・無断欠席、遅刻、早退を認める。

くらいかな。」

「せめて

『一般生徒と同じ扱いを受ける』くらいは…!」

手をあごに当てて少し考える。

「いいよ。」

でも、仕事はやらしてもらおうから。

学ランは着れないから、腕章だけでいいよ」

「…はい。」

腕章、着けたくないんですが…」

「ダメ。」

「いやです」

「ダメ。」

「いやです!」

と、このような口論が続く。

しばらくして、

はぁ、とため息を吐く。

「わかったよ。」

でも非常時は着けてね。」

「あ、先輩。」

お願いが…」

「なんだい？」

「この事は、

風紀委員内に留めといてくれませんか？」

また少し考える雲雀。

「いいよ。」

コレが一応、腕章。

じゃあ、これから毎日来てね。」

「えっ」

ニヤリ、と笑い、

「朝に、だから。」

授業に支障はないよ。

—————安心しなよ。」

「はあ…」

—沙絵SIDE—

訳を話した蘭。

「———という訳、なんだ…」

「つまり、風紀委員に入ったと。」

「い、言わないでね？」

風紀委員かぁ。スゴイねえ。

「モチロン！」

こうして、長い長い一日は終わったのであった。

それにしても、おもしろいなあ。

第3ワ。 最強の並中生！（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

蘭の出した武器はクナイです。

なんかグダグダになってしまいました…

以後、気をつけます…

第4ワ。 親友の自殺未遂。 カゝラゝノオ!?(前書き)

また、大分グダグダです…

第4ワ。 親友の自殺未遂。カゝラゝノオ!?

—蘭SIDE—

こんにちは。

毎朝応接室に

(無理やり)行かされることになった蘭です。

さっき聞いた話なんですが…

武が自殺しようとしてるらしいです。

…ちょっと一喝して来ようかなあ？

—沙絵SIDE—

「え？

山本君が？」

衝撃的だった。

となりにいる蘭は、顔が青い。

『蘭、平気だよ。』

とは、いえなかった。

「—————沙絵、ちょっと行ってきます。」

「…わかった。待ってる。」

「うん…ありがとう!」

—蘭SIDE—

バンツツツ

「タケツ

なにしてんですかつ」

「!」

…蘭…俺さ…」

「言い訳無用!!」

「どんだけ心配したと…」

「…ゴメン。」

「でも…俺は本気だ。」

ギリ、と奥歯を噛みしめる。

「————ハア、わかった。」

止めない。でも————」

本当に死にたいなら。

「私が殺してあげますよ。」

なに、一瞬です。痛くは無いですよ。」

私の言葉に、騒然とする皆。

おかしい事は言っていない。ハズ。

「すぐに

『お願いします』って言わないって事は

死にたくないってコトだよね？」

ザワザワと、皆がざわつき始める。

「じゃあね。」

校舎の下いって見学してるから。」

「……………」

落ちてきた。

でも、人影が大きい。

————ナゼダッ？

——リボーンSIDE——

アイツか。

この前のかすかな気配は。

……夜切 蘭、か。

調べてみるか。

————と、その前に。

重要な仕事が残ってたな。

——蘭SIDE——

落ちたッ

でも…

心配いらなかったらしい。

勝手に解決してるし…

でも、ホントに良かった。

帰り道。

「じゃね、蘭。」

「ん、また明日。」

じゃーねーと、別れて数十秒後。

「こそこそしてないでさあ…

出てきたらどう？

殺し屋^{ヒットマン}、リボーン。」

塀の影から出てくる、赤ん坊。

「…やっぱりオマエ、

あの夜切だな。

伝説の殺しの刀『^{ヨギリクロガネ}夜切鉄』の後継者。」

「……」

こいつは、ナニサマだ。

「まず、その殺気をしまってくださいないか？

さすがにイタイ」

リボンじゃなかったら、

気絶するくらいの殺気の量を放ってた蘭。

「フン…

まだまだだね、ボンゴレも…」

「そーゆーな。」

「おじいちゃんが

オマエに殺気を放ってたら死んでたね。

命拾いしたね、アルコバレーノ。」

「（ニツ）ああ。そーだな…」

「山本武もファミリーに入れたんだろ？

強制的に。」

「まあ、そうだな。」

おm『オマエもファミリーに入んねえか？でしょう？』

…そーだ

どうだ？」

「断る。絶対に。」

「なんでだ？」

「綱吉のファミリーになんて入りたくない。」

「…そーか。」

残念だな。」

「諦めるつもりもないくせに…

じゃあな、アルコバレーノ」

「ああ…またな。」

く 蘭の家 く

「ただいま帰りました。」

「∴おお。おかえり、蘭」

和風な家の地下2階に、私は、
いる。

第4ワ。 親友の自殺未遂。カゝラゝノオ!?(後書き)

文を書く能力無いんで…

間違ったなにかがあつたら教えてください。

感想待ってます。

第5ワ。 夜切 仁（前書き）

少し長めです。

第5ワ。 夜切 仁

— 蘭からの前書き —

突然ですが。

私の今現在の装備です。

- ・ 男物の黒い羽織（つーか着物？）のようなものか（動きやすさ重視）。中にアンダーシャツ着用
- ・ 左腰の刀『夜切鉄』（真剣）
アンコウ
- ・ 背中 of 太刀『薄花桜』（真剣）
ウスハナザクラ
- ・ 床に鎖鎌
- ・ 懷にキツネのお面あり。

ちなみに、

暗鋼は仁おじいちゃんが造ってくれました。
薄花桜は私が作りました。

以上です。

では、本編をどうぞ。

— 蘭 SIDE —

「えっ…?」

「トーヤを出せ。蘭」

「…は…はい…」

懐からお面をとり出し、つける。

――トーヤSIDE――

ったく。

めんどくせえコトを押し付けやがって。

つとに面倒くせえ。

キツネのお面のしたから

明らかに蘭とは別人の声がする。

「なんだよ。」

ジンジィ殿。」

いかにも不機嫌そうにするトーヤ。

「うむ。」

一週間ぶり、だな」

「いちいち覚えんな（イラッ）」

「ふっふっふ。」

わっかかりやすいのう」

「るっせえなあ…」

なんでオレを出したんだよ…」

「お前には、

本格的に鎖鎌の扱いを覚えてもらう」

「は？」

鎖鎌の扱いを？

本格的に？

バカバカしい。もう覚えてるっての。

「だからお前は成長しないのだ。

さっさと構えろ。刀は持ったままな」

まったくイラつかせるジイ殿だ。

「ヘイヘイ…」

「ゆくぞ」

ジイ殿が殺気を放ちながら言うその一言が、
地獄への道引きの合図だ。

ガキイイン！

シュツ！

ガンツ！

「ハアツハア…

あいかわらずホント手加減ねえなあ…」

「あたりまえだ。

今こそ認めてはいるが…

おまえは人工的に蘭に入れられた人格だからな。

あのバカ息子のファミリーによって…」

このとき実に悲しそうな顔をする。

…クソがッッ

「それ以上言うな!!」

言ったら…」

「どうせお前には

ワシを殺すだけの力はない。あきらめろ」

ギリ、と歯ぎしりする。

「…やめだ。こんなのやってられるか。」

「逃げるか。それもいいだろう。」

トーヤは面をはずす。

—蘭SIDE—

「精神世界にて」

『トーヤ…』

お前ってヤツは…』

『ん…？』

ほめても何もでねーぞ？』

『馬鹿野郎があああああああ！！！！』

なんで修業放棄してんだッッッ』

『めんどろだったから』

やれやれ、と言った風な顔をする。

『……ふう…』

トーヤこれから一週間絶対に出さないから』

『また？』

そろそろ精神世界アキタ』

『文句いうな。』

修業放棄した罰』

『へいへい…』

—仁SIDE—

トーヤは反抗期だな。

蘭もいずれくるだろう。

「あー…

おじいちゃん、すいませんでした…」

蘭になって、いきなり謝ってきた。

「よい。こうなることは分かっていたからな…

では、蘭の修業をはじめようか。」

真剣な目つきになる蘭。

「…はい。よろしく願います」

—蘭SIDE—

「あー…

おじいちゃん、すいませんでした…」

まずは、謝らなくては。

まあおじいちゃんのことだから分かったかみだけど…

「よい。こうなることは分かっていたからな…

では、蘭の修業をはじめようか。」

やっぱりか。さすがおじいちゃん。

———ここからは、より真剣に。

「…はい。よろしく願いします」

夜切鉄をかまえる。

「今夜は【旧ノ型】の鍛錬だ。」

「はい。」

夜切鉄の鞘から出した最初の基本形。

名称 夜切鉄 旧ノ型 【漆黒】シツコク。

これはいろいろな攻撃・防御…

あらゆるものに柔軟に特化したもの。

扱いは、他の型に比べて、比較的簡単だ。

しかし、それも思い出すだけで嫌になることをやってのけていたからだ。

（いまでも量こそ変わらないが、5歳くらいから普通に大人がやっても悲鳴を上げることをしていた、）

過酷な日々を思い出す。

「ぬ…

昔を思い出しているか。それも良いだろう。」

「はい。でももういけます。」

稽古、よろしく願います。」

———こうして、いつものように夜は過ぎていく……

第5ワ。 夜切 仁（後書き）

蘭達の過去はいつか書こうと思っています…

感想まっています。

第6ワ。 入ファミリー試験

かれは、ひと？

『■■■■…』

『■■■■■■■■…！』

ただ…憎い…

その存在が、許せない。

■■■。

かれは、もうつめたい。

ひとでも、ない。

もう、なにをしても意味がない。

『安心しろ。■■■■は、』

気安くよぶな。かれの名を。

『—————とする。』

狂ってる。

あのひとたちは。

憎い…

憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い…！

殺したい…

『
■
■
…
』

なにかも――――

壊したい。

――蘭SIDE――

「あゝ…

…またあのときの夢、か…」

目覚めはサイアク…

それに…

「朝練しなきゃ…」

「蘭か。おはよう。」

最近おそいな。どうかしたか？」

おじいちゃんには嘘はつけない。

「…はい。」

実は、夢を見ていて…」

「…夢、か…」

「……少し、昔の――――」

「ふむ。わかった。

では、はじめようか。」

「よろしくおねがいします。」

―朝の日課。素振りなどをこなして、学校へ。―

「だああああああああつつつつつ！！」

チコクウウウウウ！！」

ダダダダダダダダダッツツツと道路を駆け抜ける。

やっちゃいましたね。ええ。

やっちゃいましたとも。

サイアク…

—山本SIDE—

お。

蘭がチコクなんて珍しいな。

「おはよ、蘭。」

「ハー、ハー、ハァー…

おはようございます…武…」

きけば、もう応接室に行った後らしい。

…やっぱり、おもしろいなっ

「はははっ」

「なに？武」

「んー？べつにいー？」

「むー…」

ちよっとむっとする蘭。

かわいい…な？

—蘭SIDE—

…どうして、こうなった。

（数十分前）

「なあ、蘭。」

「ん？」

ぐい、と引つ張られた。

「え？え？えええええ！？」

と、言うわけで、現在に至る。

「お、きたな。」

すると、綱吉がツツコミをいれる。

「ちょっとリボーン!!」

何やってんだよ!?

山本にくわえて夜切さんとみっちゃんまで巻き込むなんて!」

リボーンは自慢げに言った。

「すごいだろ」

「全然すごくないから!」

「とにかく始めんど。」

ちなみに不合格は死を意味するぞ。」

「私受けるなんていってない」

しかし無視された。

「試験は簡単だ。とにかく攻撃をかわせ」

———実際に、すごかった。

あ、私は途中で抜けました。

綱吉のファミリーになんて、なりたくないし。

まあまあ、よくあんなことできるもんだ。

ま、命の危険があつたら割り込んでた…かもね。

こうして、見事武（あの女も）はボンゴレに入りましたとさッ
私はモチロン入ってませんよ？

ちなみに。

『みっちゃん』ってのは、嫌いな奴。

名前は、木崎^{キサキ ミカ}実歌。

並中一、嫌いな奴。

第6ワ。 入ファミリー試験（後書き）

実歌のプロフィールです

木崎 実歌

性別 女

一人称 わたし

容姿 黒髪で長さは肩くらい

その他 なんか山本が気になってるらしい。

で、いつも話している蘭に嫉妬してるらしい…？

前にもこんなことありましたね…

いつも無計画なので（？）…

本ツツ当にすいませんでしたああああツツ！！

第7ワ。 夏休み日記（前書き）

霧の守護者トージョーッ！です。

無理やりな話が多い：

第7ワ。 夏休み日記

—蘭SIDE—

夏休み。

いろんなことがあった。

例えば武に呼ばれて綱吉の家に行ったとき。

「————と、いうわけでき

ワリイけど、ツナン家まできてくんね？」

しょうがないけど、

行くか。

「おじゃましーす」

綱吉の部屋までいった私。

「あれ…夜切さん!？」

き、来てくれたんだ…」

「悪い？」

「よ…夜切!」

10代目に向かってなんて…!」

「まーまー落ち着けて。

この問7を解いてもらうんだろ？」

———ここで補足をくわえると、

この部屋にいるのは、

武、綱吉、獄寺、木崎実歌、なんだか知らない女、とその父親、リ
ボン、私。

「ああ、これが解けない問題？」

ふうーん…んんんんん…うん。

分かんないです。

諦めたほーがいいと思いますよ?」

「んーそっか。

わざわざありがとなっ」

ここで、リボーンが寝言(?)で問題を解く。(女のヒトの名前を、
三浦ハルと言うそーです)

——と、このようなことや、

おじいちゃんに半殺しにされたこと。

あと、忘れちゃいけない——

「うーん…

買いすぎた…」

何を買いすぎたかというと、

ケーキ、である。

つついおいしそうで8個も買ってしまったのだ。

お、あんなとこに一人の公園のベンチ（怪しそうじゃない）少女発見！

「スイマセン。」

ビクッと体を震わせて振り向く少女。

「な、なんですか…？」

うん。そりゃ驚くよねえ。

「あの、ちよつといい…ですか？」

「は、はい…いいです…よ？」

―蘭の話しかけた少女SIDE―

ちよつと公園で休んでいたときに

「スイマセン。」

と、話しかけられた。

いきなりだから、少し…驚いてしまったけど、ふりむく。

「な、なんですか…?」

そこには…いつもこの公園の前で見かけるヒトがいた。

「あの、ちょっといい…ですか?」

怪しそうなヒトじゃなかった…から、

「は、はい…いいです…よ?」

と言うことが…できた。

—蘭SIDE—

「これ…いっしょに食べませんか?」

ケーキを差し出す。

「え…」

やっぱりまた驚かれちゃった（テヘツ

「いや、変なものは入ってませんよ!？」

君、なんだか私を通るとき、いつもいるから友達になりたかったんだ。」

あ、君がいるとき私を通るのかな？」

「多分たまたまだと思う…」

わたしも…あなたが気になってた…」

う、嬉しいな…」

「ありがとう。私の名前は蘭！気軽に呼んでね。」

「わかった…わたしは、風…」

風かあ。

「うん、ヨロシクね。風！」

「よろしく…蘭

ところで…その袋、なに？」

わ、忘れてた…」

「ケーキ。（多く買っちゃったから、）風と食べたいなって思って」

「え…」

すごくバツが悪そうな顔になる。

「いや、たまたま多く買っちゃっただけ。

気にしないで」

「わかった…ありがとう…蘭」

その後、凧と一緒にケーキを1個ずつ食べて、しゃべったりした。

「そろそろいくね…蘭」

「ん？ああ、もうこんな時間かあ。」

「うん…ごめんね？」

行こうとする凧を、呼び止める。

「あ、待って。」

「ケータイ持ってる？」

振り返ってコクリ、とうなずく凧。

「じゃ、アドレス交換しよーよ。」

ピ。ピ。ピ…

赤外線で、アドレスを交換した。

「うん、ありがとう。じゃあ、またね」

「うん…また遊ぼうね…」

というような、凧という友達との出会い。

その後も遊んだし、

もちろん、風紀委員としての仕事もしたよ？

今年の夏は、楽しかったな。

来年も…楽しい夏だといいな…

第7ワ。 夏休み日記（後書き）

凧が登場しました。

ここでお詫びがあります。

あとがきに2人も登場人物紹介をしてしまい、申し訳ありませんでした。

深くお詫び申し上げます。（ほんとだよ。by トーヤ）（ですね。by 蘭）

：トーヤと蘭は気にしないで：いや、気にしてください。

怖いから、武器しまつて。マジで！！ぎ、ぎゃあああつつつ

蘭『と、いうわけでなれない事をした作者を許してください。』

トーヤ『感想まってるぜ！』

第87。 応接室での乱闘

—蘭SIDE—

今日は、応接室にいます。

最近、武と一緒にいて、ちょっと疲れたので…

（Dr. シヤマルとか、笹川先輩をファミリーに入れようとするのをみたりして疲れたんで。）

息抜きに、ね。

「じゃあこの書類やってくれない」

その書類の量を見て、言った。

「い…無理です。」

「いま、『いや』って言おうとしたよね？

咬み殺す！」

「いやちょっと…！！」

ガキンツツと、互いの武器がぶつかる。

「? 剣かい？」

このまえは、クナイだったよね？」

「ま、まあ…」

いろいろデスヨ…」

「ふうん。」

すると、突然武器を収めた恭弥先輩。

「また、今度殺^やり合おうね。」

――――蘭。」

「へ? 今なんと…?」

「なんでもないよ。」

いいから書類やりなよ。」

なぜまた書類ッ

とは言えず。

「はーい…」

「つ、疲れ…た…」

ざっと千枚くらいの書類をやりおわった。

すごい疲れたあ…

「じゃあさあ…」

帰ってもいい？というとした瞬間、扉が開いた。

「へ」

こんないい部屋があるとはね――。

「！」

あれ？なんでここに武が？

「君、誰？」

あ、恭弥先輩がいらついでるウ

「なんだあいつ？」

いやいや、

それは恭弥先輩のセリフだからっつ

「獄寺待て…」

そのとおり。

「風紀委員長の前ではタバコ消してくれる？」

ま、どちらにせよただでは返さないけど。」

いらつきMAX！

「!!」

んだとてめ——」

獄寺、やめときなつて。

死にたいの？

「消せ」

ビュッと、トンファアの風圧———なのかな？———でタバコの火を消す。

はあ、カワイソ。

「へーはじめて入るよ応接室なんて」

綱吉登場。ま、武たちがいる時点で来るってわかってたし。

「ツナ、まってよお」

チィツ木崎もいんのかよ。

「まてツナ！」

「え？」

「1匹」

ガッ

恭弥先輩すごっ

いや、綱吉が弱いだけか。

ン…？あ。

ガッ×2（獄寺と武がやられる。）

そして綱吉が起きて、死ぬ気になる。

「綱吉、やっぱり…」

「ツナ！気をつけて！」

あーあーあー ガタンゴトーンガタンゴトーン。

キコエナイ、キコエナイ。

見えないよ、あの女なんて。

スリッパで恭弥先輩が殴られる。

「恭弥先輩！」

「…大丈夫だよ、蘭。」

ちょーキレてるねえ

コワイコワイ。

そして、やめろと言われた先輩が、リボーンに攻撃をしかける。

それをリボーンが止め先輩がほめる。『お開きだぞ』爆弾を…はい？

ば、爆弾——！？

「やめてくださいッ」

クナイを投げて、爆発をくい止める。

「お。こんなとこにいたのか。夜切蘭。」

「危ない、危ない。」

何てことをしようとしたんですか…！」

殺気混じりにいう。

「すまねーな。」

ぼうしを深くかぶり、謝る。

「勝手に話を進めないでくれない」

「すいません。」

こんなやり取りをして気がつく、もう応接室にリボンたちはいなかった。

—実歌SIDE—

なんで、夜切さんが応接室にいたんだろう。

でも———

「あ、あのう、リボンちゃん…？」

「なんだ？実歌」

「ツナ達、だいじょうぶかな…」

「（ニッ）大丈夫に決まってるだろ」

「うん…」

—蘭SIDE—

「あの赤ん坊、またあいたいな。」

恭弥先輩、嬉しそうだなあ。

「恭弥先輩。」

「なに？」

「帰っていいですか？」

もうそろそろ帰りたい…

「いいよ。また明日ね」

「はい。また、明日…」

こうして、日常から非日常への進行は続いていく…

第8ワ。 応接室での乱闘（後書き）

感想待ってます。

次回は体育祭です：

『昨日体育祭でしたよね、あなたは。』

そうですが？

『二年連続負けましたよね？』

そうですよ。小学校では、全勝だったのに：

『フッ

さよなら。』

フッってなんだああああ

（以上、しょーも無いコントでした。b y トーヤ）

第97。 体育祭前日（前書き）

体育祭の前日に沙絵が…

第97。 体育祭前日

―蘭SIDE―

「体育祭なんてなければいいのに」

憂鬱―、と嘆く。

「しょーがないでしょ。

一人必ず1種目出なきゃいけないんだからさ」

「そーこーが嫌なんだよ

あーあ体育祭なんてなければいいのに…」

「よっ蘭！」

「ぎ、ギャアアッ!？」

ビククリさせるなよ…

「武…?」

「おう！」

そーいや蘭、おまえ何に出んの？」

体育祭の種目か。

「んー…どーしよっかなあ

うーん…玉入れ、とか…？」

「はははっ

やっぱおもしろーのなっ」

武、なにがそんなにおもしろいのだ。

「なにが？」

「実は蘭、もう競技決まってるんだよ。」

「え…？ナニ？」

「リレー。」

学校中の華だよなっ」

私、グレちゃっていいですか？

「イーヤアアアアッ！！」

悲痛な叫びもむなしく、

「え？知らなかったの？」

演技してるかと思ってた…」

「沙絵までっ

やめてええええっ誰かウソだといって！」

しかし、みんなは「かわいそー」な目で見ていたのだった。

「と、ゆー訳でリレー、無くせませんか？」

「無くせるわけないでしょ」

「やっぱり…」

皆さんのお察しの通り、私は今応接室にいます。

「今日のノルマ、これね」

ドサツとたくさんの書類がおかれる。

「はい…」

カリカリカリ…とペンを走らせる。

「お、終わったあ…」

先輩、帰っていいですか？」

「書類も終わった所だしいいよ

でも今日の放課後來てね『え…』来ないと咬み殺すよ」

「ハァー…分かりました…」

―沙絵SIDE―

いよいよ待ちに待った体育祭。（注・明日です）

気持ちが高ぶっている所で皆々様にインタビューしますっ

「え…オレにインタビュー？」

「まずはこの方っ

何をやってもダメダメ・できないカワイソーな中学生！

沢田 綱吉・もといツナです！」

「うう…分かってはいてもつらい…」

「では、最初で最後の質問です！」

「最初で最後の質問って…」

「Q、今の心境&意気込みを！」

「え…と、棒倒しの大將でガクガクします…」

「ありがとうございましたっ」

「終わるのはやあっつ（ガーン）」

「なんだよ、阿部」

「お次はいつもムッスリしている

ギンパツのボム人間、獄寺 隼人さんです！」

「（ムッスリ…）」

「では質問です！」

Q 今の心境&意気込みを！」

「別に…10代目の勇姿が見ればそれで…」

「ありがとうございましたっ」

「……………」

「極限だあっ！！」

「次はこの方、

並中ボクシング部部长、笹川 了平さんです！」

「うおおおおっ！」

「うおおおーっ

では質問ですっっ

Q 今の心境&意気込みを！」

「うむ…

明日が体育祭か：

極限に燃えてきたぞ！」

「ありがとうございますっ」

「ん？どーしたんだ？」

「次は蘭の親友第二号！

そして野球部のエース、山本 武です！」

「へー、インタビューなんてやってんのなっ」

「はいっがんばってますっでは質問です！

Q、今の心境&意気込みを！」

「うーん…特に無いけど、わくわくするよなっ」

「ありがとうございますっ」

「では最後はこの方っ」

「かたくるしいなあ、さえちゃん」

「(ら、蘭がコワイ…)

で、では質問です…

Q 今の心境&意気込みをどうぞ

「死ね」

「ゲブウツツ」

(腹パンチ炸裂)

「リレーとか、死ねいッ」

(いろいろ壊しまくる蘭)

「あ、ありがとう…

以上、キャラ崩壊している蘭とあたしでしたっ

…ぎゃああああっっっ!!」

第9ワ。 体育祭前日（後書き）

キャラ崩壊した蘭は見ても見ぬフリしてください。お願いします…

感想待ってます。

第107。 体育祭当日（前書き）

10話目です！

第107。 体育祭当日

―蘭SIDE―

「あーあーあー、やっちゃったなあ。

こんなところで群れてるからですよ。せーんぱい♪」

そこに倒れているのは、15人程の不良達。

「うゝ…テメエ…なんだ…？」

「表向きは一般生徒、実は…

風紀委員でーす★」

「な…そんなの、聞いた事ねーぞ!？」

「そりゃそうです。」

不良の腹に拳をあてる。

「誰にも言ってないですから。

誰かに言ったら今度はあなた、首はねます」

グッ

ドサッ

「さて…

いきますか」

—————そこには、白目になった不良が20人いたと言う。

—雲雀SIDE—

「————とゆう訳で遅くなりましたっ！

ゆ、許してくださいs『許すわけ無いよ。』デスヨネー」

不良を取り締まった？蘭が？

でも、遅くなったのは事実。

「ペナルティね。

今から校内放送で蘭が風紀委員ってばらすから。」

「そ、それだけは…！」

「ばらすから。」

満面の笑みで言う。

「あ、それか————」

イイこと思いついたな。

「ま、まさか…」

「今から咬み殺されなよ。」

トンファーを構える。

「い、いやですっ」

「じゃあばらすよ。」

「いっそのことばらされた方がいいですっ」

「ふうん。わかった。」

さて、草壁に放送室に行かせなきゃね。

――蘭SIDE――

私がクラスの応援席に着いた時。

『――――夜切蘭は風紀委員です。』

スピーカーから聞こえたのは、

なんと草壁さんの声。

「え？夜切さんが風紀委員？」

「マジか？」

など、さまざまな声が飛び交う。

「夜切ー本当かよ？」

「ばっばかっ

風紀委員だったらどうすんのよ！」

「あゝす、スイマセンっ！」

「別にいいよ。」

風紀委員ってのは本当だけど、いつも通りに接して？」

「う、うん…」

バンツと勢いよく扉を開く。

「先輩ッ

なにしてくれたんですかつ」

「蘭、言ったよね？」

『いっそばらされた方がいいです』って。」

「う、うわああああ！！」

ニヤ、と笑う先輩。

「二言はないよね？」

「うう…はい…

しつれーしました…」

「ばかだねー、あんた。」

「沙絵っ

なんでッ…」

お。そろそろお昼か。

「フフン、私は雲雀先輩の味方さっ」

「どーゆー意味…」

「そのまんまッ

そういや、つぎリレー（クラスの）だよ？ だいじょーぶ？」

あ、忘れてた。

「あーあ…」

いいながら、ニツコリ。

「うわあああっ」

もちろん、ダッシュしました。

なので、何とか遅刻はまぬがれましたとき★

「おつかれー

すごかったじゃんっ」

そう。

「蘭のアンカー、カッコよかったよ♪

2人抜いたしね。おかげで、1位だしっ」

なんと、私が1，2位のアンカー（30m位離れてた）を抜いたのだ。

もちろん、リレーをやる人たちには、

「手を抜いたら承知しないから。」

と、言っといいたので、実力でとったものだ。

「次、昼飯？」

「そーだけど…」

笹川先輩達、なにしてんだろ…」

それを沙絵達を知る由も無かった……

「やっちまったな。」

私の最初の感想。

「武、がんばってね♪」

「おう！」

次の競技は、棒倒し。

綱吉が変なことやったおかげで、

A組対B・C合同チームになった。

ちなみに綱吉が大将だって？

へー、スゴイネー（棒読み）

相手の大将、誰だろう？

――沙絵SIDE――

「うわー…」

蘭、人事みたいにいわないで。

マジテンションがた落ちだから。

それにしてもがんばるなあ。

風紀委員長・雲雀恭弥先輩が相手の大将なのに。

ツナ、あんなにイタイ奴だったっけ？

あ、騎馬戦みたいなのやってる。

たしかに、落ちなきゃいいけど…

このチームじゃあすぐに…

あ。ほら落ちた。

「あははははははっ

オモロッ」

蘭…

「そんなにおもしろい？」

「アタリマエッ

あっはっははは！」

「ハア…」

こうして、見事にツナ達はボロボロにされて帰って来ましたとさ★

第107。 体育祭当日（後書き）

ようやく10話目です…

カメのように遅い更新ですがなるべくがんばります！

感想まっています。

第117。 風邪、ひきました。

—蘭SIDE—

あゝ…

「はあつくしゅんつつ」

「大丈夫？」

うん…大丈夫じゃないよね。

どー見ても。

最近いろいろありすぎて、こまっています…

武のおかげで行きたくもない

綱吉の救出（結局キャバッローネの罠だった、）に行かされたり、

正月の遊びに付き合わされたり…

全部武のせいじゃね？

とおもうところもあるが、

風紀委員の仕事とかもあって大変だったんだよ…

しかし、やっぱり持つべきものは親友ですね!!

沙絵、すごいやさしくしてくれて…

わたしやうれしいわ…

ピンポン×2

ん？誰だろ…

「あ、あたし見てくるよ。」

「ありがとう。沙絵」

とたとたとた…

「」「」「おじゃまします」「」「」

たたたたたっ

「蘭…お客様、だよ」

「よっ 蘭！」

武？

「お、お邪魔します…」

つ、綱吉？

「ケッ…」

ス…ゴホン。獄寺…

「ちやおっす」

り、リボーン！？

「沙絵…」

「ん？ ああ、よかったねえ。

こんなにお見舞いにきてくれて。」

「よくない…」

はあああああ……

武はともかく、

他はあんまうれしくない…

あげく、

「やっぱメーワクだよっ」

「ナニ言ってるんだダメツナ

ボスがファミリーのお見舞いに行くのは当然のことだぞ」

私はファミリーの一員じゃないっての！

「リボン！夜切さんはファミリーじゃないっての！」

ワカッテルナー、綱吉は。

「蘭でいい…」

「え？」

「『夜切さん』っての、やめてください。(きもちわるい…)(」

みんな蘭って呼んでるし。

「う…うん。

えーと…ら、蘭ちゃんでもいい…かな？」

「うん。」

はあ…

今日はいろいろ疲れたなあ…

でも…

たまには、いいかもね。

第117。 風邪、ひきました。(後書き)

次回は獄寺と仲良くなる…かも？

感想まっています！

第12ワ。 頼られてるのは自分じゃない

―蘭SIDE―

あー、今日もよく働いたなー（強制的に）。

ま、ご褒美として（自分で）アイス買ったし、いっか♪

ん？

ブランコに先客が：

―獄寺SIDE―

10代目が頼りにしてるのは、

オレじゃなくて山本——…

やっぱり————

「やっぱりオレ、一人が向いてんのかな」

「なにしてんの？ 獄寺。」

「!？」

— 蘭 S I D E —

やっぱりあのギンパツは獄寺だったかあ。

「やっぱりオレ、一人が向いてんのかな」

お？ めずらしく落ち込んでる。

「なにしてんの？ 獄寺。」

「!？」

「だいじょーぶですか？」

相当落ち込んでるみたいだけど。

あ、アイスいりますか？」

「な、なんだ、テメー」

「アイス、たべなさい。」

「はぁ！？」

も、モガッ」

「すきあり…です。」

（はぁ！？と言った瞬間、アイスを口にツツコミました。）

「ふう…獄寺らしくないじゃないですか。」

あ、もしかして『綱吉が頼りにしてるのはオレじゃない』とか

思ったりしてんですか？」

「お…おまえなんか何が分かる…！」

「わかりますよ。」

「な!？」

よくわかる…

「自分のボスが頼りにしてるのは違うやつなんじゃないかって
すごい怖くなったりしましたから。」

「…」

お、もう一押しだな。

「でも、問題なのは、

結局自分の意思なんじゃないですか？
諦めたりしない方が、いいですよ。」

「おう…

ありがと…な」

「うん!

あ、アドレス交換しよう!」

「は？」

「いいから！」

そうして、獄寺のケータイを強奪…ゴホン。かりて、アドレスを交換した。

「私の事は蘭でいいから。」

「…じゃあオレのことも、隼人、でいい…」

「ん。わかった。」

あ。そうだ、隼人」

「なんだ？」

「木崎実歌って、どうおもう？」

マジ、嫌いであって！隼人！

あいつ、ウザイよね！？

「あいつか…」

10代目になれなれしくしゃがって、いけ好けねえやつ…」

「だよね！」

いやー武が『べつにフツ』とか言うからさあ…」

「へー…」

「ん…」

そろそろいったら？綱吉んところ」

「そう…だな。」

ありがとな！蘭」

「じゃーね」

隼人と仲良くなった日だった。

第12ワ。 頼られてるのは自分じゃない（後書き）

獄寺と仲良くなったにはなりましたが、そこまではありません。

一応、『クラスメイト』から『トモダチ』にはランクアップしました
が…

第13ワ。 雪合戦！（前書き）

大分更新遅くなりました…

ふかーくお詫びします…

本当に申し訳ありませんでした！

それでは、本文をどうぞ！

第13ワ。 雪合戦!

―蘭SIDE―

「蘭、学校で遊ばねえ？」

「あいにくですがお断りします」

ただいま、武に遊ぼうとせがまれています。

「まーかたい事言うなって。」

「ぜってー楽しいぜ？」

「ふーん…」

おもしろそーじゃん。

行こうよ、蘭！」

沙絵まで…

「私修業あるし…」

サボったらおじいちゃんに殺されかねないし…」

「あ、仁さん？」

じゃーあたしから仁さんには言っとくよ。それならいいでしょ？」

唯一の頼みの綱が…

「オレからもいつとくからよ。」

つぶされました。

「はあ…

わかったよ。いけばいいんでしょ。行けば。」

フフン、やっど行く気になったか。

さて、次はやる気を出させねば。

「蘭く、一緒に遊んでくれたら

アメ5袋買ってあげるよ。」

「（ピクツ）…」

ならば…

「10袋でどーだっ」

「…いいよ。」

そのかわりやるなら徹底的にやるよ。」

さすがあたし。スバラシイ。

— 蘭SIDE —

うむ。まんまとはめられたな。

それにしても、あんなガキ、いたっけ？

毒サソリもいるし：

（いままで完全無視してました★）

「あ、蘭ちゃん、沙絵ちゃん、来てくれたんだ。」

「遅かったのな。」

（蘭と沙絵はアメを買いに行っていたので武より遅かった、）

それにしても：

「なんでこんなにガキが多いんですか…」

「ツナに兄弟なんていたっけ？」

「ガーン（沙絵ちゃんオレの兄弟だと思ってるー！？）」

はあ…アホばっかでやになる…

はやく帰りたい…

結局雪合戦をやることになった。（レオンの奪い合いであるが。）

「東軍は

ツナ・山本・イーピン・フウ太・実歌・阿部だ

白マフラーな

対する西軍は

ディーノ・獄寺・了平・ランボ・蘭だ

赤マフラーな」

ここで隼人が文句を言っていたがあえてスルーの方向で。

「なんで私達のチームが一人少ないんですか？」

「お前とディーノがいるんだ

お前たちは有利すぎるほど有利だぞ」

「ふーん…分かりました。」

その後も、楽しく(?) 雪合戦をやっていたのだが――――

「これでボンゴレ対キャバツローネ…

って蘭！オマエはボンゴレだろーが！」

「いや…なんかこっちの方がおもしろそうだから…」

「オイッまあいい…

…果てろ!!!」

隼人がボムを投げ、ディーノさんが反撃、

さらにはビアンキまででてきた。

そして、レオンの奪い合いがヒートアップ。

今度のレオンは逃げるらしい。

「んじゃ第2ラウンドスタート!」

「面白そーだぜ」

「行きましょう10代目!」

「あー

みんなをランキングしたいよー」

「た…楽しいッ」

「童心に戻るぜボス」

「遊びだからって気ー抜くなよ！」

「おうよ！」

「あ、私休んでるんでー」

と言って（勝手に）休みことにしました★

ーリボーンSIDEー

「…なんで参加しねーんだ？」

「んー…つまらないから、ですかね？」

「お前本当に入る気はねーのか？」

「ありませんよ。」

あとそうですね…強いて言うなら…ここは…

明るすぎる」

「!?!」

こいつ…もしかして…

「まあ、そーゆーのが無くても入りませんが。」

作り笑顔だな…

無理をしているのを、こいつは…分かってねーんじゃねーのか？

「そーか…」

まだまだ資料もたりねーしな。

もう少し調べねーとな…

— 蘭SIDE —

「なにこれ？

あとそのデカイカメ」

「ヒバリさん！

いやあのっ…」

「せっかくの雪だ

雪合戦でもしようかとね」

おー、綱吉あせってるねえ」

ま、カンケー無い、カンケー無い。

「恭弥先輩？」

「蘭かい？まあいいや。」

「蘭ちゃん！？！？」

先輩が綱吉の方を見て、ニヤツと笑った。

不吉な予感！

「君とここで会ったのも何かの縁だ

今日は君を標的にしようかな」

「（超不吉な予感ーーーー！！）」

綱吉めっちゃおびえてるよ。ウケルー♪

先輩がレオンを構える。

「え！

そ…そんなっ

っつかレオン投げてくんのー!!!?!?」

ビュッ

レオンを投げる…フリをする先輩。

「ひいっ！

……………?」

バツカだなー、綱吉って。

「と、思ったけど風紀委員の仕事がたまってる

いくよ蘭」

「はい♪」

後から聞いた話によると、

結局優勝したのはリボンらしい。

第13ワ。 雪合戦！（後書き）

次回はお花見です

ちなみにテスト（もうすぐ）一週間前なので更新は2, 3日に一回になりそうです…

第14ワ。 お花見ですー (前書き)

サブタイトルがフランっぽくなったことについては
目をつぶって見逃してください。お願いします。

第14ワ。 お花見ですー

ー蘭SIDEー

「花見に行くよ」

「はい？」

「今から10分以内に応接室にきてね」

「はい？」

「来なかったら咬み殺すから。」

「はiiiiiiiiiiii!？」

ただいま、絶賛無茶振りをふられています★

無茶言うな無茶言うな無茶言うな無茶言うなああああ!!!!

「じゃーね」

ぶちっと電話をきられた。

「Nooooooooo!!!」

と、言うことでダッシュで着替え&並中に行ったことは、言うまでもないだろう。

「ハー、ハー、ハァー…

なんとか、間にあいました、か…?」

「うん

ギリギリセーフだね

じゃあ、いこうか」

「そーいえば、どこに…?」

行くんですか、という前に、

「行っからのお楽しみだよ」

「そーですか」

言葉を読まれたなあ。はははっ

「じゃあ、いくよ」

「はい」

「おー…すご…」

現在、すっげー桜をみてまーす★

…まあ、こんだけの桜でまわりに誰もいないってーのが悩めますが…
気にしない、気にしない！

「…！」

「？どーしました？

…って、綱吉たちですか。」

向こうにいるのは、まあ言わずもがな。↑（？）

「……………咬み殺してくるよ」

「いってらっしゃいですー」

「あ、あれってシャル…？」

なんでシャルがいんの…？って、保健室にいたか。はははー」

女の子がいない、とかわめいてるし。

あ、殺られた。ザマミロ。

あ、隼人が恭弥先輩と戦ってる。

ムボーだなあ。

あ、ヒザついた。

『ガキンツ』

お、武じゃん。

がんばれー武ー

あ、仕込み鉤なんてあったんだ。

あーあ。負けちったよ。

ドンマイ★

今度は綱吉か。

プツ、はたき？

そんなんじや倒せないのにー。

あ…死ぬ気モードとけたー

死んだな、ありや。

……あれ？

なんで――――

恭弥先輩がヒザをついてるの？

まさか。

脳内に声が響く。

『シャマルの仕業だ。』

『？トーヤ？』

『見てなかったか？』

あいつがヒバリにやられた瞬間虫をとばしてたんだ。

そいつのせーだよ。』

『ふーん…』

『ヒバリんところ行ったら？』

あれ、恐らく『サクラクラ病』だぜ？』

『…！』

うん、わかった。』

「約束は約束だ

せいぜい花見を楽しむといいさ」

「せんぱーい」

「「蘭!？」」

「蘭ちゃん!？」」

「夜切?」

「夜切…さん?」

説明しよう。

上から、武&隼人、綱吉、リボーン、木崎、だ。

シヤマルは問題外なので、あえて伏せとこう。

「いやー恭弥先輩に（無理矢理）連れてこられてねえ…」

「いくよ蘭」

ちよつとイラつきながら言う先輩。

「はいはい」

じゃ、またね」

先輩に肩を貸しながら並中に向かいましたとさ★

第14ワ。 お花見ですー (後書き)

えー、次回は卒業試験です。

なんの試験かはお楽しみです。

感想まっています。

第15ワ。 卒業試験く上く（前書き）

更新かなりおくれました。

すみませんでした!!

第157。 卒業試験く上く

―蘭SIDE―

「卒業試験ですか!？」

「うむ。」

そろそろ時期がきたかの、と思ってな。」

「あ、ありがとうございます!!」

「それでは今夜より試験を開始する。」

一次試験は：

おまえの刀を造れ。」

何がおきたか分からないですよねー。スイマセン。

分かりやすく要点をまとめると：

1 私はいつものように修業をしました。

2 休憩に入っておじいちゃんに声をかけられました。

3 卒業試験をやる、といわれました。

4 卒業試験は、すごく難しいらしいです。父さんは2回落ちたらしいです。

5 修業の中に『鍛刀』も入ってます。（作った刀は薄花桜以外全部折っています…）

6 今は午後3時です。

7 家はすぐでかくて（純和風の家）、鍛刀地なんて所もありません。

こんなかんじですね。はい。

「わかりました…」

「うむ。」

では午後7時に鍛刀地に来い。遅れるなよ」

「はい！！！！！」

—仁SIDE—

ふむ。とりあえず遅れはしなかったな。

「では、一次試験を開始する。

刀を作れ。素材はいつもの様にここにあるものだ。

制限時間は特に無いが…2週間以内で終わらせろ。」

「に、2週間ですか…」

「このくらいで終われないようならワシの…いや、

ヨギリクロガネ
夜切鉄を継ぐことはできないぞ」

「！

………はい」

「よろしい。

では始めろ。時間は待ってくれない。

造り終わったら言いに来い。」

「はい」

さて、蘭は合格できるかな？

第15ワ。 卒業試験く上く（後書き）

鍛刀というのは刀剣を製造することで、

鍛刀地っていうのは刀剣を製造する場所です。

次回は

一次試験の結果と……です。

更新は多分木曜以降になりそうです。

第167。 卒業試験く中く（前書き）

本当はこの話で卒業試験終わらせるつもりだった…のに。

そして更新おくれました。

第167。 卒業試験（中）

―蘭SIDE―

「できた…」

2週間かけてできた刀。

・
・

それは、銀色に輝いてみえる―――…

「こいつに名前つけたいな…

…よし！」

『ギントウ
銀刀 シラザメ
白鯨』

「我ながらまあまあのできばえ…」

「完成したようだな。」

「!？」

お、おじいちゃん？」

「このくらいで気づかんのか。」

まだまだ甘いぞ、蘭。

刀をみせろ。」

「は、はい！」

刀を差し出す。

それからおじいちゃんは何度もうなったりしたが、

「合否は明日の夕飯の時に言う。」

明日は学校に行け。」

「はい。」

「久しぶり！沙絵！武も！」

そこには、かなり長いことあっていなかった友達。

「おう！」

みんな同じクラスになれたしなっ」

「うん！蘭、今日まで何してたの？」

「あー…」

あとで教えるわー…」

「うん！」

放課後。

「え…」

じゃ、その試験のために今まで休んでたの？」

「そーだけど？」

「す、すごいね…」

やっぱり沙絵といると落ち着く…

すると、

『夜切蘭。五分以内に応接室にきて。』

来なかったら咬み殺すから』

えええええー————ツ

ありえねえええー——ツ

と、思ったのは秘密である。

「あはは。

じゃーね。一次試験合格したか教えてね。」

「うう…じゃーね…」

—雲雀SIDE—

「うん。ピッタリだね。

・・・

この件は許してあげる。」

この件は、ね。

「こ、この件はって…

他の件ってあるんですか…？」

「今まで無断欠席してたでしょ。」

「え…？」

それは最初に、

『無断欠席・遅刻・早退と言ったものはすべて免除されるから
的なこと言ってますでしたか…？』

「いったけ？」

「ワガママ王子め…」

なんかきこえたけど、まあいつか。

「とにかく、これから無断で欠席したら許さないから。」

「はあ…」

「じゃあ、そろそろ咬み殺してあげるよ。」

「はい？」

「今まで休んでた分だよ。」

まさか注意だけで帰れると思ってたの？

甘いね。

「いや…「君に拒否権はないよ。」ありますよ!!」

— 蘭SIDE —

やっぱりワガママ王子だ。

すごいダッシュで逃げてきたが、本当に戦闘マニアだな。

まあ、戦っても良かったけど。

…え？ ホントですよ？

嘘じゃないですって。私は嘘をつかないのを信条にしていますし。

本当ですよ。

まあ、そんなことは置いといて。

「二次試験の結果を言う。」

——合格だ。」

「え…？」

「何度も言わせるな。合格だ。」

まあまだ一次試験の、だがな。」

やばい。超うれしい。

「ありがとうございます…！！！」

「この刀。」

蘭の良き相棒になるであろう。

まあ、夜切鉄、そしてわしが造った暗鋼には及ばないだろうがな。

」

「はい…」

「さて。次の試験内容は…

ジュガナファミリーを消せ。」

「はい？」

「マフィアと戦え、と言っている。

皆殺しにしろよ。使う武器はお前が造った刀と暗鋼だけだ。

場所はイタリアだ。詳しくは…着けばわかる。」

「はあ…」

「期限は向こうに着いてから2日だ。48時間だな」

「わかりました…」

『――――と、いうわけでさー…恭弥先輩にいつといてくれない?』

（説明をしたが、もちろんマフィアうんぬんははぶいています。）

『はあああああ…しょーがないな…』

貸しだからね。』

『ありがとう！友よ！！』

ピッ

「ふー…これで咬み殺される心配も無いだろう…」

—???—SIDE—

『わかりました。こっちはいつでも準備万端です』

『助かる。蘭を…いや、——をたのむ。』

『蘭でいいですよ？』

…じゃあ、待ってます。』

…ひさしぶりだな。

「たのしみにしてるぜ…蘭」

第167。 卒業試験（中）（後書き）

次回は卒業試験を終わらせます。

感想まっています！

第17ワ。 卒業試験（下）（前書き）

長くなりました…

そしてテスト（昨日）終わった…

第17ワ。 卒業試験（下）

（蘭からの前書き）

いまの装備です。

いつも通りの羽織に、左腰に白鯨と暗鋼、背中に薄花桜です。

それでは、本編をどうぞ。

――蘭SIDE――

イタリアにつくと、そこには黒いマントを着、片目を髪の毛で隠した赤ん坊がいた。

「セジル…師匠…？」

「久しいな、蘭。」

「師匠がなんでここに…？」

「ん？ 仁さんに聞いてなかったか？

ああ、オレとは分からなかったただけか。」

そう、ここにいる赤ん坊——もとい、アルコバレーノである——
——は、

蘭の（剣術以外の）師匠である。

「いやその…」

「まあ、細かいことは気にすんな。めんどーだしな。

敵のアジトの場所は分かってるから、明日の昼にいくぞ」

「？ 暗闇のある今の時間帯の方がいいんじゃない？？」

「バカだなあ蘭は。」

「はい？」

「敵さんが本気でこれる時間帯じゃないと意味がないだろ？」

ニヤリ、と不敵な笑みをみせる。

「……………」

しかたないか。この人はこういう人だ。

やれやれ、とでもいいたいが…やめておこう。

「じゃ、今日はオレン家こいよ。

それにしても6年ぶり…か？

お前があいさつに来て以来だよな」

「…はい…

いろいろありましたから…」

「つと、そろそろ行こうぜ。」

「はい！」

次の日。

「ここがジュガナファミリーのアジトか…」

「なんだ？緊張してんのか？」

「いえ。楽しみです♪」

「ん、じゃあ大丈夫だな。」

がんばれよ。ピンチになったら助けてやるから。」

「師匠は戦わないんですか？」

「それじゃあ試験の意味ないだろ」

なるほど。

「いってきます」

「おう」

簡単にあいさつをすませると、

堂々と見張りのうじゃうじゃいる正面玄関に向かった。

「なんだお前は。」

ここは一般人が来るところではない。帰れ」

「なるほどね。所詮は見張りつてとこか。」

「…何を言っている？」

「貴方の腕はいただきました。」

ついでにお命頂戴します。

白鯨のデビュー戦です。しっかりと私を苦戦させてください。」

「調子に乗るなよ、ガキ…が」

ゴブツツツ」

蘭の前にいた見張りが血を吐いた。

しかし蘭の目には――――

何も映っていない。

ただただ目の前にいる人を殺す機械みたいに――――

見張りを全て殺した蘭は、

「これでぜんぶ？

ああ、なかからひとのおいがする。

ぜんぶころさなきゃ。」

『ぐあああつ』

ザシュッ

『だ、誰だ！？

うわああああつ』

ドジュッ

よわい。よわすぎる。

もっと、つよいやつと――――。

もつと、もつと血を――――。

バンツツ

「?」

大ホールの大きな扉から出てきた、それ。

『お前か…我が同胞達を葬ったのは…』

「そ。よわすぎ。てごたえない。」

『…我が主の命により貴様を――――殺す!!』

ようやくでてきたよ。ほねのありそうな剣士のやつ。

でも、さんねんだよ。

せんとうたいせいになると、わたしのかんじようはきえる。

「さよなら。」

瞬間、2人同時に駆け出す。

『うおおおおお!!』

ギイイイイイン!!!

『(くっ…こいつ…

この体のどこにこんな力があると…!?)』

「…………しね」

白鯨を右手だけに持ち、左手で暗鋼をぬいた。

『!?!』

目の前にいる男は、なんで、と言うような顔になる。

『く、そ…………』

ドサッ

ス……

「おもしろかったですよ。」

でも、まだまだじつりよくぶそくです。」

『エディアル…？』

貴様…エディアルを…』

「すみませんね。」

これは【試験】です。しかたないんですよ。」

『試験、だと…？』

「おっと。むだばなしはここまでにしましょう。」

あなたが【ジュガナファミリー】のぼすですね？」

『そうだ。』

エディアルの敵、討たせてもらう』

グシュッ

「よわ。

さっきのひとのほうがつよかったなあ♪

さてと…のこりもかたづけるか。」

午後4時〜セシルの家〜

「おつかれ。」

「どーだった？」

「弱すぎてビックリしましたよ。」

薄花桜も使わなかったし…」

「そうか。」

じゃあ明日帰るのか…」

どこかさびしそうな目をする師匠。

「まあ、何はともあれ2次試験合格だ。おめでとう。」

「ありがとうございます！」

「今日はゆっくり休め。明日帰るんだろ？」

「あ、はい…」

でも、もうちょっとだけ…あと1日ここにいたいんですが…」

ちょっと驚いた顔をする師匠。

「わかった。」

仁さんにはオレから言っておく。

2時間くらいでご飯できる。ねてろ」

照れてる。

ちよっとおかしいな♪

それじゃ、お言葉に甘えて寝よう…

—
仁
S
I
D
E
—

「おかえり。蘭」

「はい。ただいまです」

もう、戦闘に関しては大丈夫だな。

「まずは2次試験突破おめでとう。

3次試験だが…」

「はい…」

「3次試験はもう合格している」

「はい？」

「3次試験は…精神の強さとやさしさ。

蘭はもともとから備わっているし、なによりセシルにみせたからな」

「ということは…」

「ああ。」

蘭は正式に、『夜切鉄』の後継者になった。

おめでとう」

「ありがとうございます!!!」

「学校にもクナイと中剣以外の武器も持っていていいぞ。

街にも同様に、な。

それと…」

差し出したのは、刀が入る円柱状のケース。

「これは蘭専用のだ。

蘭以外の奴には開けられない。安心しろ」

「はい…ありがとうございます…」

合格おめでとう、
蘭

第17ワ。 卒業試験（下）（後書き）

感想いつまでも待っています…

第18ワ。 海だ海だ海だッ!!!

―蘭SIDE―

「うみ？」

「そ。海。

一緒にいかね？」

武？

絶対なんかあるよ。

最近武といるとどたばたするよ。

「だれが来るの？」

「んー：

オレとツナと獄寺と笹川と三浦と木崎と…そんなくらいかな。」

ゲッ木崎!？」

「木崎いんの!？」

じゃー沙絵も誘っていいならいく…」

「おう!

いいぜ!じゃあまた今度なっ」

「あいよー」

あ。風紀委員の仕事…

ま、いっか♪サボろ♪

「わー…海だ…」

「海か…蘭と来るなんていつぶりかな？」

「さあ？」

「あ、武たちだ」

うわ、ライフセイバーという名の不良に（？）からまれてる。

めんどっ

「お、蘭！ごめんな」

「なにが？」

こんくらいの不良、すぐかたずく…？」

「うひょーっ

この娘もかわいいぜッ」

「や、やめてくださいっ」

沙絵がからまれとる！

「沙絵！？」

このやろ…死ね！！！！」

ドカツと、ニブい音がして、

沙絵にからんでいた奴をたおした。

「てめ…このやr「そつちがさきに手えだしたんだろ！」…」

フンっまだまだ私には口で勝てないな。

そんなことをしてるうちに、

武たちが3対3で水泳のバトルをやるみたいだ。

楽しそーだが、

「武ー、私達その辺の海の家でなんか食べてるからー」

面倒な事はしたくないしねー。

「おーわかったー

じゃああとでなっ」

「んーりょーかい♪」

「蘭ー、向こうで応援しなくてよかったの？」

カキ氷をたべながら言う沙絵。

「木崎もいんじゃない。

だからいいんだよ…」

「ふうん。

もしかして…」

やな予感…

「仕事から逃げたくて海にきたんじゃない…」

「は、はて？

なんのことかな？」

ば、ばれた！？

「何年一緒にいるとおもってんの？」

心よまれた!？

「顔に書いてあるし。」

また!？

「あれ？

獄寺クンと山本、帰ってこないね？」

「え？」

なるほど、たしかに武と隼人がいない。

「ちょっと見てくる？」

「うん、いく。」

綱吉が頑張ってるー…

ま、がんば★

「夜切さんと阿部さん！

どこいったの？」

チッ

話しかけんな、カス！！！！

「答える必要はないし。」

「なんで私がそんなに嫌いなのです？」

「おまえみたいにウザイ奴はきらいだ。」

「……………」

キツパリと言われて少し困惑しているが、

どーでもいいし。

「少年が持ち直したぞ！」

んん？

綱吉がなんか子供を助けてるよ。

『ジャマだ！！！』

不良のボス（？）が倒された！！

不良の群れはどうする？

←

1. 逃げる

2. 逃げる

3. 逃げる

と、
いうことで逃げていった不良たちでした★

楽しい楽しい思い出が一つ増えましたとき★

第187。 海だ海だ海だッ!!! (後書き)

感想待っています♪

第197。 夏祭りだって。 (前書き)

更新大分遅くなりました…

第197。 夏祭りだって。

—蘭SIDE—

「そうだ。」

今日夏祭りらしいじゃないか。」

「え？」

そーなんですか？」

「たまにはそういうのも行ってみたらどうだ？」

意外だなあ。

おじいちゃんがそんな事言うなんて。

「うん。」

じゃあいく…ね？」

「うむ。着替えてからいけよ。」

「分かってまーすッ！」

楽しみだあ…

—沙絵SIDE—

「あれ？蘭？」

「ん？」

そこには、

なにやらめっちゃたくさん
の景品やらたこ焼きやら
を持った蘭がいた。

「はれ？なんれ沙絵がいるん？」

「蘭こそなんでそんなに持つてるのよ…」

あたしはフツ―に祭りを楽しみに来てるだけだけど…」

「ほー…」

そーいやあ聞いた話だと武と隼人が屋台出してるって聞いたんだけど…」

あー、あのチョコバナナ屋のことか。

「それは…」

「まあそんなことは置いといて屋台巡るぞッ！」

あ、沙絵も来る?」

「はあ…行くよ。」

「『はあ…』ってなんだ!はあって!」

ギクリ。

ばれていたか。恐るべき蘭。

「実は心も読めるのだ！

『恐るべき蘭』はやめて！傷つくから！」

なにっ

やっぱり恐るべき蘭。

「あ、雲雀先輩だ。」

「えゝ…マジ？」

「ほら」

指された先を見ると、

『やめてください！ちゃんと払いますから！』

ドカッ

バキッ

なるほど、なんかお金を払えなかった屋台が文字通り潰されている。

「『ドンマイ★』だねえ」

「いやいや、『ドンマイ★』じゃないでしょ！」

「いや。実際ドンマイじゃん」

まーそうだけど…

「あ、もうこんな時間！」

「ゴメン蘭！もう帰るね！」

「すまない！蘭！」

そうして沙絵視点終了。

「はやっ！ー！！」

――蘭SIDE――

「よっ 恭弥先輩♪」

「何？」

相変わらずだなあ。

「何って…」

集金のお手伝い「しなくていいから。」…

じゃあついて行きます！」

「…勝手にしなよ。」

「へーい♪」

よしっ

ナイスッ♪

「すんませーん…

ちよつと射的やって来るんでー」

「勝手にしなよ」

「ラジャー♪」

「もう勘弁してください！」

「?あと一発じゃないんですか？」

そういう蘭の横には、たくさんの景品が。

「お助け〜！」

ドカツ

バキッドン！

「いつまで見てるつもりなの？ 蘭」

「あれ？ やっぱバレてました？」

「「蘭！？」」

「蘭ちゃん!？」

みんな驚いてんねえ：

「ああ、そのお金が売り上げ？

奪うの手伝いましょーか？」

「なっ」

「なに言つてやがる！」

「なあっ（ガーン）」

「余計だよ」

む…

「じゃあ武たちの手助けしますよ？」

「…いいよ。」

「咬み殺してあげよう」

「できますかね？」

お互い同時に走りだす。

ギイイイイイイン…

「ワオ

なかなかやるね、蘭」

恭弥先輩は『なかなか』としか思っていないか。

ザンネンだな。

「すごい…」

「ッ……………」

「スゲーな、蘭…」

この三人に関してはやれやれ…としか言いようがないなあ。

「（あの刀は…）

おい夜切」

「？なんですか？」

「その刀…『ストップ！！！』？」

「この刀を見せてる時点でちょっとダメなんだ！

勘弁してちょ」

「…分かった」

「さあ武たちはその金持っていきなよ」

ハッと今さらながら気づいたように、

「あ、…ああ！」

と言った。

「君があのだ食動物達を逃がすなんてね」

「自分でもビックリですよ」

そういう二人はあちこちに傷がある。

「恭弥先輩さらに強くなりましたよね」

「ナニ当たり前のこと言ってるの？」

フ…やっぱりオモシロイな。

「…いえ。」

特に意味はありませんよ。

……きれいですね、花火」

「……………明日は並中に来てね」

はい？突然ナニを…

「書類とかやってもらおうから」

「……………」

次の日、

並中に蘭が行かなかったのは言うまでもないだろう。

第207。 となり町からの襲撃…!

「■■■■…■■■■…!」

少年は、泣いていた。

目の前に倒れている少女の為に。

「■■■■を助けたければ、おまえは————となるのだ。」

「!？」

…そうすれば、■■■■を助けられるのか…？」

殺気混じりにいう少年。

それに笑って答える青年。

「ああ。■■■■は助かる。」

その代償にお前は自由を奪われる」

「■■■■が生きるなら…」

こんな命、惜しくない!!!」

その目にあるのは、確かな強い覚悟。

「フ…いい意気込みだ。」

そして、少年は――

―蘭SIDE―

「え？

コクヨウ…ですか？」

「うん。

黒曜ね。」

最近、見てなかった夢みたり、黒曜ってところから並中生に攻撃があったり…

やな予感しかない…！

「行くよ。蘭」

「どこへ？」

聞いてもあまり意味のない質問をしてしまった…

「決まってる。」

黒曜だよ。他にどこか考えられるかい？」

「ソーデスヨネ…」

この戦闘狂に何を言ってもいみないか。

「？なにか言った？」

「イエイエイエ！」

なにも言ってますんよ！」

「じゃあ行くよ。」

30分後に黒曜ヘルシーランドに来て」

「はい♪」

〈30分後〉

「うん時間ぴったりだね

ところで蘭はなんで着物なの？」

そう。

いまの蘭の装備は、修業の時と同じ格好なのだ。

「なんでって…

これがフル装備状態ですから」

「そう。ならいいけど。」

中の獲物は全部僕が殺るけどいいね？」

「どうぞ。お勝手にしてください。」

ドカツ

バキッ

ドオン…

「いやー…

気合入ってますねー先輩ー…」

「行くよ

そろそろ一番奥地だ」

『嫌な予感がビンビンするぜ…』

行かせていいのか？ 蘭』

『…うん。いいんだ。』

まだまだ恭弥先輩には強くなってもらわないと。』

『性格悪いなオマエ…』

『クフフフ…』

「！？」

奥の部屋から…！？」

ダッ

「恭弥先輩!!?」

「う…ッ」

そこには、屈辱だ、というような恭弥先輩と――――

「脱獄者、

——六道骸、か」

「クフフ、そうです。

初めまして、夜切蘭さん」

「目的はなんだ」

「ボンゴレ————、と言ったら分かりますか？」

そういうことか。

ならば————

「なら、もう貴様に用はない。

先輩を連れて帰らせてもらう」

倒れている先輩を見ながら言う。

「クフフフフ：

そんなに殺気が出ていては信用できませんよ？」

「なに言ってるの？」

「？」

そう————

「まだ私の1割程の殺気しか出てないよ？」

「!!!!!!」

ですが、この風紀委員長はここにいてもらいますよ」

「!!」

……そうか…

「勝手にしてください

私は…そうですね、ボンゴレをしばらく見る事にしますよ

すみませんね、先輩。そういうコトなんで。

………ではまた…」

「やはり並盛中1位は伊達じゃないね…」

「クフフ…そうですね。」

ですがそうじゃなくては面白みが無いでしょう？

…君の身体も手に入れて見せますよ…夜切蘭――――」

第20ワ。 となり町からの襲撃…！（後書き）

蘭「そーいや矢川って番外編やらないよね」

矢「スイマセン、ぶっちゃけ20話目あたりでやろうとしてたんですが…」

蘭「タイミングを見誤ったな」

矢「スイマセンでしたあああ！」

蘭「と、いうわけで黒曜編終わった辺りで番外編やるかもー、なん
で」

矢&蘭「よろしくお願いします！」

…ちなみに、蘭は次回で〇〇〇に？です…

第21ワ。 トーヤの傍観く上く(前書き)

前フリだけです…

スイマセン!!!

第21ワ。 トーヤの傍観く上く

―蘭SIDE―

ドーモドーモドーモ！

前回は恭弥先輩を見捨てちゃった（？）夜切ですツ★

いやー焦りましたよー…負けちゃうんだもん。

『いい加減本編にまわれよ！』

すいませーん

じゃー本編をドーゾ！

あれは…

『すべりこみセーフってとこだな』

武！！！！

『山本お！』

『結局学校半日で終わってさ』

通りかかったら並中生がケンカしてるっつーだろ？

『獄寺かと思ってよ』

なるほど…

で、その隼人が怪我してるんだ…

心中穏やかじゃあ無いだろな

スケダチ（？）してやろつと

「武！」

「!？」

だれだ…？」

「1位って言ったら…分かりますよね？」

「そうか…と言うことは

そっちのお前は並盛中学2―A出席番号15番山本武…」

武は3位…

「だったら何だ」

「武は違う奴が倒しに来るらしーよ

ま、信じるも信じないも貴方しだい…

じゃーね…また後で。」

「おいっ蘭っ！」

ま、その間に柿本って奴は行ったぽい。

別にカンケー無いが。

あ。隼人平気かな。

まあ無事だとは思うけど。

…てなわけで、家に戻った蘭でした♪

―ト―ヤSIDE―

『なあってえ…』

『ん？』

『おまえはいつつも人任せ…』

オレ、今すつげえおちこん…いや、失望(?)している。

『ハア…』

で、いくんだろ？アイツラんところ』

『うん…でさあ…』

『お前の考えは分かってるよ。』

オレに山本とかを頼むんだろ？』

『うん…ゴメン。』

よろしく頼める…かな?』

「ああ…お前が望むなら大抵のことはできる…」

蘭――――

…お前の為なら。

いつものフザけた面をつける。

黒いコートに黒い半袖のシャツ、黒い長ズボン。

コートの内側には、鎖鎌。

蘭がいつも持ち歩いているものは、大抵持っていく。

「じゃあ、行きますか…！」

第21ワ。 トーヤの傍観く上く（後書き）

スイマセン…

見事に前フリだけで終わってしまいました…

感想まっています…

第22ワ。 トーヤの傍観（中）（前書き）

ぎりぎりっ
ス…

第22ワ。 トーヤの傍観く中く

ートーヤSIDEー

現在オレは沢田綱吉達を待つて黒曜ランドにいるぜっ

お、来た来た来たッ！

『よし、頂上を目指しつつ建物をしらみつぶしにしていくぞ』

いやーそれにしてもリボーンは冷静な奴だなあ

沢田綱吉はおびえてるし、山本武は楽しんでるし…

変なやつらだ…

んで、沢田綱吉が言うには、

ゲートを入ってしばらく行くと、ガラス張りの動植物園があるらしいが…

そんなもん、見あたらねーぞ？

お次は山本武が犬（？）の足跡を見つけた。

木の幹がえぐられたりもしてゐる…

『氣をつけてください！』

なんかいる！』

すると、犬（狼？）が数匹襲い掛かってきた。

どうやら狙われてゐるな。

『かかったびよ——ん』

突如人（？）が出てきた。

ねらいは、山本武…か？

『うわああっ』

案の定なんかの下に落ちた。

じゃあさっき沢田綱吉がいった動植物園か。土砂の下に埋まって

たんだな。

『なんだあれ！？』

け、獣！？』

下までだいぶあるらしいから手はだせねえらしい。

『あれ？』

人だよ……人間だよ！！』

『黒曜の制服！！』

ふーん…黒曜の人間か。

おもしろそーだが…

ガキンッ！！！！

ん…今の音…刀が、折れた…？

『ひいつ

木とかえぐったのあの人——！？』

『ありや人間じゃね——！！』

呪い？呪いか——！！？』

なんかスゲー事になってんな…オイ。

あ、獄寺がボムを持って——しまった。

結局なんなんだよ！！

『刀を折られて圧倒的に不利』らしい。

リボーンいわく、山本武は体をかばいながら戦っている。

『山本君！がんばって！』

…今の言葉は聞かなかった事にしよう。

あ、沢田綱吉がおちた。

ナニを考えている？

『うぎゃあああ！！！』

げふっ
』

あーあ。ドンマイじゃん。

それにしてもさっきから『うぎゃー』とか聞こえるけど…
どーなってんだ？

『あいつハナから腕一本くれてやるつもりで…！！！！』

何い！？なにやってんだ山本武！

蘭に心配かけさせんじゃねーよっ

なにはともあれ、敵を倒せてよかったな。

ちなみに、リボーンが言うには、

今倒したのは主要メンバーの一人、城島犬って奴らしい。

山本武が死ななくてよかったぜ。全く…

『六道骸やっぱ怖えー!』

……沢田綱吉、ビビりすぎだろ。

あー、かなり歩くのおせーな。（トーヤは歩く早さがはやいのです。）

弁当開けやがった…

いらいらする…！

『グツグツグツ…』

ん？ 弁当が…

『ボンッ』

爆発した！？

ああ、敵さんの攻撃か。納得。

『そこか！』

獄寺隼人が場所を突き止め、そこから黒曜の制服を着た女が。

クラリネット……武器、か？

いや、それにしてもこの辺はつまんねー。（オレにとっては）

よし、飛ばします★

最終的に、ビアンキが『千紫毒万紅』という技を使って、勝利。

んで次の資格が来てあっさり倒した（ちゃんと覚えよ！！by蘭）

『隠れてないで出てきたら？』

ば、バレてる！？

でも違う方向向いてるし…

『フウ太！』

ランキングのフウ太か…

ま、その辺もおいといて。

うおっ鉄柱！？

あ…アレ？

ランチア…？随分久しぶりにみるな…

『六道骸！』

何をいつてんだ？こいつら…

…もしかしてランチア…あん時から…？

それにしてもまずいな。

『これでわかったはずだ

貴様らに生き残る道は無い

希望は捨てろ』

かっくいーねー…

『くそッ

…こんなときに蘭がいれば…』

おいしいいいッ

人任せかよっ

げほん。話がそれた。

ん、千蛇烈覇はかろうじてよけたか。

でも…

暴蛇烈覇はよけられなかったか…

ここでリタイアだな。山本武は…

獄寺隼人も戦えないっぽいな。

『コラァ！！！！何やってんだ————！！！！』

お、沢田綱吉とーじょーっ

んで、死ぬ気になった。

あいつにはハンパなやつはかてねえよ

お、飛蛇烈覇は跳ね返したか。

こりゃあすげえ。

でもランチアはもう本気で行くっていつてる。

もう勝ち目は無い…か？

『フィニッシュだ』

ドガアッ！

……マジかよ？

アイツが出て来やがった…！

『あんたはそんなに悪い人じゃない』

――！！

こいつ…！

『殺しはオレの本心だ！！！！』

『ウソだ！！！！』

これでケリがつく…

『黙れ小童！！！！』

『死ぬ気で倒す！！！！』

ドツツ

…………まさかランチアが負けるとは…

先骸んところ行くか。

「よ♪」

「誰ですか？ 貴方は」

あー…自己紹介めんどい…

「オレは…トーヤ…て言ったら分かるな？」

「!？ トーヤだと!？」

…なるほど。そういうことですか」

一瞬で理解してくれたな。

よかった。

「安心しろ。

オレはこの戦いに手をださねえ」

「よかったですよ。

では、見ているだけなら、どこにでもいてください」

「サンキュ♪

じゃ、そーするわ」

テキトーに身を隠し（誰にも見つからないとこだぜ？）

気配を消した。

それからまもなく、沢田綱吉達がきた。

第22ワ。 トーヤの傍観（中）（後書き）

感想まっています

第23ワ。 トーヤの傍観く下く（前書き）

更新遅くなってすいません。

本当は昨日する予定だったんですが…本当にごめんなさい。

では、23話をどうぞ！

第23ワ。 トーヤの傍観く下く

―トーヤSIDE―

おお、来た来た。

それにしても六道骸がもうすでに沢田綱吉と接触済みだったのか。
でも、まだ沢田綱吉は気づいて無いようだな。

『ゆっくりしてってください』

君とは永い付き合いになる

ボンゴレ10代目』

なぜ？ってカオしてんな。

うけるぜ♪

『そう』

僕が本物の六道骸です』

『な…』

はあ————!!?』

そして、扉からフウ太が出てくる。

『フウ太！』

お…驚かすなよ』

『無事みたいね』

マインドコントロールされてるって気づいてねーな、ありや

『あの後随分探したんだぞ』

『危険だから下がってなさい』

フウ太が三叉の槍を構える。

そして――――

『フウ…』

ドッ！！！

ビアンキに、三叉の槍が刺さる。

リボーンも沢田綱吉も驚愕している。

『ビアンキ！』

何が何だか分からない状態だ。

あははははっ

お腹イテー（笑）

沢田綱吉を襲うフウ太。

んで、ようやくリボーンがマインドコントロールされている、と言
い、

跳ね馬にもらったらしい鞭を渡す。

そして、なんだか知らねーが六道骸を直接狙う気になった。

でも、自分に返ってくるという、何とも面白い図だ。

あ、フウ太まで絡まってる。ラッキーだなあ。

ん、なんか掴んだな。沢田綱吉。

『おまえは悪くないぞ』

『！』

『全然おまえは悪くないんだ

みんなフウ太の見方だぞ

安心して帰ってこいよ』

ふうん…

マインドコントロールを解く【一番望むこと】を言い当てたか…

同じ事を六道骸が思っている気がするが、気にしない！

フウ太がクラッシュした。

まあ、そのあといろいろあって、

六道骸が第四のやつスキル、修羅道の格闘スキルを解放した。

『六道輪廻という言葉を

ご存知ですか？』

『人は死ぬと生まれ変わって

地獄道 我鬼道 畜生道 修羅道 人間道 天界道のいずれかへ
いくというやつだな』

『僕の体には前世に六道すべての冥界を廻った記憶が刻まれている
してね

6つの冥界から6つの戦闘能力^{スキル}を授かった』

化けモンだなあ。

オレも十分化けモンだが。

『いきますよ』

…幻覚か…………

うむ、見事なビビリっぷりだ。

みてて爽快だぞ！

んで、『オレはツナの家庭教師だ』とかぬかしやがる。おもしれえ…

それにしてもどいつもこいつも『掟』『掟』って…

うるせえんだっつーのッ

2のスキルを解放して、倒そうと試みるが…

キン！

！？

トンファー！？

『ヒバリさん！！！』

獄寺君！！！！』

どうやら城島犬、並びに柿本千種は倒されたらしい。

そして、六道骸と雲雀恭弥が戦い、

雲雀恭弥が勝利する。

『クフフフ』

銃口を自分に向けるヤツ。

『A r r i u e d e r c i
またあいましゅう』

でも、まだおわんねえな…

気がまだ残ってる…ビアンキ辺りから感じるな…

案の定ビアンキだった。

でも、獄寺隼人が契約され、一気に不利となった沢田綱吉。

リボーンは、六道骸が自分に撃った弾が憑依弾ということに気づいたようだな。

そして、六道骸がビアンキたち（雲雀恭弥はのぞく）にのりうつる。
もちろん、城島犬らもいる。

んー、ちょっとやばいって思ってたのかなー…

跳ね馬も超えてきた道——、まあ、ピンチのことだが。
それをこえろ、といっている。

『骸に……』

勝ちたい——…』

ふうん。

あんなんでも、ナマ言うモンなんだな。

くレオン羽化く

あら不思議。なんだ？これ。

なんか新しいアイテムをだした。

なんだ？てぶくろ…？

ギイン！

と、特殊弾か。

ドオオオン！

さすがはリボーン、はやいな。

あー、スッゲー『サイアク…』って目えしてる…

『オレの小言は言うまでもねーな』

…てぶくろが…

グローブに変わった!?

…小言弾っていいのか…

あなどれねえ…わけでもないが。

超直感…やっと目覚めたか…

獄寺隼人、ビアンキを打撃で神経をマヒさせた。

『出てこい骸』

生きてるんだろ?』

起き上がる六道骸。

人間道はもつとも醜く、危険なスキルらしい。

できれば発動させたくなかった、ともいつている。

右目に五の文字がうかぶ。

全身に黒い…黒いオーラが出る。

吹き出すオーラが強さ、と言っているがオレはそうには思えねえな。

んんんん

そろそろつまんなくなってきたなあ…

『なー蘭ー…』

乱入していいかー？』

『勝手にしなよ』

でも仮面はとったりしないでね』

『あたりまえ…』

武器も鎖鎌だけにすつから、バレる心配も無い』

『OK』

暴れてきなよ』

『おう（つつてもそんな大暴れはしねーが…）』

お、おわつとる。

もう勝負ついてんしいいっ！

『そこがオレの居場所だから』

「おい」

「「「「!?!?!?」」」」

「だれだ、おめー」

「トーヤ、って言やあ分かるな？」

ま、沢田綱吉以外は、だが。

「そんな事あるはずねー。」

トーヤは、あの事件で死んだはずだ」

「だがこうして生きている」

「あ、あのう…」

なんだ…？

「あなたはいったい何者なんですか…？」

「知らなくていいことだ

もし知りたかったらその家庭教師にでもきけばいい」

「……………」

ん、この気は…

『ガチン』

『ガチン』

『ガチン』

「ヴァインデイチエ復讐者か…久しぶりに見るな…」

「貴様は…『STOP』…！」

「今は何もすんな」

「…いいだろう…」

ふ、リボーンのやつなんであってカオしてんな。

「おい六道骸！」

起きろ！」

ペチン、と頬をたたく。

「う…」

ああ、君ですか…」

「ああ

けっこうおもしろえ戦いだってたぜ

ナイスファイト！」

「…君に言われるのは嫌なきぶんですね…」

皮肉のつもりですか？」

「んーまあそんなところ」

「トーヤ…そろそろ連れて行かせてもらおうぞ」

「ああ…」

じゃあな、六道、骸…」

…行ったか…

でも問題は…

「…お前、何者だ？」

トーヤは、死んだんだ…5年前に…」

「はあ…

ま、いちいち気にすんな！

メンドクせえからな！」

「…分かった

でもお前の正体はいずれ暴いてやるからな」

「ま、せいぜい足掻けよアルコバレーノ」

「じゃあそうさせてもらうぞ」

「ああ、そうだ、沢田綱吉。」

お前もそろそろ本気でファミリーを…

マフィアのことを考えろよ

じゃあな」

そうして、オレの傍観は終わった…

第237。 トーヤの傍観く下く（後書き）

感想心よりお待ちしております！

ウラバナシ1. 凧と遊びました♪(前書き)

番外編です。

ちなみに『ウラバナシ』とは、番外編のことです。

ウラバナシ1. 凧と遊びました♪

—蘭SIDE—

「あ、凧！」

遅くなってゴメン！」

「あ…大丈夫…わたしも、今来たところだから…」

絶対『今来た』わけじゃないな。

それにしても、凧から連絡が来るなんて、嬉し過ぎた。

それは昨日の夕方に来た————一通のメール。（その時の様子をレッツリプレイ）

P P P P P …

ん？

誰だろ？

宛先 蘭

内容 明日って空いてる？

もし良かったら遊ばない？

— E N D —

風からメール！

モチ行く！

宛先 風

内容 もちろん行く！

いつもの公園に11時位？

—END—

PPPPPP…

返信はやッ！

宛先 蘭

内容 うん…その位が良いと思う

じゃあまた明日…

—END—

いよっっっしやあ！！！！

あゝ、早く明日になんないかな〜♪

と、言う訳で現在に至ります。

「…どうしたの？」

あ、ボーっとしてたか。

「ゴメン、ちょっとボーっとしてた。」

「…大丈夫？」

「大丈夫大丈夫！」

さ、どこ行く？」

「じゃあ…」

商店街とか…」

商店街か。

「うん！じゃあ行こう！」

移動している時も、結構しゃべれた。

風はかわいいなあ…

商店街に着くと、（ご飯と一緒に食べてから）こじんまりとしたカワイらしい店にはいった。

「おー…

あんましこういう店には入ったことなかったけど…

案外いいものだなあ」

「蘭…これ…」

凧が指したのは、

藍色の小さな羽根がついたものと、同じもので羽根が黒い、紐のついたものだった。

「……かわいい」

「…蘭とおそろいで欲しくて…」

うれしいこと言ってくれるなあ。

マジで。超うれしい。

結局、 凧は藍色の羽根の方、 私は黒の方、 ということになった。

その後、

また色々店を回ったが買ったのはあの羽根のやつだけだった。

「ありがとう！」

凧とおそろいで買えて、 嬉しかった！」

「うん…私も…嬉しかった。

ありがとう、蘭」

「いやいや！

それより、時間はまだ平気？

もうすっかり暗くなったけど…？」

「あ…ごめん、蘭

そろそろ帰るね…」

「うん。

また遊ぼうね。」

「うん

じゃあまたね…」

「バイバイ！」

ちなみにこの日買った羽根のやつは、

白鯪の縁にまいたとかまいてないとか。

ウラバナシ1. 凧と遊びました♪(後書き)

次回も番外編です…

感想まっています！

ウラバナシ2. 試験後の蘭（前書き）

今回は誰視点でもないです。

二人の場合だけ入れました。

ウラバナシ2. 試験後の蘭

―山本武の場合―

「お。蘭―」

話しかけてきたのは、山本。

何の用か、と思った蘭。

「何？」

「いや、その長いケースってなんだ？」

「ああ、これ？」

そう言って肩から提げていた長い円柱状のケースを前にだす。

「これは…私のぶ……やっぱ内緒！」

「なんだよ、それ。」

「気になんだろ？」

「あはは。でも教えない♪」

「そっか。」

「ならいーや。」

――雲雀恭弥の場合――

「何？」

「そのケース」

「このケースですか？」

山本と同様に蘭に聞く雲雀。

「このケースはですね…」

「何だと思いますか？」

「さあね

教えてよ」

なんか今日は素直だなあ、と蘭は思った。

「これは武器…

刀を入れる私専用のケースです」

「へえ…

じゃあ咬み「お断りします」…君に拒否権はないよ

咬み殺す！」

ビュオッ！

「わあっ！」

と言いながらも振り下ろされたトンファーを避ける蘭。

「危ない、危ない…」

「大人しく咬み殺されなよ」

「嫌ですっ」

ブンッ

「げっ（しょーがない…）」

キイイイイイイイン……

その瞬間、雲雀は嬉しそうな笑みを浮かべる。

「…どうしました？」

「君のその刀…」

「こいつですか？」

これは…『暗鋼』…

私の、相棒です」

「ふうん。

他にもありそうだね」

悟られてる、と思う蘭に対し、

雲雀はその反応を見て他にもある、と気づく。

「…他の得物は見せられませんよ?」

「…わかった。

いいよ、別に」

最終下校のチャイムが鳴った。

「あ…

じゃあ、そろそろ帰りますね？」

「うん

じゃあまた朝に来てね」

「はい！

さよなら、先輩」

「うん

じゃあね、蘭」

以上の結果より、報告です。

試験後の蘭は、いつもと変わらなかった。

ウラバナシ2. 試験後の蘭（後書き）

短かったですよね…

すいません…

次回からはVARIA編に入るとおもいます。
（予定通りに行けば。）

第24ワ。 嵐の予感…！ (前書き)

やっとVARI A編にはいります！

第24ワ。 嵐の予感…!

—蘭SIDE—

「え？ 今から？

…うん、でも今日補習…

…え？ サボる！？

…はあ。分かった。20分後に並盛商店街？

…了解。じゃあまた後で。」

今の電話は、武からでした。

チャンチャン♪（コレは気にしないでください。）

「アホ共は呼ぶなって言ったのに」

「誰のことですか!？」

はああああ…

うるせーなあ…

唯一の救いは沙絵だけだし…（武と隼人を除く）

あ、ちなみに言っておきますが今日の装備（服装等…）は、

黒い長袖のパーカー、同じくズボン。

いつものトランクと武器ケースです。

はあ…

「なーんか変な予感がする…」

「ん？」

「どーした？」

聞いてきたのは、武だった。

「ん…

なんでもない」

「そっか。」

「僕ゲームセンター行きたい！」

「おっ

勝負すつか？」

「負けねーぞコラ！！」

「あ、じゃあ私も♪」

「じゃああたしも！」

ドゴオ！！

「なんだ！？」

「外からだ！

じゅ、10代目は！？」

「10代目ー!!」

「大丈夫かツナ!!」

少年に倒されている綱吉。

ん…?

あのひと…?

「うゝおゝおい!!」

なんだあ? 外野がゾロゾロとお

邪魔するカスはたたつ斬るぞお!!」

「ああ!?!」

「……」

「な…

何なの一体!？」

「!?!」

…いや。深く考えすぎ、か。

そんな訳ないし。

ドゴオッ!

ゴッ!

「うゝおゝおい!!」

邪魔するカスはたたっ斬るぞお!!」

「ひいっ

なんなのあの人ゝ!!?」

すんげーやばいよ!！」

「くそ…

すみません沢田殿」

「え!?!?」

「つけられてしまいました」

あ、死ぬ気の炎とブーメラン。

と、いうことは、やっぱり…

「バジルさん?」

「え…?」

「いえ、なんでも。」

ニツコリと作り笑いを向けた。

そーいや、いつの間にか沙絵たちがいない…

「…沢田殿、

せっかく会えたのに……

こんな危険な状態に巻き込んでしまうとは…」

「え!？」

あ…あの…誰でしたっけ!？」

きてください、と言いながら綱吉を連れて行くバジルさん。

しかし、すぐにギンパツロン毛の奴が追撃する。

どうやら、奴は綱吉を知らない様だ。

「そろそろ教えてもらおうか？」

攻撃をしかける奴。

ザン！

バジルさんがやられる。

「き…君！！」

「うゝおゝおい！！！」

ビクッと反応する綱吉。

なんでも、バジルさんとはどういう関係か知りたいらしい。

そのとき。

ドガガガッ！

「なんだあ？」

あっさりと避ける奴。

「その方に手をあげてみる

ただじゃおかねえぞ」

隼人…

「ま、そんなところだ

相手になるぜ」

武…！

やめとけよ…！

武たちじゃ勝てないよ…！

「オレにたてつくと

死ぬぞお」

はあ…

奴の忠告は正しいのに…

キイン

キンッ

キキキンッ

剣による攻防が繰り広げられる。

「貴様の太刀筋

剣技を習得してないな」

「だったら何よ」

「かるいぞお!!!!」

ガキンッ

ドシュッ

仕込み火薬がでる。

ドゴッ

「！

火薬！！？」

「山本お！！」

どさっ

「武……！」

武の元に駆け寄り、手当てをする。

あっちでは戦ってるけど、カンケー無い！

「武……

大丈夫？」

「ら、ん…？」

…ああ、だいじょーぶだ」

よかった…

「じゃ、あっちに助太刀にいくから…

これ、預かっというて？」

取り出したのは、いつもつけているペンダント。

「これ…！」

「いいからさ。」

「……………」

戦っているところに戻ると、

丁度バジルさんがやられている所だった。

キイイイイン…

「!？」

誰だあ、てめえ…」

「通りすがりの侍ですと…っつと！」

「ぐっ！」

ズドン!!

奴を吹っ飛ばす。

「蘭ちゃん…スゲ…」

「うゝおゝおい!!」

てめえ、何だあ!？」

「はああああ…」

じゃ、後は任せるよ? 綱吉…」

「え? ええ!？」

「無視かあ!？」

いい度胸じゃねえか!！」

刀を向けるやつ。

ズガンッ

「復…^リ活…^{ボーン}!!!!!!」

お、死ぬ気になった。

「死ぬ気の炎に…」

このグローブのエンブレムは…」

そのとき、後ろから声がする。

「おい」

「なんですか？」

リボーン」

「おまえ、わざとツナを死ぬ気にさせたな

…それに、死ぬ気弾のツナじゃ勝てねえ」

「ハイパーな方でも勝てないよ？」

「!?!？」

…なんでお前がそれを知ってるんだ？」

「私の情報網を甘く見ないほうがいいです…」

とでもいっておきます。

死ぬ気モード…とけましたね…

いきますか…」

なるほど…

ボンゴレリング…

それでバジルさんが来たのか…

「うゝおゝおい

ソレを渡す前に何枚におろしてほしい？」

！！！！

…やっぱり奴は…

「スクアーロさん！！！！」

「！？

…もしかして…おまえ…！？」

「あいかわらずだな

スベルビ
S・スクアール

「!？」

この声：

跳ね馬か：

「子供相手にムキになって恥ずかしくねーのか？」

あー：

たしかに恥ずいなあ。

「その趣味の悪い遊びをやめねーっていうんなら

オレが相手になるぞ」

少し考える素振りをみせて、

「うゝおゝおい跳ね馬

お前をここでぶっ殺すのも悪くない

だが同盟ファミリーとやりあったとなると上がうるせえ

今日のところはおとなしく…」

綱吉の髪を掴み、

「帰るわけねえぞお!!」

「手を放せ!!」

ドシュッと、また火薬をなげる。

すると、煙幕になり————

「おとなしくしとけよ…」

「!?!」

腹に（そんなにいたくない）パンチを入れられる。

後でオボエテロ…

「貴様に免じてこいつらの命はあずけといてやる

だがこいつとこの女はいただいていくぜえ

うゝおゝおい」

「な」

「ああっ

ボンゴレリングとあの女^{ひと}が…！」

「蘭ちゃん!？」

みんなが驚愕してる…

「じゃあなあ」

「まっ

まてっ」

あーあ…

もちろん、さらわれたときは

武器ケースは持ったままですよ★

（トランクは置いて行っちゃいました…）

スクアードさんは相当苦労したらしいけど、気にしたら負けでーす♪

第24ワ。 嵐の予感…！ (後書き)

次回、さらわれた(?) 蘭は…？

…感想待っています。

第25ワ。 V A R I A アジトにて（前書き）

前回、直す前はトランクも持って行っていました、

トランクは持っていないことにしました。

訂正しませんでした。

第25ワ。 V A R I A アジトにて

―蘭SIDE―

「ねえ」

「ああ？」

ただいま、でっかい屋敷の中にいます。

「いつまで待たせんのか？」

「もうそこ…」

ベルとマーモンが来たぞお」

見ると、そこにはフードをかぶった赤ん坊と、キラッキラの少年がいた。

「あれー？スクアアロじゃん。

いつの間に帰ってきたのか？」

ベルと呼ばれた少年は、

いつの間にか帰ってきていたスクアードに驚く(?) 表情を見せる。

と…

「…君は？」

誰なんだい？」

フードをかぶった赤ん坊――――

マーモンと呼ばれた赤ん坊が言った。

「あー…それは後ほど。

ふふふふふふ………」

最後の、ふふふふふふ……は、誰にも聞こえなかった。

「なんだよー…

ま、いっか♪」

『ま、いっか♪』で済まされたあゝ

ま、いっか。『おいつ』

…トーヤの声が聞こえた気がする…気にしない、気にしない。

「あんらー？

スクアアロじゃない！めずらしく女の子連れ？」

「うゝおゝおい！

そんな訳あるかあ！」

「ぬ…貴様、スクアアロ…

ボスがやっと帰ってきたというのに、色ボケするとはどういうことだー！」

あ、やっぱこいつバカだ。

「ルッスーリアもレヴィも、

スクアーロがそんなことする訳ないじゃん。

そんなに器用な奴じゃあないし。ししっ」

そのとき、扉が大きく開かれる。

と、同時に、全員の声がピタリと止む。

「…誰だ？ てめえ」

フツと蘭から笑みがこぼれる。

「お久しぶりです。

ボス様。」

「…日狩^{ひかり}、か？」

ザワ…と、その場にいる幹部達がざわめく。

その場でひざまづく蘭————この場では、日狩だが。

「ひ、日狩…？」

マジで？髪、ギンパツじゃなかった？」

ひざまづいた

「カラスプレーですよ。」

ずっと……………大変でしたよ…」

はあ、とため息をつく。

「ボス様——————」

やっと…やっとあの忌々しい事件から————

いえ、解放には及びませんが…」

ピンッ

ボスと呼ばれた者————

XANXUSは、日狩に向かって指輪をはじく。

「これは…?」

「ハーフボンゴレリングだあ」

スクアーロが答える。

「暁のリング、だよ」

今度はマーモンが答える。

「暁?」

「うん。」

詳しいことはあんまり知らないけどね」

その後、いろいろあった。

まあ、スクアールが持ち帰ったハーフボンゴリングが配られただけだったが。

「なー、日狩ー…」

なんで連絡だけでアジトに6年間も来なかったん？」

話しかけてきたのは、ベルだった。

「んー…」

みんなをビックリさせたくて…かな？」

「ふーん…」

案外シンプルな理由だったんだ？」

「日狩らしいね」

そういうところ。全然変わってないよ」

「そう？」

あ、私お風呂入ってくるから。

じゃね」

「ん、分かった。」

「じゃあ後でね。」

服がもし無いんならルッスーリアに会って作ってもらおうといいよ」

そーういやあ、服、持ってきてなかったなあ…

「ルッスーリアってどこにいるかなあ？」

「キッチンの方にいんじゃないかね？」

なるほど。

「ありがと♪」

行ってみる♪」

「あら？日狩ちゃんじゃない♪

どーしたの？」

「いい加減ちゃん付けやめてもらえます？

それと、着物…まあ、和服っぽいのならなんでもいいです。」

「わかったわ♪

どこに持っていけばいい？」

「じゃあお風呂に持ってきてください」

「わかったわ

じゃあ10分後位に持っていくわ♪」

「じゃあよろしく」

「おお…ここもあんま変わってない…」

日狩が来たのは、もちろんのこと、風呂場である。

「カラスプレー、やっぱりなかなかとれない…」

そりゃあそーだけど…」

なかなかとれないのは、6年間分の重み…かな？
(ナンテネ★)

『ここに置いとくわよー？』

浴室の外からルッスーリアの声が聞こえる。

『りょおーかい』

そういつて、髪の毛を洗うことに専念する。

「お。『日狩』復活じゃん？」

そこにいるのは、髪の長いギンパツの少女――――
もとい日狩がいた。

「うん！」

やっと『日狩』にもどったよ…

ところでさあ…

あの機械っぽい奴、だれ？

ボス様の傍にいたの…」

「彼かい？

かれは、『ゴーラ・モスカ』だよ」

なにソレ？

「モスカ？」

ふーん…まあいつか。

今後って、どーすんの？」

「9代目からの了承を得て継承が確定するまで待つんだよ」

「ふーん…」

了承ねえ…

なーんか、嫌な予感するんだよね…

その予感は的中し、

XANXUSがリングをフェイクと見破り、

V
A
R
I
A
は日本へ発つた。

第25ワ。 V A R I A アジトにて（後書き）

次回は、ツナ達の修業の風景です。（おそろく。）

第26ワ。 夜切さん家（前書き）

更新遅れまして申し訳ありません！！！！

：ちなみに、今回修業にしようと思ったんですが：

全く違う内容にしてしまいました：

それでは26話をどうぞっ

第26ワ。 夜切さん家

— 綱吉SIDE —

「…蘭ちゃんが…！」

どーして…？」

「深追いは禁物だぞ」

「リボーンなんで今頃出て来るんだよ…！」

どーして助けてくれなかったんだ…！！？

それに…それに蘭ちゃんが…！」

「オレは攻撃しちゃうからねーことになってるからな

夜切は………

その前に、話さなきゃなんねーことがあるんだが、その辺はあとでな」

「なんだよそれ…」

て言うかなんで攻撃しちゃいけないんだよ」

「奴もボンゴレファミリーだからだ」

「え————！！？何だって————！！？」

オレ、ボンゴレの人に殺されかけたの————！！？

ど…どーゆーことだよ！！？」

「さーな」

『さーな』 って…！

ファンファンファン…

ケーサツが来た。

そうして、ディーノさんが廃業になった病院をてはいしてくれたんだけど…

『ま、待ってください!!』

獄寺くんと山本が…!!』

『あいつらなら心配ねーぞ』

リボーン…?』

『大丈夫かツナ!』

…蘭、は…?』

『いったい何なんすか!?!?』

蘭は…!?!?』

獄寺君はともかく、山本のように…

『蘭…』

『二人とも…』

蘭ちゃんは…さらわれて…それで…!』

『…!…!』

『お前らの戦闘レベルじゃ足手まといになるだけだ』

とつとと帰っていいぞ』

『リボーン…!』

でも、二人は何も言えなかったんだ…

そして、オレ達は病院にむかったんだ…

— 無人SIDE —

ツナにある物を届けに来た少年・バジルの怪我は、命に関わるもの

ではなかった。

そして、ツナはボンゴレの者であるスクアードが敵でボンゴレの者ではないバジルが味方、と知る。

そして、バジルが届けにきた物————

ボンゴレリングと言うものが動き出した、という。

ボンゴレリングは、いわくつきの代物らしい。

だが、そのボンゴレリングをディーノが持っていた。

実は、バジルは囷だった。

ツナは、『そんなものに関わりたくない!』と思ったのか、にげだした。

逃げることなどできないとは知らずに————

次の日。

ツナが病院にいくと、獄寺と山本がいた。

ボンゴレリングは、9つの種類があるらしい。

そして、ツナのボンゴレリングともうひとつ以外は、

次期ボンゴレボス・沢田綱吉を守護するに相応しい6名にとどけられた。

「なあっ！！オレ以外にも配られたの！？」

…てかもうひとつって…？」

「…しょーがねーんだ…」

夜切がいねーから、な…」

最後の一言は、そのばにいる誰にも聞こえなかった。

そして、獄寺は歓喜する。

「獄寺のリングは『嵐のリング』、山本のは『雨のリング』だな」

「そーいや違うな」

「ん？そーか？」

「なんだ…？嵐とか雨とか…天気予報……………」

「初代ボンゴレメンバーは個性豊かなメンバーでな

その特徴がリングにも刻まれてるんだ」

初代ボスは、すべてに染まりつつ、すべてを飲みこみ包容する大空のようだったと言われている

故にリングは『大空のリング』

そして守護者となる部下達は、大空を染めあげる天候になぞらえられた

しかし、そのうち2つだけは天候ではなかったが…

すべてを洗い流す恵みの村雨『雨のリング』

荒々しく吹きあれる疾風『嵐のリング』

なにものにもとられねず我が道をいく浮き雲『雲のリング』

実体のつかめぬ幻影『霧のリング』

明るく大空を照らす日輪『晴のリング』

激しい一撃を秘めた雷電『雷のリング』

そして、

闇の中に煌く光『星空のリング』

暗闇から光までの道標きぼう『暁のリング』

山本が野球をやってるから、と言いリングを返そうとするが、

ツナが失言（昨日の奴がまたくる、と言った）をし、やる気を出したみたいで修業にはいった。

「っと、その前に、ツナー！」

「山本？」

山本が引き返してきた。

「蘭から預かったんだけどさ、これ——」

ツナに見せたのは、蘭がいつもつけているペンダントだった。

「ああ！

これって…」

「ああ。

だから、蘭はきっと帰ってくるぜ。

これだけ言いたかったんだ。んじゃあな。」

それだけいうと、山本は今度こそ行った。

そして、笹川了平の修業も決まった。

「そーいやさあ、リボーン…」

「なんだ？」

「蘭ちゃんのこと、なんだけど…」

「ああ、言ってなかったな。」

あいつの血族…『夜切一族』ってんだが、知らないよな？」

「あ、あたりまえだろ！！？」

なんなんだ？その一族って…」

「そーだな。」

とりあえず夜切ん家行ってみればわかるぞ」

「ふうん…？」

―セジルSIDE―

「ええっ!？」

日狩いないんですか!？」

「ああ。昨日から帰ってこない。

どこで何をしているんだか…」

オレことセジルは、仁さんの家にきている。

日狩に会っておきたかったんだが…

あいつ、仁さんに心配かけさせやがって…!

『ピンポン』

ん?

「客か？」

「オレ見てきますよ」

「すまないな。」

「いえいえ。」

「これくらいさせてくださいよ。」

がちやり。

インターフォンも見ないで開けるのが間違ってた。

いやほんとに。

「…セジル…？」

げ…

なんでリボーンがここにいんだよ…！

「リボーン？」

ってゆーかだれ！？そのひと！？…蘭ちゃんの弟！？」

ブチッ

「誰が弟だ…？」

殺気をだしながらいう。

その瞬間、

「喝っっっっっっ！！！！！！！！！！」

殺気をかきけされた。

「セジル、お前は一般人にそんな殺気を向ける奴だったか？」

「…すいません、仁さん」

「うっ……」

「む、すまん。

中に入ってゆっくりして行ったらどうだ？」

「じゃあお言葉に甘えさせてもらうぞ」

甘えんなよ…！

仁さんだって、なんでコイツなんかを中にいれるんだ…！

「率直にきこう。」

君達は『リボーン』君と『沢田綱吉』君であっているね？」

「あ、はい…」

「そーだ」

「慎め、リボーン。」

仁さんに向かって敬語を使わんとは…」

「よい。」

それより、蘭はどうしたんだね？

昨日から帰ってこないんだが。」

「あ…

蘭ちゃんは、「ボンゴレ独立暗殺部隊の連中にさらわれたんだ」

…ということですよ」

「！！

ヴァリアーか。

ありがとう。なら蘭は心配いらないだろう。」

「…？」

「さて、次は君達の質問にこたえよう。

できる範囲で、な。」

仁さん!?

「…あなたは『夜切一族』のひとりで合っていますよね?」

「ああ」

「夜切は『夜切鉄』の後継者になったのか?」

「ああ」

「あの…『夜切鉄』って、なんですか…?」

「…簡単にいうと、

『この世で最強の剣術』、だ。

この『夜切鉄』は、これを造った張本人——『夜切^{ヨギリ}慎^{シン}』
の血筋でないと扱えないものだ。

よって、いま生きている中では、ワシと蘭——そして蘭の兄
だけが使えるものだ。」

「えと…」

あなたに兄弟は…？」

「兄弟はいる。」

そして兄弟の息子や孫もいきている。」

「じゃあその人達は使えないんですか？」

「つかえない。」

正式には『夜切鉄』の正統後継者であって、夜切慎の子孫でない
といけないのだ。」

「だったらその後継者が死んじゃったらどうすんだ？」

「さあな。」

そいつが己の力を過信しなければいいことだ。」

「そーか。」

じゃあ、オレ達はこれで失礼するぞ

…さいごに、セシル。」

ムカムカしてきた…

「なんだよ…」

「なんで、お前が並盛にいる？」

「師匠が弟子の家に来ちゃいけないか？」

「蘭、か…」

フン。

「それ以上は何も言わない。」

とつとと帰れ」

「…じゃあな」

そして、ツナの修行がはじまった…

来たるべき日は、すぐそこにある――

第26ワ。 夜切さん家（後書き）

えー次回は（多分）V A R I A が並盛にきます。

ちなみにちなみに超豆豆豆……知識。

蘭の誕生日は、10月26日です。

柿ピーと同じですねっ☆

（10月26日なのは、作者の………だったとか、そうでなかったとか。）

それではっ

第27ワ。 リング争奪戦について。(前書き)

説明文じゃありません。

立派な本文です。

では、27話をどうぞ。

第27ワ。 リング争奪戦について。

―日狩SIDE―

「いやー楽しみだなー…

日本ッ

「しししっ

日狩が言うならおもしろそーだなっ」

「そ？

それにしてもスクアーロさん…

ここまで髪をのばすとは…おそろし…」

「うゝおゝおい!!

きこえてんぞお!!」

懐かしいな…

「はいはい♪」

やっぱ、ヴァリアーが一番だよ♪

「んゝゝゝ

着いたゝゝゝ日本!!」

やってきました故郷!

「それで、どこに行くんだい?

日狩」

あ、知らなかったかあ。

「並盛。

といっても分かんないでしょ？」

『のけ

オレがいく』

む…

しょーがないか。

「案内するぜ」

「？日狩…？」

「トーヤだ

久しぶりだなベルにマーモン」

「その豹変振り…

うん久しぶりだね

じゃあ早速たのむよ」

「ああ

ついてこい

夜までには着く」

―ト―ヤSIDE―

「この街に……

ハーフボンゴレリングが……」

「君が嘘をついていなければ間違いないね

ト―ヤ」

「嘘なんかつくわけねーだろ

ましてやボスの前で……」

「それもそうだね」

まったく……

その後、

レヴィがマーモンに念写を頼み、

ヴァリアー・レヴィ雷撃隊雷のリングを奪還しにむかう。

「あ、オレちよつとヤボ用があるからさあ。

後は頼む。

じゃなっ」

「……………」

しーがないなあ。」

マーモンが盛大なため息をついたとき。

がちゃり…

「…ただいま帰りました」

仁ジィがスッゲーこっち見て睨んでる。

コエーっ

「…何があった？」

「…すいません。」

今は…時間がないので…」

「…分かった。」

だが後でしっかり話せよ」

「はい。ありがとうございます…」

こうして、オレは戦場となりうるかもしれない場所へ向かった。

「待てエレヴィ！」

バババツとヴァリアーの幹部達が揃う。

「一人で狩っちゃだめよ」

「他のリングの所持者もそこにいるみたいなんだ」

「なー暁のってどれ？」

沢田綱吉はおびえてんし：

ほんとに10代目候補か？

「うゝおゝおい！！！」

よくもだましてくれたなあ

カスども！」

「で…でた——————つ」

「!」

「あんにゃろう」

はー…

スクアーロ…

超うるせえ…

「雨のリングを持つのはどいつだあ?」

「オレだ」

お、山本武か。

「なんだあてめーか

3秒だ3秒でおろしてやる」

「何枚に?」

「うゝおゝおい!!」

てめーは黙ってろお!!」

はあ…

こいつ高血圧だろ…

「のけ」

「ぐっ」

「ぐっじゃねーよっ」

それにしても…

ボス、驚かれてんなあ。

「でたな…

まさかまた奴を見る日がくるとはな

XANXUS」

「!!」

おーおーあいつら、殺気に潰されかけてんよ。

ま、当たり前か…

「沢田綱吉…」

コオオオオ…

ワオ。

「まさかボスいきなりアレを……………!!」

さーねえ…

「オレ達まで殺す気か!？」

はー…

「やべーぞ!

逃げろ!」

今さら逃げたって意味無いとおもいまーす。

「死ね」

ガッ

ピッケル…?

「待てXANNXUS

そこまでだ」

…家光…!!!!

臆病者が…

「ここからはオレが取り仕切らせてもらう」

「と…」

父さん!!?」

「何しに来た…家光…!」

鎖鎌を家光に向ける。

「XANXUS

お前の部下は門外顧問であるこのオレに刃を向けるのか」

「くっ…」

加速していく、二人を取り巻く空気の緊張感。

そして、家光は近頃の9代目に疑問を持ち、質問状を送ったという。

その回答ととれる勅命が今届いたらしいが。

『今まで自分は

後継者にふさわしいのは家光の息子である沢田綱吉だと考えて

そのように仕向けてきた

だが最近死期が近いせいか私の直感はやえわたり

他によりふさわしい後継者を見つけるに至った

我が息子XANXUSである

彼こそが真に10代目にふさわしい

だがこの変更に不服な者もいるだろう

現に家光はXANXUSへのリングの継承を拒んだ

かといって私はファミリー同士の無益な抗争に突入することを望まない

そこで皆が納得するボンゴレ公認の決闘をここに開始する』

…つまり、

『同じ種類の持つ者同士の1対1のガチンコ勝負』^{バトル}だ

んで、後は指示を待てっつーことらしいが…

「今回のリング争奪戦では我々が審判をつとめます」
ジャッジ

チエルベツロ機関っつー奴らなんだとさ。

本来7種類のハーフボンゴレリングは

ボスの持つ1組と門外顧問の持つ1組計2組が存在し

跡継ぎの式典の時認められた

7名に2組のリングを合体させた

完全なるボンゴレリングの状態で継承されるものである。

「おい」

「？」

「なんでしょ?」

「なんで7種類なんだ？」

「どういふことでしょうか」

リングを見せ、言う。

「オレは『暁の守護者』だ」

「！

：今回は異例に異例が重なった事態となりました」

なんでも、二人がふさわしいと思う2名が食い違った。

そこで真にリングにふさわしいのはどちらなのか

命を賭けて証明してもらうこと。

そして、

「初代暁の守護者と初代星空の守護者の命により

『二つの守護者が同時になれるときのみ、

またはそのリングに燃やされない者がその守護者になれる』

という事になっております」

「？

燃やされる…？」

「はい。

ですが貴方達は条件を満たしておりますのでご心配なく」

この言葉が向けられたのは、

恐らくオレと木崎実歌、向こう側の暁、

こっちの星空————もとい日狩がチヨチヨイのチヨイツとやっ
た奴だが————

そのことだろう。

場所は深夜の並中、詳しくは順を追って説明するらしい。

ま、明日からだがな。

…オレは明日はいかねえよ？

第27ワ。 リング争奪戦について。(後書き)

次回は多分そこまで進まないです。

それではっ

第287。 初戦前です

―日狩SIDE―

ああ…久しぶりの我が家…

「ただいま…」

「遅かったな。」

それにヴァリアーの奴らと一緒にじゃなくてよかったのか？」

「うん…

今日は、ね。

明日からは皆と一緒にいるよ。」

やっぱおじいちゃんは私の理解者だな。

「おい」

突然、背後からセジルさんらしき声がする。

「お前、仁さんに心配かけんなよな。」

少なくとも、オレはちよつと心配だった。」

やっぱりセジルさんだ。

「はいはい…」

それで、おじいちゃん…」

ピーンポーン、とインターフォンが鳴る。

「見てきますね」

「おう」

「ああ」

ガ
チ
ャ
ッ

「!!!」

「蘭ちゃん！」

「!!」

「…綱吉? どーしたの?」

「コレを渡しに来たんだぞ」

渡されたのは、

なんとボンゴレリングだった。

「…これって暁のリング完成じゃね?」

「これは暁のリングっつーもんだ。」

「明日、夜11時に並中来い」

「あ?」

「…オモシロそーだね」

うん、行けたらいくよ」

…後で皆に連絡しなきゃなあ。

「え…？」

あ、あの…

い、行きたくなかったら無理しなくても…？」

メンドクサイやつちやのう。ははは…

「だから行けたらいくって。

用はこんだけ？

ならもう帰ってよ。明日はガツコもあるし…」

「う、うん。

わかった、じゃあまた明日。」

「おー

じゃーね」

パタン…

「はあああああ…」

「なーに盛大にため息ついてんだよ」

セジルさん…

「あー…

綱吉の方からも暁の守護者やってって言われたんです…」

「！

そーか。蘭モテモテだなっ」

はー…

「笑い事じゃないですよ…

それに、学校の友達とかがいなければ、日狩でいいですよ」

「そーか。

そりゃ悪かったな

そろそろ仁さんの所いっつけ。

話したいこと、あるんだろ？」

「…はい。

リビング（といっても畳だが）に行ってください。

冷蔵庫に何かしら入ってると思いますよ」

「ああ。

ありがとな」

そうして、私はおじいちゃんのいる部屋に向かった。

おじいちゃんは私の方をむくと、こう言った。

「日狩。」

「何があつた？」

「はい。」

：あの日、スクアアロさんが来て、イタリアに強制的に連れて行かれました。

その後、ボス様が目覚めていて私が『暁の守護者』に任命されました。

そして、スクアアロさんが持ち帰ったハーフボンゴレリングで

ボンゴレリングが完成されたと思われました。

ですが――――

スクアアロさんの持ち帰ったハーフボンゴレリングが偽物とボス様が見破り、

日本に帰ってきました。

そして、ボンゴレボスの継承を決める、

同じ種類のリングを持つもの同士の戦いが明日の晩から始まります。

私は、沢田綱吉サイドからも暁の守護者として要請が来ました。

………そんなかんじです。」

おじいちゃんは軽くうなずくと、

「日狩。」

お前、暁同士で戦うときどうするつもりだ？」

あ。

そーいえば。

「その顔は考えてなかったんだな。」

ワシに考えがある。

…明日、学校から帰ってきたら、こい。」

「はい…」

でも、私がヴァリアー側の星空の守護者をつくったときの様にやれば…」

「だめだ。」

勘のいい奴なら一発でわかってしまう。」

「…分かりました。」

じゃあ、そろそろいきましよう。

セジルさん待たせてますから」

フツと小さく笑った。

「ああ…

今行くよ」

「お、久しぶりじゃん、蘭！」

おお、懐かしい声。

「沙絵！」

久しぶり！」

「風邪治ったんだね！。

よかったあ…」

「おーげさな。」

「「はははははっ」「」

「なあ、何やってんだ？」

！

この声は…

「武！」

「よっ

久しぶり！」

はー…

並中は幸せだなあ…

「あ、そーいやお前から預かってたペンダント。

わりいけど、家に置いてきちまってさ。

また明日でいいか？」

明日、か…

「うん…

ごめん、明日からまたしばらく休むと思う…」

「！

そっか。じゃあどーする？」

そーだなあ…

「まだしばらく預かっててくれる？」

…ごめんね」

「おう」

すると、沙絵がムスツとしたように、

「何よゝ二人してゝ」

隠し事はよくないよゝ？」

「別になんも隠してないって！」

「あやしゝ」

「はははははっ」「」

こうして、今日の平和な日常は終わった。

「ただいま」

「おう。おかえり。」

日狩、こっちだ。ついて来い」

「はい。」

ついて行くと、そこには地下への階段があった。

…少し寒いなあ

「ここは地下室への階段だ。」

まあ、いけば分かる。」

………何があるんだろう……？

「ああ、それとここには、

■■■■■がある。決して他の目的に使用するなよ」

…危険なものなんだろうか。

「ついて来い。

もう少し先だ。」

『ほう…なるほどな。』

これはいい…かな？』

「そう？ ちょっと使いづらそうだけど…？」

「これを使いこなせるかどうかはお前次第だ。」

まあ、がんばれよ」

「はい…」

そこには、
■ ■ ■ ■ ■
があつた。

今日は、だれが戦うのだろうか――――――

——いよいよ、
リング争奪戦が始まる——

第297。 リング争奪戦―晴の戦い―（前書き）

晴戦です。

結構短いです。

第29ワ。 リング争奪戦―晴の戦い―

―日狩SIDE―

PM10..00

『…と、言うわけで今日は沢田綱吉側で応援します!』

私はケータイを耳から遠ざけた。

なぜだかわかりますね？

『うゝおゝおい!!!』

てめえナマ言ってるじゃねえぞお!!!』

バンツとドアが勢い良く開いた。

「日狩!」

うるさいぞ!

オレはともかく仁さんが起きたら… (ブルブル…)

とにかく！もうちょっと声のボリュームさげろよ！」

師匠：

ハア：

「はいはい…」

…といってもスクアーロさんがうるさいだけなんですけどー！！！！

『ガチャガチャガチャ…』

電話かわったわよ

わたしたちの誰かの晴れ舞台なのにこっち側で応援してくれないの？』

お、ルッスーリアさんだ。

安心、安心。

『はい…』

すみません…まあ、次からはトーヤも見るといってますし…

…はい、ほんとすみません…

あ、みんなに私を知らないフリしててくださいって言うておいてください。

こっちでは名前もちがいますし…

はい、はい…分かりました。では。また…』

フー、とため息をつく。

…武器の手入れしてからいこう…あと30分位は…

「ごめん！武！

遅れた！？」

「ん？

ああ、まだこっちもツナが来たばっかだぜ」

見るとそこには綱吉と木崎がいた。

「…武、なんで木崎がいるの？」

「言ってなかったっけ？

木崎は『星空の守護者』だぜ？」

「…え？星空？」

「そ。星空。」

「えええええっ！！！！」

…ここからはハイスピードでお届けしよう。（ショックが大きいので）

1. チェルベツロはいつの間にかいた。

2. 今日は晴戦。

3. なぜか円陣。

…ホントは円陣なんかやりたくないよ？

「了平——ファイオッ」

…自分で『了平ファイオッ』って言ってるし。

いやーそれにしてもルッスーリアさん。

勝てんかねえ…

『オレは笹川了平に一票だな』

『なんで？』

ルッスーリアさんだよ？』

あ、めっちゃリングが光ってる。

まぶいーっ

「ほらよ。」

サングラス」

「おっ

ありがと、隼人。」

隼人がくれたのは、黒いサングラス。

「後でリボンさんに返しとけよ。」

なんだ。リボーンのか。

「…うん。」

お、見える見える。

『ぐああっ』

ルッスーリアさんの膝のメタル・ニーに左拳が当たる。

よって、左が使いものにならなくなる。

んで、コロネロさんがくる。

おー…久しぶりにみるなあ…

次に、笹川（兄）が体からでた汗が蒸発してできた塩を拳で飛ばす。

↓照明が割れて笹川（兄）にも目が見えるようになる。

でも、ルッスーリアさんのメタル・ニーによって右もつぶされる。

しかし――――

笹川（妹）が来た事によって細胞エネルギー伝達率が100%になり、

ルッスーリアさんのメタル・ニーが壊された。

これで、あのパンチを防ぐことはできなくなる。

ドギヤッツ

「!!!!」

ルッスーリアさんが：

モスカにやられた：

これにより、

勝者は笹川了平になった。

「…蘭？」

どーした？」

「…ごめん、なんでもない。」

「夜切さん？だいじょうぶ？」

テメエは黙ってろよ…！

「なんでもないって言っているでしょう…！」

木崎は身震いをして、

「…ごめんなさい…そういうつもりで言ったんじゃない…」

「…」

じゃあまたね、武。」

「おう！またな！」

…なんなんだろう…

モスカって…？

なんなんだ…？

ボス様は…真相を教えてください…？

第297。 リング争奪戦―晴の戦い―（後書き）

感想引き続き続きます！

ウラバナシ3. セシルVS夜切日狩（前書き）

昨日は投稿できずすみませんでした。

土・日のどちらかで1日2話投稿します…

ウラバナシ3. セシルVS夜切日狩

―日狩SIDE―

今夜は雷戦…

今回はトーヤが行くって言ってるけど…

……？

「迷いがある。」

リング争奪戦について考えてたからかな？

「なんですか？」

「オレと勝負しろ。」

お互い降参したら負けだ」

何を考えているのだろうか…？

「…わかりました。」

すると、満足そうにうなずいて見せた師匠。

「お前は夜切鉄だけを使え。

オレは双剣をつかう。

30秒後にスタートだ」

師匠の双剣は全て真っ黒になっている。

「…はい。」

—無人SIDE—

ジリジリと緊張感を増していく二人の間の空気。

…ジャリ…

「夜切鉄…

式^にの型 月^{ゲツ}牙^ガ…」

シュウウ…と姿を変えていく刀。

「…式の型か…（たしか切れ味がハンパなかったな…）」

「「（30秒！！！！）」」

瞬間、同時に駆け出す二人。

ダッ

キンッ

キキキンッ！

キキキン…

キンッ！

「！
チッ」

スパッ

セジルの左腕の皮膚が切れる。

キンッ

ガッ

……

ギチ……

「……なかなかやるな。」

「いえ……まだまだ扱えきれてないですよ。」

みじゅくものです」

確かに、セジルよりも日狩の方が傷が多かった。

しかし……

「……（出来すぎだっ！の……オレより傷が幾分浅いじゃねーか……）」

他の型は使わねーのか？ そんなんじゃあオレを倒すことはできねーぞ」

「……誰が使わない、と？」

…夜切鉄 肆よんの型…」

「なっ

オレを押しつぶすつもりか!？」

「真月シンゲツ!!!!」

シューウ…

ズン、と剣に重み加わる。

夜切鉄は先ほどまでの形と違い、

縦が大人の身の丈ほど、

幅が大人の腕の長さくらいの幅の大剣になった。

誰がみても、破壊力はバツグンとわかるだろう。

「くッ」

ドンッ
ッッ
ッッ

「(やば…やりすぎた…?)」

し、師匠…?

「……!!」

「…まだまだだな。」

戦闘中もちゃんと気を察知しなければならない。

（やっぱり実戦の数が圧倒的に足りていないな…）

「…参りました…」

ちえ…」

「見事だったぞ」

「「!?!?」」

見るとそこにはいつの間にか仁がいた。

「あ、ありがとうございます…」

「しかし日狩は経験不足だな。」

気を察知できていればセシルも危なかったな。」

「…さすが仁さんですね。」

ところで後で話があるのですが…」

「…わかった。」

では、日狩。お前は並盛のほぼ全域の気を察知している。

今日のトレーニングだ。さぼるなよ」

「…わかりました。」

――
今宵は、
雷戦……

ウラバナシ3.

セジルVS夜切日狩（後書き）

次回、雷戦です…

第307。 リング争奪戦―雷の戦い―

―トーヤSIDE―

「今日はレヴィか…

どうかねえ…」

いや本当に。

「？」

どーゆー意味？」

そのまんまの意味だし。

「そろそろいくよ。

ベル、トーヤ」

へいへい、と半ばだるそうに行くベル。

ま、オレも同じようなもんだけど。

…レヴィ、早すぎね？

そう思いつつもレヴィの後ろに降り立つオレ達。

「またレヴィ2時間前から？」

信じらない」

「君とは違って不器用な男だからね」

「とっととおわらせろお」

スクアールと同意見。

…なんか向こう円陣やってるし。

バカみてーッ

向こうの雷のはガキだし…

いかにもアホだな。

『それでは雷のリング

レヴィ・ア・タンVS・ランボ

勝負開始!!!!』

向こうのガキは遊びと思ってるし…

「シュールな画……」

「秒殺だね」

「…そーかな？」

「「…？」」

ゴゴゴ…

雷…？

ビヤッ！

避雷針に雷が落ちた。

今回のエリアは避雷針のエリア…

この床は特殊な導体が張り巡らされていて

避雷針に落ちた電流が増幅され駆け巡る仕組みだ。

当たると結構やばそーだな。

レヴィは飛んで避けたが、ガキは避けられなかったようだ。

…死んだか？

『死んでないよ』

…日狩？

「うわあああ！！」

「いだいいっ！！」

生きているだと！？

『だから言ったじゃん。』

いわゆるあいつは残念な体質だからね』

へえ…

「これでレヴィにスイッチ入っちゃったんじゃない？」

「だね」

「やば…受けるんだけど…」

レヴィが…あんなガキに嫉妬…プグツ」

あーあ…

さっさとおわんねーかなあ…

ドカンッ！

！？

なんだ！？

煙の中から人影がみえる。

チエルベツロいわく、10年後のガキらしい。

ピシャアアア…

雷を呼んだ？

向こうもおもしろーヤツばっかだな。

こっちもそーか。

レヴィの電気傘パラボラが開き、ヤツに雷をくらわせる。

…また10年後の姿になるつもりか。

『今度は20年後だね』

ドカンッ

―――…ケツコー威圧感あんねー…

んで、20年後のヤツが出てきてレヴィを圧倒した。

しかし――――

5分たち、もとの姿に戻ってしまった。

形勢逆転し、ガキは死ぬかな…と思ったときだった。

――――避雷針が倒れた？

「風ではなさそうだな」

「ああ…あの曲がり方は熱だね」

エリア全体が熱をおびている…？

「目の前で大事な仲間を失ったら……」

死んでも死にきれねえ」

沢田綱吉、か…

ボスもいねーし…

あー帰りてえ…

「…いくら大事だって言われても…

ボンゴレリングだとか…

次期ボスの座だとか…

そんなもののためにオレは戦えない」

「「「！」「」」

「でも……友達が……

仲間が傷つくのはイヤなんだ！！」

『ほざくな』

この声…

ボス！？

「あっ

あれは…

XANXUS!!!」

…それにしてもよく吠えるな。沢田綱吉は。

「オレはキレちゃいねえ

むしろ楽しくなってきたぜ」

笑った…

8年ぶりの笑顔だな…

そのあと、雷のリング並びに大空のリングはオレ達のものになった。

『明日の対戦は……』

嵐の守護者の対決です』

ベルかぁ……

勝てるかねえ……

…オレっていつやんのかなあ？

第31ワ。 S. スクアーロvs夜切日狩

―日狩SIDE―

「おはようございまーす

って誰もいないか…」

…ルッスーリアさんが負けたからしよーがないか…

(現在AM5…30です)

朝ご飯つくっておかなきゃな。(幹部の分だけですが…)

軽く軽食とって素振り…

はあぁ…

―ベルSIDE―

AM 7:30

「あれ？日狩は？」

どこにもいないし。

朝食はつくってあるのに：

「いつも通りの日課じゃない？」

外にいるんだと思うけど」

「そ？

じゃあ見て来るわ」

「ひーかーりー！」

朝食食べようぜ♪」

ブ
ン
ッ

「はい。今行きます」

「…どん位やってたの？」

「そうですね…

6時位からやってましたから…」

マジで!？

「マジ？早すぎね？

オレが戦うときはちゃんと見といてくれよ？」

「あはははっ

当たり前じゃんっ！

応援してるよ」

「ん、ありがとなっ

じゃあいこうぜっ」

「はい♪」

そうしてオレ達は朝飯を食べに行った。

—
日
狩
S
I
D
E
—

「え？

今日はご当地の殺し屋を狩に行く？」

「おう♪いくぜ？

だってオレ王子だもん」

でたっっ

『だってオレ王子だもん』っ

「…しようがないですね。

じゃあ私はスクアーロさんと遊たたかわせてばせてもらいますか…」

「うゝおゝおい！！

なんだそれはあ！」

うるさいな…

「別にいいじゃないですか。

少なくとも今日じゃないんだしー」

「そういう問題じゃねーぞお！」

「じゃあいいですよ。

今日からのスクアーロさんのご飯はきつとむごいものになるだろうな…」

「…チツ

やればいいんだろお」

「そーです♪」

「んじゃあ

オレはもう行くからー」

「いってらっしゃい♪

じゃあこっちも始めましょうか。

外にでて1分後にスタートです。」

「いいだろう…」

そして私はスクア―ロさんと共に外にでた。

キンッ

キキキキキンッ

キィィィン…

「なかなかやるなあ、日狩」

「そちらこそ。」

夜切鉄の式の型の切れ味をもつてしても

そこまで傷を深くできないのは驚きです。

6年間ボーっとしてたわけではなさそうですね。」

キン…

「当たり前だあ」

ガキンッ！！

「…今日はここまでにしましょうか。

もう6時ですし」

あのあと、私とスクアールロさんは
お昼を食べてからもやりつづけた。

「…そうだな…

今日はベルか…

お前の目から見ても思う?」

「…そうですね。」

んー…

勝てんじゃないですか？」

「案外あっさり言うな…

ホントにそう思うのか？」

「ええ。

向こうが弱いとも思えませんが…

勝つと思いますよ。

…恐らく、ですが…」

まあ、私の勘ですがねえ…

それにしてもスクアーロさん。

強くなったなあ…

…あたりまえか。

今宵は、嵐戦



第31ワ。 S. スクアーロVS夜切日狩（後書き）

次回は嵐戦です…？

第32ワ。 リング争奪戦―嵐の戦い―? (前書き)

?がつくのは、戦闘シーン0だからです。

：時間が足りなかったのです。

今日2話もできそうにないです…

すみません…

この埋め合わせはきつと…いつか…

そして短いです。すみません。

第32ワ。 リング争奪戦―嵐の戦い―?

―日狩SIDE―

『は？』

オレ今日はいかねーぜ？』

何を言っておる。

なぜに…！

『めんどくせえ』

いや行けよ！

ボス様も行くんだよ！？

『…でもいかねえ！』

なんか嫌な予感する！』

でも行けよ！

『絶対にヤダ！

行くなら【蘭】として行けっ！』

はー…

わかったよ。

結果はスクアーロさんに聞こう…

「おかえりなさい

って、え…？

大丈夫なの…？それ…」

スクアールさん達が帰ってきた。

「さあな

だがまあ平気だろう。

…嵐戦の結果だが…

ベルはギリギリだったが、勝った。

次は雨…

オレがやる。」

……………勝てたんだ…

「詳しく、聞かせて…？」

嵐戦のこと…」

「…ああ。」

…聞いた話によると、

最初の方は圧倒していた。

しかし、ボムがベルに直撃しベルがキレた。

無駄の無い身こなしでこれで決まりか…？と思った（スクアーロさんは、だが。）。

だが、ベルのワイヤーを逆に利用され、窮地におちいる。

それでもベルは――――

リングを諦めなかった。勝利への執着心がベルの勝因、らしい。

「…ハア…」

「うかない顔だね

どうかしたの？」

マーモン…

「ん…

もしかしたら明日で日本ともお別れかも、と思うとねえ…」

「さみしいのかい？」

まあ、君の身内もここにいるんだろ？

そう思うのは別にいいんじゃない？」

「んー…」

そうですかねえ…」

まあいいんですけど、といい部屋にむかう。

「もう寝るのかい？」

「うん。お休み…」

「ああ。おやすみ」

明日の夜、
か…

第32. 5ワ。 設定―夜切鉄―（前書き）

日狩の持っている刀の紹介です。

夜切鉄は変形刀です。

第32. 5ワ。 設定―夜切鉄―

夜切鉄の形態

旧きゅうの型 漆黒シツコク
初型

壺いちの型 黒影コクエイ
素早さに特化した型

式しの型 月牙ゲツガ
切れ味に特化した型

参さんの型 深羅シンラ
化くわした型 纏う炎の大きさ・純度の高さを上げることの特

肆よんの型 真月シンゲツ
破壊力に特化した型

伍ごの型 燕雨エンウ
時雨蒼燕流を使うとその威力が上がる型

陸ろくの型 雪夜セツヨ
どんなことをしても人を絶対に殺せない型

漆しちの型 鬼心キシ
殺すことだけを考えた型

捌はちの型 黒龍コクリユウ
遠距離攻撃を可能にした型

野太刀 薄花桜ウスハナザクラ

太刀 暗鋼アンコウ

銀
刀

白シラ
鯨ザメ

第32. 5ワ。 設定―夜切鉄―（後書き）

短い文でした…

夜切鉄の型はいつ使うか全くめどが立っていません。

すみません…

ちなみに前回の駄文についてですが…

時間の関係もあって…

日狩『ただ早く終わらせたかったただじゃない？』

違いますー…？

切り捨てないでッ

と、言うわけでよろしくです…？

第337。 リング争奪戦―雨の戦い―上（前書き）

上下にわけて雨戦をやります。

第337。 リング争奪戦―雨の戦い―上

―ト―ヤSIDE―

今日は雨戦、か…

もうそろそろ来るか…？

『山本…どーするつもりだろう…』

おお、来た来た。

「スクア―ロオ」

「分かっている！」

バツ

「うゝおゝおい…！！」

ガッ

「良く逃げ出さなかったな刀小僧!!」

活け造りにしてやるぞおお!!」

「なぜにまた活け造り？」

いやぁ～それにしてもビビりすぎだろう。

沢田綱吉は。

「そうはならないぜスクアーロ

オレがあんたを

この刀でぶっ倒すからよ」

変形刀…

時雨蒼燕流、か……

「今宵の対決フィールドは校舎B棟です」

……今度は校舎か……

——なんじやこりや？

四方八方ふさがれてんし…

ザアアアアアア…

水…？

「これが雨の勝負^{バトル}のための戦闘フィールド『アクアリオン』」

最上階のタンクから放たれる水は勝負が続く限り上がり、

規定の水位に達したら獰猛な海洋生物が放たれる。

「面白そーじゃん♪」

ハッとオレたちがいることに気づくあいつら。

「ヴァリアー!!!!」

ここでボスのお言葉。

「負け犬はかつ消す

てめーらか

このカスをだ」

「なっ

うゝおゝおい！」

ボスがその場を去る。

ボス、本気だなー…

「スクアーロ…」

「？」

なんだあ？」

「アイツからの伝言」

そう――――――

日狩から――――――

「『負けたら承知しない マジ髪の毛剃るよ？』

だそーだ」

「…なんだそれはあ…」

ハナシわかんねーなあ…

スクアールは…

「要するに絶対に勝てよってハナシ！」

「フン…オレが負けるかあ」

「ならいい。」

じゃあまた後でな」

そういつてオレはヴァリアーの皆のところへ行った。

「それでは雨のリング

S. スクアールVS. 山本武

勝負^{バトル}スタート！」

第34ワ。 リング争奪戦―雨の戦い―下（前書き）

更新おそくなりました…

わけわからないところもあるかと思いますが、

どうぞ見逃してください…

では、雨戦下をどうぞ！！！

第34ワ。 リング争奪戦―雨の戦い―下

―ト―ヤSIDE―

始まった…

ついに…か。

どっちが勝っても日狩に影響すんだろうな…

『とばすぜえ！！！！』

スクア―ロがしかける。

その一振りをかわす山本武。

しかしその直後に仕込み火薬が炸裂する。

『ほうよけたか』

『あぶねー

あんたに負けてから毎日やってたイメトレのおかげだな』

…イメトレだけでかわせるもんなのか？

そして、またスクアールがしかける。

剣を刀にぶつけ、0距離からの火薬投下。

さすがにこれは避けられないかな…

……くらって……

ない？

あれは：

時雨蒼燕流 守式七の型

繁吹き雨――――

：驚いた。

まさかこんな近くに時雨蒼燕流の後継者がいるとは。

スクア―ロも驚いてるっばいな。

しかし、さすがはスクア―ロといったところか：

すぐ切り替えして攻めに転じる。

相手の周りをふさぎ、切ろうとするが、

時雨蒼燕流 守式弐の型 逆巻く雨でかわされる。

スクア―ロが笑っている：

ということは、決まったな。

この勝負、スクア―ロの勝ちだ…

『うゝおゝおい小僧!!』

なぜ防御のあと打ち込んでこなかった!!

愚かなアホがあ!

オレに唯一傷をつけることができた最後のチャンスをつぶしたんだぞお!!』

『!?!』

「ししし」

「どうやらスクア―ロは確信したみたいだね」

…山本武が攻めに入る。

一見あたったようにみえる。

が…

「めでたい連中だな」

「うむ…

ヴァリアーのボス候補になるということが

どれほどかわかってないみたいだね」

「フン…

スクアーロもさっさと決めればいいのに…」

「まあトーヤの言う事も最もだけど…」

「遊びたいんじゃないね？」

スクアーロのことだしっ」

「…そうだな…」

案の定、スクアアローは無傷

しかも山本武は刃ではなく峰をつかったようだ。

ふざけてんだろ…

山本武のわざに反応し、奇襲をかける。

すべて、スクアアローはみきっているのだ。

『その時雨蒼燕流は昔ひねり潰した流派だからなあ!!』

この絶望的なニュースを聞いたにも関わらず、

最強の剣と言ひ張る山本武。

「スクアアローが牙をむく」

その言葉通り、圧倒していくスクアール。

その時、柱の破片が右目にあたる。

山本武は右目が見えなくなる。

そして、また五月雨を使おうとするが…

ガキイイイイイイイ…

アタック・デイ・スクアール
鯨衝撃…

山本武は動けなくなる。

が、とっさに腕を打って硬直を解く。

だが、しばらくはあの右腕は使いものにならないだろう。

上に行って回復を計ろうとするが…

ガガガガガガガガッ

空間を突くように――――

かじるような剣撃――――

ザンナ・ディ・スクアーロ
…鯨の牙…

「はっ

何年経っても…

変わりばえのしねー野郎だ」

「さすがスクアーロというところかな」

まあな…

ちゃんと守護者の使命を体现してるしな…

だが――――

スクアーロが『秋雨』と言った後、山本武が起き上がった。

…まさか、スクア―ロの倒した後継者は――――

山本武の師範とは違う型を使った者――――？

時雨蒼燕流――――

攻式八の型――――…

篠突く雨――――…

スクア―ロがこのわざをくらった。

やっぱりオレの考えは正しかったようだ…

案の定スクア―ロは篠突く雨を知らなかったようだしな

そして篠突く雨は山本武の父親がつくったらしい…

どうりでスクア―ロは知らなかったはずだ

しかもまた峰打ち…

完全になめてんだろ…

『時雨蒼燕流』

九の型』

「「「!?!?!」」」

自分で型を作るつもりか!?!?

野球のような構え…
フォーム

そして――――

スコントロ・デイ・スクアード
鯨特攻…

剣帝を倒した奥義が見られるとは…

ついで…？

『死ねえ！！』

水をまとして仕掛けるスクアード。

『いくぜ』

スクアードが剣を振ると同時に

消える…？

『時雨蒼燕流…』

攻式九の型』

ガキン！！

スクアードからの斬撃をかわす。

『とどめだあ』

スクアールが出るが…

背後に山本武の姿が…

『死角は無い!!』

「違う！」

そっちじゃない！スクアール!!！」

『!?!』

ここで初めて気づくスクアール…

時すでに遅し。

カチンツと音が鳴り、義手が曲がり剣が水の影をつらぬく。

『うつし雨』

——スクア—ロが——

……負けた……

そしてボンゴレリングをあわせる。

山本武の勝ち、か…

「ぶったまげ」

「まさかこんなことがね…」

『……………』

日狩…

レヴィがニヤ…と笑いながら、

「ボス」

キモイ顔でいうなよ…

「……………」

恐らくボスは何かを思い出していたのだろう。

「……………スクアーロ……………」

突然、ボスが笑い出した。

「ざまあねえ！！」

負けやがった!!!

カスが!!!

用済みだ」

手を下そうとするボス。

「…ボス…」

ポツリとつぶやいたオレの言葉は誰にも聞こえていないだろう。

そうしてアクアリオンに海洋生物が放たれる。

スクアードは敗者のため、命の保障はない…

山本武はスクアードを助けようとするが

鯨が近づきかなり危険な状況だ…

『おろせ』

!!!

スクアール…

『剣士としてのオレの誇りを

汚すな』

全くたいしたやつだぜ…

スクアールは…

『スクアール…さん…』

そして、最後は鯨に喰われる。

「ぶは————っはははっ！……！」

最後がエサとはあの————ドカスが！！

過去を一つ

清算できた」

………

『それでは次回の対戦カードを発表します

明晩の対戦は…

暁の守護者並びに星空の守護者の2対2での勝負です』

———は？

なんでタッグバトルなん？

『…仮面取れ、トーヤ』

…日狩も何言ってるの？

『スクアール…助ける』

ムチャ言うなっतेの！

『取れ！』

だめだ！

『取れって言ってんだろ！』

だめなモンはだめなんだよ…！

『お願いだから…』

スクアーロを……………」

しょうがねえんだよ…

オレ達はヴァリアーだ…

弱者は、消す…

それが…オレ達なんだよ…！

『……………』

—
ツ
ナ
S
I
D
E
—

「星空と暁って…

みっちゃんと蘭ちゃんじゃん…

みっちゃんはともかく…

蘭ちゃんは最近学校にも来てないし…

どうすんだよ？リボーン」

「少しは自分で考えやがれ

つってもオレもどうなるかはわからないがな」

そんな…

…ほんとどうなるんだろう…？

蘭ちゃん…

来てくれるよね…？

第35ワ。 暁・星空戦開始!!! (前書き)

暁・星空戦が開始するところまでです。

更新おそくなりましてすみません…

PC禁止令がだされてまして…

第35ワ。 暁・星空戦開始!!!

―無人SIDE―

ボンゴレリング争奪戦、暁&星空の守護者戦の戦場は沈黙が支配していた。

一方は勝ち誇ったように。

もう一方は絶望に満ちたような顔で。

カチ…カチ…カチ…

「おいリボーン…

蘭ちゃん、来てくれないのかな…!?!」

「さーな

来ると願うほかねーな…」

「そんな…」

「あの時計の針が11時をさした時点で夜切蘭を失格とし、

トーヤの不戦勝とします

なお勝負は2対1という形でやっていただきます」

「…なにやってんだよ！蘭…！」

「まー落ち着けて…」

まだこないと決まったわけじゃねーんだからさ」

カチ…カチ…カチ…

残り10秒を切った。

9…8…7…6…5…4…3…2…1…「間に合いましたか？」

沢田綱吉らの集団の影から現れたのは、

「蘭ちゃん！」

「「蘭！」」

「夜切さん…」

「あー…」

おまたせしました…

夜切蘭、です…」

さっきまで絶望していた人たちは、口々にあんどの声をもらす。

しかし、勝ち誇ったような顔をしていた人たちの顔は、そのままであつた。

「約束の時間に間に合ったため、勝負の参加を認めます

今宵のフィールドは暗闇の道

ダーク・ロード

この階の廊下を完全な暗闇としました」

「なっ…それだけ？」

ツナはつい思ったことを口にする。

「はい

なお制限時間は無制限です

観覧席はこちらです」

そして、暁の守護者と星空の守護者以外の人は観覧席に行く。

「観覧席は暗視装置つきのカメラで守護者戦を閲覧できます

それでは暁・星空のリング

夜切蘭並びに木崎実歌

トーヤ並びにブラッドレイ

勝負^{バトル}開始！」

フッ

チエルベツロがバトル開始と言った直後、照明が消える。

宙を見つめながら、蘭が言った。

「ふーん…こーなってるの…

チエルベツロ…

これって両方のリングの行方が決まるまで私達全員戦えるんですかー？」

「はい

勝負が終わるまでたとえリングが相手に渡ったとしても

戦いは続きます。

例えば星空のリングが相手に取られたとしても

星空の守護者はどちらとも戦える、ということです」

「ふーん…」

小さくつぶやくと、

「夜切さん…

これってどういう風に戦うの…？」

そういわれた蘭は心底嫌そうに、

「（チツ）さあね

自分で考えたら？」

と、最悪の返しをしたそうなの。

このとき蘭は、

「なんで木崎なんだよ…沙絵とかでも良かったんじゃないの!？」
と聞いていたらしい。

第35ワ。 暁・星空戦開始!!! (後書き)

次回は暁・星空戦です。

戦闘に入っていきます。

第36ワ。 リング争奪戦―暁・星空の戦い―上 (前書き)

すみません。

めっちゃくちゃ短いです…

第36ワ。 リング争奪戦―暁・星空の戦い―上

―蘭SIDE―

キンッ

キキンッ

キイイイイン…

…なかなかやるな。

そーいやトーヤと戦うの初めてだったなあ…

――トーヤSIDE――

それにしても暗い。暗すぎる。

日狩も強くなったな…

日狩と戦うのは初めてだったか…

にしてもこの身体。

使いにくいな。

「おい」

「?..?..?」

ピン……………

『なに考えてんだ!?!』

あのトーヤってやつは!?!』

『さあ…』

観覧席からは、さまざまな声が漏れる。

それもそのはず。

トーヤがハーフボンゴレリングを蘭にはじいたのだ。

―蘭SIDE―

カチ…

リングを一つにあわせる。

みんなが啞然としている。

「これでいいの？」

「…はい。」

暁のリングは夜切蘭のものになったため夜切蘭を勝者とします

しかし星空のリングはどちらの物にもなっておりませんので

勝負は続けてください

もちろん、暁の守護者も戦っていただけます」

———この時をまっていた!!

「つかトーヤどこ？」

「こっちだ」

丁度真正面ってどこか。

スタスタスタ：

蘭は、トーヤの元へ、歩み寄る。

ザ…

「もう終わりか？」

もう少し遊びたかったのだが…」

「ワガママ言うなって…

早く終わらせたいんだよ！」

「はー…」

会話が終わった瞬間、腰元にそなえていた夜切鉄でトーヤを刺す蘭。

『！？』

殺し…たのか！？』

『そんな…蘭ちゃん！！』

—実歌SIDE—

なんで…?』

ブワッ

刺したところから炎がでる…

「「「！？」」」」

どう…なっているの———？

第37ワ。 リング争奪戦―暁・星空の戦い―中（前書き）

説明がちょっと長いです。

そして分かりにくいかもしれません…

そういうことがあった場合、質問してください。

よろしくです…

なるべく答えます！

第37ワ。 リング争奪戦―暁・星空の戦い―中

―ト―ヤSIDE―

ボオオオオ...

黒い炎がもえている...

オレの...炎。

シュ
ウ
ウ
…

炎が、きえた

「なるほど…」

こうなるのか…仁さんってすごいな…」

感謝しないとなあ…

「よ、夜切さん…?」

炎のおかげで辺りがよく見えるようになった木崎実歌が話しかけてきた。

「つかオレは日狩じゃねえし」

「何だ?」

「こ、殺し…ちゃったの?」

フッ

「フアハハハハハッ

『殺しちゃった』だあ!？」

…あまいんだよ…そんな覚悟でこの世界を見てんじゃねえよ!

ああ、そうだ」

――実歌SIDE――

「こ、殺し…ちゃったの?」

信じられなかった。

あの夜切さんがヒトを殺すなんて。

―――――そう思っていたのに……

突然笑い出したのだ。

しかも一明らかに違うヒトの雰囲気で：

「フアハハハハハッ

『殺しちゃった』だあ！？

…あまいんだよ…そんな覚悟でこの世界を見てんじゃねえよ！

ああ、そうだ」

突然何かを思い出した夜切さん（？）。

バサッ

「やっぱこの体はしっくりくるな…」

と言いながら、トーヤの着ていたヴァリアーのコートを着る。

「夜切さん…？」

何をやっているの—————」？

「はー…

説明してなかったか。メンドイなー…」

「???」

「オレは『トーヤ』、だ。」

……………え？

「だから、さっき燃えてたのがオレで
今しゃべってんのもオレなんだよ

つまりだな…

まあ、『二重人格』ってやつだ

オレと蘭（…でいいよな？）が分身？分離？まあどっちでもいいや。してたのは、

ある特殊な入れ物にはいつていてな。

特殊っつーのは、

蘭のじーさんがくれた炎をいれることによって

その人格ごと入れることのできる身体だ。

炎つつつても普通の炎じゃだめだ。死ぬ気の炎じゃないとな…」

一気に言われて混乱してる…わたしがいる…

「ま、無理しなくていいぜ？

要するに、オレと蘭は同じ（？）って意味だ。

そうそう、ブラッドレイもほぼ同じだぜ？

特殊なものがあの手袋になってるだけだ。

あいつ自身に意思があるからな…

そこだけはだめだった」

…最後、なんて言ったの…？

聞き取れないほど小さく言うなんて…？

「ま、説明はここまで。

オレと蘭はVARI A側だからな

でも暁のリングはお前らのものだ」

！？

なめているの————！？

ニヤ、と（自称）トーヤが笑い、

「ブラッドレイを倒せたらオレが遊んでやるよ。」

…ブラッドレイ。リングをよこせ」

「ハッ」

ス…

リングがトーヤの手元に行った。

「ありがとう」

！？

声が変わった！？

「さあ…木崎…

私を楽しませてよ？」

「…夜切、さん…？」

「おっ

正解です

良く分かりましたね…気づかないと思いましたが」

…なめているの？

夜切さんは

『どーなってんだ！？』

トーヤと蘭が！？』

『（……ありえねえな……

大体、夜切家には秘密がありすぎる。

資料もほとんど残されてねえみてーだしな…）』

へー…

あれが木崎の武器かー…

なんか以外ー★

木崎の使っている武器は、短刀。

リーチは短いが、結構切れ味がよさそうだ。

しかし、使い込まれた感じがしないので最近得たものだろう。

…剣がかわいそうだな…

もっと良い使い方があってのに…

『なあ日狩ー

さっさと終わらせよーぜ…』

ベルかー…

せっかちだなー

「まーまー…

私も遊びたいんだって。」

…それにしても木崎がここまでやるとはね…

星空の守護者の使命は、

『絶望に立ち向かうファミリーの手助けをする、

暗がりにも光る星—————』

つまり、主に『サポート』が重要視される。

だから、ヴァリアー隊員の中でもサポートに優れるブラッドレイをえらんだのだ

だからと言って決して弱いわけではない。

一般人に押されるほど—————

「やあッ！！！！」

ガキンッ

「くッ」

キンッ

キインッ

………飽きたな

ブラッドレイはついこの間まで一般人だった奴に押されてんし…

弱いなーどっちとも。

…てな訳で。

「ブラッドレイ。

もういい。

――用済みだ

死ね」

ドッ

「ゴブッ

…な、何を…！」

私は、ブラッドレイの腹を刺した。

「いやー

正直ここまでできないとは思って無くってね。

でも感謝してよ？

一時とはいえ、幹部になれたんだから」

「!?!?」

ひ、日狩……さ……」

ぱた…

「「「「「!?!?!?!」」」」」

「こ…殺し…た…の？」

「（ニヤ…）なにか？」

それが私の本業だし…」

血塗れた夜切鉄を血振りする

「さあ…

星空VS暁といこうか…?」

第38ワ。 リング争奪戦―暁・星空の戦い―下（前書き）

蘭のチート全開です！！

第38ワ。 リング争奪戦―暁・星空の戦い―下

―蘭SIDE―

スパッ

「きゃ…ッ

夜切さん、あなた自分が何をしているか、わかつ…」

ぎゃーぎゃーうるせえな…

と思ったから、口元に夜切鉄をかざしてやった。

あいつの驚く様…

無様だよな…

ガタガタガタ…とふるえる木崎。

「おいおいおいおい…

まだ本気もだしてないし殺気も全然だしてないんですよ？

少しはいけると思った私がバカみたいじゃないですか…」

剣先を引っ込める。

『…蘭』

『ど、どうしたの？山本…』

『いや…なんでもねえ…』

(蘭…

どうして…？)
』

「ハア…

ちよつとは耐えてみてくださいよ…」

そろそろ飽きたー

「ハア、ハアツ…

夜切さん、貴女…何者なの……？」

「あなたなんか言う必要はありませんが…

ま、モニタールームにいるトモダチのためにいいでしょう。

私は、そうですね———：

簡単にいいますと、

初代ボンゴレファミリーの暁の守護者、『アース』の子孫です。」

『！！！』

アースは『夜切』という名字じゃねえぞ』

「聞いた話によりますと

ブリーモ
？世と一緒に日本に來たそうですよ。

…しかし、話せるのはここまで…ですね。

これ以上は話してはならない掟がありますから…」

そういつて、夜切鉄をかまえる。

「おしゃべりが過ぎましたね…

本当なら殺したい気持ちで山々ですが、武がいますしね…

『重傷』程度で済ましてあげまあすよ」

「!!!!

夜切さん…」

キッと睨みつける木崎。

…全然怖くねえ…

「殺気っつーのは…」

「???」

「こういう風に出すもんなんですよ！……！」

ブアッ……！！

「……！！……！！……！！……！！」

ガタガタガタ……と震え、絶望にみちた顔になり、
地面に突っ伏せる。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、……」

……う………」

「……暁の守護者の使命って知ってるか？」

『トーヤ！

いきなり出てくんな！』

『いーじゃん別にー……』

木崎は先ほどまでの殺気が消えたため、少々ラクになっているだろう。

しかし、口調が変わって驚いている。

「ああ、言ってなかったが今のオレはトーヤだ。

…暁の守護者の使命はな…

『星空と共に絶望に立ち向かうファミリーの手助けをし、

絶望を希望に変える夜明けの暁—————』

…星空と共につてのは初代の暁と星空が親友だったためと言われている。

だが、オレはそうはおもわねえ…

親友だなんて、な…

なぜだか分かるか？」

「!？」

ハア…こんくらいもわかんないのか。木崎は…

「それはな、

いくら探してもねえんだよ。

なにもねえんだ。初代星空に関してのものがな…」

「…全部捨てた、とかじゃないの？」

「んなわけねーだろ…

『親友』だった筈のやつなんだぜ？

…だから、オレは『上辺だけの仲』って想像をした。

いや、それか――――

『なにかキツカケがあって、

それから『親友』とまではいかないが、仲良くなった』だな…

…オレは前者だと思うぜ？」

「―――！？」

なにが…いいたいの？」

「何でもないですよ…」

「！？」

夜切、さん―――？」

おお。

「またまた正解です。」

…では、そろそろ終わりにしましょうか…」

ドッ

私は、木崎の腹を思いっきり蹴る。

ふっ飛ばないように、手をもってだが。

ドッ

ドンッ

ドッ…

蹴りを、何発も入れる。

「!!!」

よ、ぎり…さ…ん」

ばた…

…最終的にちょっとした切り傷と打撲(?) だけだったな…

木崎は。

カチ：

リングを1つに合わせる。

「…これで1対1、ですよね？」

「はい。」

…星空のリングはヴァリアー側の物となったので、
星空のリングはブラッドレイのものととなります」

…明日の対戦は誰だろ…？

「それでは次回の対戦カードを発表します

明晩の対戦は……

霧の守護者同士の対決です」

マーモンか…

そういや、綱吉がわの霧って…？

誰なんだろう…

ウラバナシ4. 暁・星空戦後の”暁”

―日狩SIDE―

暁・星空戦の夜が明けて、次の日。

今日は、霧戦――――

「おはようございます…」

「お？」

日狩にしては遅いじゃん？」

「いえ…そうでもないですよ…」

ところでボス様…今日一度実家に帰りたいのですが…」

「……………いいだろう

だが、話がある。用事がすんだら来い」

…なんだろう？

用事、なんて…

「わかりました。

すぐに…」

そう言って、私は家に向かった。

「ただいまー…」

「おかえり。」

「どうだったか？」

居間で真っ先に入っしたのは、セジルさん。

…おじいちゃんはどうしたんだろう？

「セジルさん…」

…もちろん、勝ちましたよ？

「刀の手入れをしに来たんですが…」

振り向くと、いつの間にか後ろにいたおじいちゃん。

「刀を貸せ。」

ワシがやっておく…

今日の夜、また来ればいいだろう？

…それに、何かあるんだろう？」

ワオ。

さすがおじいちゃん。

「…なんでわかったの？」

フツと笑って、

「お前の祖父なんだぞ？」

理由はそれだけで十分だ。」

「…はい。」

では、よろしく願います。」

「任せておけ。」

今度落ち着いたら、この話をしてくれればいい。」

「…ありがとうございます」

…やっぱり、おじいちゃんは何でも分かっている。

すごいな…

現在、私はボス様の部屋の前にいます。

…話ってなんだろう…？

ドアをノックして、

「…日狩です。

入ります…」

ガチャ…

「…………日狩か。」

「…それで、話とは――――」？

「…………リング争奪戦のことだ。」

もし――――「…」

…そうか…

…やっぱり、ボス様は――
…

ウラバナシ4. 暁・星空戦後の”暁”（後書き）

…来週から期末テストなんで、更新はあんまり出来そうにありません…

（期末）テストなんて、人間のすることじゃない！！！！

日狩「それが来年受験生のいうことですか…？」

トーヤ「それに初の、なあ…」

…うゝ…

それをいわれちゃ…

…ともかく。

申し訳ないです…

すみません。

ウラバナシ5. 暁・星空戦後の”星空” (前書き)

駄文(?) ですね…

はい。

ツナと実歌とある人しか出てきません。

でも一応呼んでください…

ウラバナシ5. 暁・星空戦後の”星空”

—実歌SIDE—

「う…」

ここは、どこ？

あたりを見回すと、白っぽいものがたくさんあった。

——病院？

なんで——

こんなところに——？

そして、思い出す。

「…そうっだ…」

負けたんだ…夜切さんに…」

昨日の、リング争奪戦。

でもまさか、トーやって人と夜切さんが同一人物だとは思わなかった。

…ツナ達の、役にたてなかった。

——山本君に、いいところ見せたかった。

何より、負けたくなかった。

「—————ああ…」

不意に、ノックがされた。

「…みっちゃん？」

……いい…かな？」

ツナ…

「…どうぞ。」

ガチャ…

入ってきたのは、ツナだけだった。

「…リボン君は…？」

「あ…今日は調べ物があるとか言ってたよ？」

…昨日はゴメン…!!」

!？」

「なに…言ってるの？」

ツナのせいじゃないんだよ？

わたしが…傲慢だっただけ…

だから、ツナが気にすることないんだよ？」

「…でも…

それでも、ゴメン。

まさか…蘭ちゃんがヴァリアー側だったとは…思わなくて」

…いいのに…

「本当に…ごめん。

やっぱり戦うべきじゃなかったんだ…！」

そんな…

「そんな事ない！！！！」

「！？」

「だって、わたしの自業自得だったんだよ!？」

ツナが気にすることなんて、絶対に無い!!!

…もう、帰って…くれる？」

「!！」

…ゴメン…じゃあ、ね…？」

「うん…ごめんね…」

ありがとう…」

…はあ…

こんなつもりじゃなかったのに、な…

夜切さんはすごいな…

「他人のことをうらやんでいる暇があったらさっさと自分のケガを治せば？」

「!？」

だれ!？」

右の壁際にある窓から聞こえてきた声。

「言う必要はねえよ。」

ひ…蘭のことをうらやんでる暇があったら、

自分のことをよく見返してみろよ。」

…誰かはわからないけど…

「わたしの…

わたしの、何が分かるって言うのよ!…!!

なにも知らないくせに…!!」

「ああそうだ。」

何も知らん。」

答えは単純だった。

「だが蘭のことは良く知ってる。

お前はあいつが物心つかないころから修業していたことを知っているのか？」

！！？

「あいつが物心つかないうちから殺しの現状を見ていたことを知っているのか？」

…そんな…

「知っていたならいいでしょう。

だが知っていたのか？お前は。

これを知って尚も…

いや。これ以上はやめておこう。」

…このひとつて…

「あなたは、誰ですか？

わたしの…知っている人ですか？」

「おまえに言うつもりはない。

邪魔したな…」

ガッ

…行った…？

…だれなんだろう…

あのひとは――――…

ウラバナシ5. 暁・星空戦後の”星空”（後書き）

駄文にお付き合いいただき、ありがとうございました。

ある人とは、セシルです。

：分かっていた人もいたでしょうね。

ハイ。

次回は、霧戦です：

第397。 リング争奪戦―霧の戦い―

―蘭SIDE―

…霧戦は体育館、か…

そういやあ、向こうの霧ってだれだろう…？

骸、とか…？

いや、それはないな

そんなことを思っている間に、向こうの霧が来た。

―！？―

ウソ！？

―風― …

『クローム髑髏』って名乗っているが、あれは確かに凧だ

「へー…あれがね…」

もっと仙人のじーさんみたいのが出てくると思ったな

女かよ」

「よ……妖艶だ……」

「…レヴィさん、向こうの霧、友達なんだよね

よって手えだしたら…

殺しますよ？」

殺気はあまり放ってないが、笑顔の私を見て、

「…う、うむ……」

と言った。

…というか…なんで…

凧が守護者なの…？

「それでは霧の対戦

マーモンVS・クローム髑髏

勝負開始！！！^{バトル}」

まず、凧————否、クロームが幻覚で足場を壊す（？）。

やっぱ幻覚を使うのか。

でも、私には効かない…

もちろんマーモンさんも。

マーモンさんも、幻覚で反撃する。

それにしてもすごいよなー…術士って…

そして、マーモンさんがアルコバレーノの力を解放する。

「やはりな…

奴の正体はアルコバレーノバイパー」

…クロームとマーモンさん…

どちらに勝って欲しいのかな…私は…

クロームが幻覚の火柱をたてる。

でも…

ピキイイイイン…

マーモンさんが火柱を凍らせる。

…クロームが…

幻覚にかかった…？

「術士にとって幻覚を幻覚で返されるということは

知覚のコントロール権を完全に奪われたことを示している」

ビキビキビキ…

クロームの足場が凍らされていく。

そのままふっ飛ばされたクローム…

しかし自分の身よりまず槍を確認した。

それに気づいたマーモンさんは、槍を壊す。

「!!!!!!」

血を吐き、倒れる。

腹が陥没し、顔色が悪くなる…

これは、信じたがいけど…現実…

「にわかに信じたがい

彼女は幻覚で出来た内蔵で延命していたらしいね……」

…やっぱり…

『オイ…

骸が、来るぞ』

……はい？

『だから、…

あれ見ろ』

そういわれてクロームを見ると、

なんと霧で包まれていく。

「クフフフ

随分いきがってるじゃありませんか

マフィア風情が」

…本当にキター！！

そして、そこからは圧倒的だった。

マーモンさんの攻撃は全て返される。

力を全開にしたマーモンさんだったが、それでも―――…

「す…すんげっ」

「夢でもみているのか…

う…うぶ」

「だらしないですねー…

それでもVARI Aの幹部ですかー？」

「き、貴様ッ…」

「あー、ちょっと黙っててもらえます？

戦いを見たいですから。」

「……………」

…それにしても、すごい。

こんなの滅多にお目にかかれないよ…？

マーモンさんが全力で戦ってもかてない…

「墮ちろ

そして巡れ」

おお

カッコいいねえ

リングを取られても、戦おうとするマーモンさん。

でも…もう――…

「ムムム!!!」

やめろ!

死ぬ!死ぬゝ!!」

「君の敗因はただ一つ

僕が相手だったことです」

ドンッ!!

「ギャ」

マーモンさんを…粉々かよ…

でも、生きてるな。

逃げちゃったけど。

そうして、骸がクロームに戻る。

「明日はいよいよ争奪戦の最終カード

雲の守護者の対決です」

…そういえば、向こうの雲ってだれ？

ま、いっか。

「雲の対決でモスカが負けるようなことがあれば

全てをてめーらにくれてやる」

————ボス様…

どうか————…

第397。 リング争奪戦―霧の戦い―（後書き）

投稿遅くなってすいませんでした。

第407。 リング争奪戦―雲の戦い―上

―蘭SIDE―

「やあ

久しぶりだね、蘭」

ゲ…

「きよ、恭弥先輩…？」

「ここまでたくさん休むとは思ってなくてね…

君の仕事もけっこうたまっているんだよ

…それになんだい？

その髪の色」

「あ、すみません恭弥先輩。

並中中退させていただきます

そして、これは地毛です

今まで黙っていてすみませんでした」

「…なにいつてるの？

そんなことはできないよ？

それに、いままで髪を染めていたのかい？

まあいいや。そんなことは別に…」

「…とことん権力を使いますね…（別にいい、か…）

ま、いいでしょう。

では、卒業まで休学させていただきます。」

「ハア…」

ため息をつかれた…

「ところで何で恭弥先輩がここに？」

「なにやら面白いのが咬み殺せるらしくてね

それを咬み殺しに来たんだ」

…まさか…

「…刻印のはいったリングを貰ってませんか？」

「ああ…

そういえば貰ってたね

どうでもいいけど」

……………さすが恭弥先輩。

…少々飛ばさせてもらいます。

——割愛。——

「それでは始めます

雲のリングゴーラ・モスカVS・雲雀恭弥

勝負開始！！！！」

さて…恭弥先輩はどのくらい強いかな？

ガギン！

ゴギヤツ！！

ピシピシピシ

ドオン！！！！

「ヒュー

恭弥先輩すごいッス」

「なめてるの？」

といいながらリングをあわせる。

みんな驚きすぎじゃね？

ま、これから起こることにもっと驚くだろうけど…

「これ知らない」

「へ…？」

「さあおりておいでよ

そこの座ってる君」

…ボス様は年上ですよ？先輩…

「サル山のボス猿を咬み殺さないと

帰れないな」

「なぬ！」

…

「なぬじゃねーよタコ

それ以前にこの争奪戦

オレらの負け越しじゃん

どーすんだよボス——」

まだモスカが起動しているのがわかったボスは、先輩に蹴りかかる。

「足が滑った」

「だろうね」

「ウソじゃねえ」

カチ

ピ————ッ

地雷…

ドオン

地雷を踏んだボス様は、右に避けた

「そのガラクタを回収しに来ただけだ
オレ達の負けだ」

…
もうすぐ、
か…

第407。 リング争奪戦―雲の戦い―上（後書き）

お久しぶりです…

矢川です。

テストによりしばらく更新できませんでしたが、

これからはがんばります。

そして、ここでお知らせがあるのですが…

嘆きの月夜を未来編に入る手前で休載させていただきます。

理由としては、活動報告をみていただければ分かります。

…勝手にすみません。

矢川智、精一杯やらせて頂きますゆえ、

これからもよろしく願います。

第41ワ。 リング争奪戦―雲の戦い―下

―蘭SIDE―

「そのガラクタを回収しにきたただけだ

オレ達の負けだ」

「ふうん

そういう顔には」

ダッ

先輩がボス様に向かって走り出す。

「見えないよ」

先輩がボス様に向けて攻撃をするが、かわされる。

ここで笹川センパイがなんか叫んだけど、まあ気にしない方向で

フィールドの仕掛けで二人に攻撃がなされるが、
二人はそんなものないというように戦い続ける。

「安心しろ

手は出さねえ」

「好きにしなよ

どのみち君は咬み殺される」

………

「おのれ～～！！　ボスを愚弄しておって！！」

…ウザ…

レヴィさんって何からできてんの？

「まてよムツツリ」

「ムツツリ!?!」

「勝負に負けたオレらが手一だしてみ

次期10代目への反逆とみなされ、ボスともども即うち首だぜ」

「正論だね

ま、私にはカンケーないけど?」

「むっ

貴様…!

ではあのガキを放っておけという「うん 放っておけばいいんだ
よ…」!?!」

「やっぱなんか企んでるんだろ?うちのボスは」

「そ…

ま、それはあとでのお楽しみってところで」

「……へえ……」

バチッ

ワオ。

ボスが手でガードしたよ。

「手……」

出てるよ?」

「あやつボスの動きをとらえてるだど!」?

「アンビリーバボー」

「くっ」

ボス様は手を引っ込める。

そして恭弥先輩がまた攻撃を開始する。

「チェルベッロ」

「はいXUNXUS様」

「この一部始終を忘れんな オレは攻撃をしてねえとな」

「!？」

…ついに…

ブオン

…来てしまった…

ブシュッ

恭弥先輩の左のももに、それが掠める

すみません…先輩…

今度ばかりはなにも…できません…

武…隼人…ごめん…

ごめん…！

ドンドドン！

あ、ベルさん達、大丈夫…だね。

ま、レヴィさんはどーでもいいけど♪

「……………なんてこった

オレは回収しようとしたが向こうの雲の守護者に阻まれたため
モスカの制御がきかなくなっちゃった」

「なに！？

暴走だと!!?」

「…………武…隼人…」

ザ…

私は、隼人や武の後ろに行く。

なるべく、平静を装いながら―――…

「あ……

圧縮粒子ほ「武、隼人…」!？」

「ごめん…これだけしか言えないんだけど…

…ガンバって逃げて。

私なんもできないからさ…」

「「蘭!!?」」

「あー…ごめん。

もう（クロームのところに）いくわー」

「フフ……

ぶはーはっは！！

こいつは大惨事だな！！！」

ボス様が笑う。

カチ

ピーーーーッ

…クローム？

ドガンッ

「!!!!!!」

クロームッ!!?」

ドサッ

…なんとか、城島犬と柿本千種が助けてくれたっぽい…が…
フィールドの仕掛けとモスカによって逃げ場がない…

「クローム!!!!」

逃げて…ッ!!!!」

ガガガガ

ブオッ

仕掛けとモスカに完全に挟まれ、砲撃される――――

ドウッ

!!

炎の壁…

カラカラカラ

フツ

仕掛けとモスカは止められた

ある者によって…

シュウウウ…

来たか…

その拳に…Xの文字のあるグローブを着けた者――

沢田、綱吉…

私はクロームのところへ行った…

「ごめん…

クローム、大丈夫？」

「うん…大丈夫だよ…」

…よかった…

「あれは……」

「じゅ…10代目!」

「……」

「綱吉…」

「来たか……だが」

モスカは再び暴走し始めた

爆弾が、綱吉に降りかかる

シュルルルルル…

「カスから消えていく

それに変わりはねえ」

しかし、綱吉はモスカを圧倒する

炎で飛んだり、モスカの腕をもぎ取り、破壊したりした。

そしてモスカは綱吉をターゲットにするが、だめだった。

「つ……強い!!」

「ああ」

「さすが10代目!!」

「ボ……ボス!!」

「……!?!」

ボス様は、笑っている。

その理由を知る者は、私の他にはいないだろう…

「XANXUS…：一体これは」

ボフアッ

綱吉が何かを聞こうとした時、モスカが再び飛んできた

バン

綱吉は左手だけで受け止める

グググ…

ボウッ

右手の炎が大きくなる

ズバッ

綱吉はその炎でモスカを縦に切り裂いた……

「おお!!」

「やったぜ!!」

…このときの私の顔は、とても悲しそうだった、とクロームにその後で言われた…

ズンッ

ズ…ッ

モスカの中から出てきたのは、——— ……

「!？」

ゴッ

「9代目…」

そう、これが本当の目的…

綱吉が9代目を手にかけさせること——— ……

みんな、9代目がモスカから出てきたことに驚いている。

「ど……」

どうなってんだ……………？

……………え？

なんで…………モスカ…………から！？」

綱吉の横に、リボンが来る

「おいしっかりしろ！

！

ちっモスカの構造……………前に一度だけ見たことがある……………

9代目は……………

ゴーラ・モスカの動力源にされてたみてーだな」

「！

動力源！？」

「そんな！」

「ど……」

「どーして!？」

「どーしてじゃねーだろ!」

「!？」

「てめーが9代目を

手にかけてんだぞ」

ボス様が綱吉を責める…

「やべーな

応急処置でなんとかなる傷じゃねえ…」

「そんな…!」

「誰だ？」

じじいを容赦なくぶん殴ったのは」

「！」

みるみる青ざめていく綱吉…

「誰だあ？」

モスカごとじじいを真つ二つに焼き切ってたのはよお」

「！！」

そ　そんな…

オ……オレが…

9代目を…」

「…………ちがう…」

9代目が…

「悪いのは……

私だ……」

意識を取り戻した…

「9……9代目!」

「やっと会えたね…

綱吉君…

すまない…

こうなったのは全て私の弱さゆえ…

私の弱さが……

XANXUSを永い眠りから

目覚めさせてしまった……」

「!!」

「!？」

「眠りとはどういうことだ？」

XANXUSは揺りかごの後ファミリーを抜け
ボンゴレの嚴重な監視下に置かれたはずだぞ」

「ゆりかご……？」

「8年前に起きたボンゴレ史上最大のクーデターのことだ

反乱軍の首謀者が9代目の息子XANXUSであるという

恐ろしい事実が機密扱いにされ

知るのは上層部と、この時戦ったボンゴレの超精鋭のみだがな……」

「XANXUSは…8年間止まったままだったのだ…

あの時のまま眠り続けていたのだよ

恐ろしいほどの

怒りと執念を増幅させて……」

綱吉達がなにか聞こうとするが、9代目の状況が悪化する

それでも綱吉にリボーンに聞いたことを語っていた…

「君が一度だって喜んで戦っていないことも知っているよ……

『いつも眉間にシワを寄せ……

祈るように拳をふるう…』

だからこそ私は君を…

ボンゴレ10代目を選んだ……」

そして、9代目が人差し指を綱吉の額にあげ、死ぬ気の炎を灯す…

しかし、その炎はどんどん小さくなっていく…

「だが 君で……

よかった…」

ふっと手が崩れ落ちる…

「待って…!!」

そんな……

待ってください…!!

9代目!!

9代目ー!!」

9代目は目を伏せ、リボーンは悔しそうな表情を浮かべている

「よくも9代目を……!!」

「!?!」

「9代目へのこの卑劣な仕打ちは実子であるXANXUSへの
そして崇高なるボンゴレの精神に対する挑戦と受け取った!!」

「な!?!?!」

「しらばっくれんな!

9代目の胸の焼き傷が動かぬ証拠だ!!」

ボス殺しの前にはリング争奪戦など無意味!!

オレはボスである我が父のため そしてボンゴレの未来のために

貴様を殺し

仇を討つ!!」

そう――――

これが、本当の目的――――……

綱吉を悪役に陥れ、弔い合戦で9代目の仇を討つ…

そうすれば、多くのファミリーから絶大な信頼を得られる。

それに、揺りかごを知る上層部からも信頼を得られるだろう…

「XANXUSU

そのリングは……

返してもらおう……

おまえに9代目の跡は

継がせない!!」

生意気ー♪

「ボンゴレの歴史に刻んでやる

XANXUSUに楯突いた愚かなチビが一人いたとな」

「二人じゃないぜ!」

「10代目の意思は

オレ達の意味だ!!」

「個人的に」

「くるかガキ共!!」

「いいねえ」

「早く殺ろーよ」

各自が武器を構える。

「反逆者どもを根絶やせ」

このまま戦闘に入る—————と思われたが、チエルベツロにより静止され、

この吊い合戦を大空のリング戦と位置付けた。

「あーらら

モドキに執行猶予あげちゃったよ」

「なに！」

「てんめー！！」

「ツナは修行で力を使い果たしてたんだ

グッドニュースだぞ」

「フッ

明日が喜劇の最終章だ

せいぜいあがけ」

ピンッ

ボス様がハーフボンゴレリングをはじき、
綱吉に渡す

「！」

カッ

ボス様が辺りを光らせ、VARRIAの者たちは並中を後にした。

第41ワ。 リング争奪戦―雲の戦い―下（後書き）

更新が遅くなって申し訳ありませんでした。

…もう1日一回はできなさそうなので不定期更新にします…

…………モチロン1日一回を目標にしますよ？

それでは…

第42ワ。 大空戦前…

—ト—ヤSIDE—

『おい…

ど—すんだ？今夜の大空戦…』

『ど—するって…

ど—もしないよ』

そ—じゃねえし…

『どつちがでるか、だよ…』

『…ああ……

ま、とりあえずト—ヤが出てよ。

VARIA側から出たい…出るし』

ん、まあそうだろうな。

『でも…』

招集されてるから…

でも出るのはどっちでもいいって言ってたけど…

多分やっかいな事になるよ…』

…そうか…

日狩がそう言うなら間違いないな…

『今日はオレで過ごしたいんだが…』

『ん、いいよ…』

じゃあ変わるか…』

……

「随分久しぶりに感じるな…」

『独り言とかないんですがー』

おめーは黙ってろよ。

『はいはい…』

「お、日狩じゃんー

…や、トーヤ…？」

そこに来たのは、ベル。

「正解♪

こうして話すのは久しぶりだな…ベル」

「ん、やっぱりトーヤだ

日狩はさん付けするからね」

おおー、さっすがベル。

よく分かってるな。

「でも日狩じゃないのかよー…

ちえ…」

舌打ちされた!!!

まあいい…

「…まさかVARIAともあろう者達がこんなに…

それに中坊にやられるなんてな…

ベルも危なかったしな

オドロキだぜ」

「しししっ

言ってくれるじゃん♪」

そういつてナイフを取り出す。

「こんなことしていいのか？

ボスがいるんだぜ？」

「んー…そうだな…

じゃあまた今度「やんねえよ!」…ふう…」

ため息ついてんじゃねえし…

「そーいやマーモンとかルッスーリアとかも招集されてんの？
並中に…」

「そうじゃね？」

「反応薄いなー…

今日は喜劇の最終章だぜ？

宴だし」

「…おまえってわかんねーな…」

「?なんか言ったか？」

「や？

べつに…」

…そうか？

ま、いっか！

…レヴィも（当たり前だが…）くんだよな…

…やだなあ…

今日は、大空戦…

第42ワ。 大空戦前…（後書き）

更新遅くなってスミマセンでした…

1日1回目標なんて無理だったのか…自分は…

「無理無理、諦めろ」

な、なんてことを言うんだね君は…

次回

『リング争奪戦―開戦！大空の戦い―』（仮タイトル）

ついに始まる大空戦…

蘭とトーヤはどうするのか…

「まあ何はともあれ次回もこんな小説だがゆっくりしていつてくだ
さい」

そ、それではまた…

第43ワ。 リング争奪戦―“開戦!” 大空の戦い―

―トーヤSIDE―

ただ今、オレは並中に向かって走ってる。

…みんな集まってるだろうし…

急がねば!

―無人SIDE―

並中。

現在、夜切蘭（トーヤ）が来ていない。

「蘭は…

まだ来てねーのか？」

ガンッ！！

空から何かが落ちて（？）来た

「なっ…

何事——！！？」

「…今来たぜ

ま、“蘭”じゃねーがな。」

面を着けたトーヤだ。

そして、全てのリングを回収し、大空戦のルールを説明する。

「それでは

大空戦のルールを説明させていただきます

大空戦も他の守護者同様

リングを完成させる事が 勝利条件の1つとなります

ただしフィールドは学校全体

広大なフィールドでの戦いを観戦できるよう

観覧席と各所に小型カメラと大型ディスプレイ

そして守護者の皆様には

カメラ搭載型モニター付きリストバンドを用意しました

では守護者の皆様はリストバンドを装着し次第

各守護者戦が行われたフィールドに移動してください」

ここでレヴィが質問をしようとするが、却下された

そして全員が各フィールドに到着した

「何だ…？ この棒は」

『各フィールドに設けられたポールの頂上には

フィールドと同じ種類のリングが置いてあります』

嵐の奴らが戦えるのか、と聞いた時だった

グサッ！

リストバンドに内蔵されていた毒が守護者全員に注入された…

この毒は、30分で命が奪われる代物

晴・雷・嵐・雨・星空・暁・霧・雲

全てに染まりつつ 全てを飲み込み包容すること…

それが大空の使命———：

そして、毒の解毒方法…

守護者のリストバンドに守護者と同じ種類のリングを差し込むことだ

そうすれば内蔵された解毒剤が投与される…

そう、勝利条件の2つ目は

『ボンゴレリングを全て手に入れること』

説明が終わり、ツナが『早く始めよう』と言った途端

XANXUSがツナを殴り飛ばした

『大空のリング

XANXUS VS. 沢田綱吉

勝負開始!!
バトル

「（バトルが開始されたか…）」

そう思ったのは、他でもないトーヤだ。

「さて、と…」

毒が注入されたはずなのにトーヤが起き上がった。

「とりあえずは解毒だな。」

そう言って、廊下の真ん中にあるポールの上にあるリングを取り、解毒する

ニヤ…と笑い（実際は面の中に隠れて見えないのだが）、実歌に話しかける

「なあ…木崎実歌…？」

…解毒して、欲しいか？」

弱弱しくもうなずく実歌。

「…なら、約束しろ。」

この戦いには手を出すな。

出したらそんなときは…

お前を、殺す」

ビクッ

そして、またトーヤはうつすらと笑みを見せた（これも実際は見えない）

「…よく耐えたな。」

この程度の殺気を耐えられねエ様じゃ…

………られねえからな…

ま、両腕と両足は塞がせてもらうぜ」

そう言い、両手両足を縛ったあと、解毒をした

「…ありがとう…

…なぜ、貴方には毒が効かなかったの…？」

「…オレが…

ひ…いや、蘭がどんな状況の中で育ってきたか…

セジルに教えてもらったんだろ？」

「…セジル？」

そう返されて、しまった、というような顔になったトーヤ。

「…この前の！

…お前が入院していた時、“ダレカ”が来たろ？

それが『セジル』だ」

「…セジル、さん…」

「で！

聞いたんだろ？」

「…ええ…

そう…だから効かなかったんだ…」

「ありとあらゆるモノに対抗できるように、な…

…そろそろヒマになってきたな…

…じゃあな、木崎実歌。」

それだけ言ってトーやは廊下から姿を消した。

第44ワ。 リング争奪戦―“解毒”大空の戦い―

（作者より）

今のトーヤ（蘭？日狩？）の装備は、

顔に仮面

服

いつもの着物の上にV A R I A隊服

武器

右腰…暗鋼、夜切鉄

背中…薄花桜

隊服の内側に鎖鎌を潜ませている（クナイも同様）

それでは、本編をどうぞ。

ー トーヤSIDEー

前回木崎実歌の解毒をしちまったトーヤだ。

解毒した際、日狩に怒鳴られたが、気にしねえぜ★

ん？リング？

両方持ってたに決まってるだろ！

「さて、これからどうしようか…」

普通に考えるなら解毒だけ…

つかメンドイ!!!

何!?

なんなのリング戦って!!

ということで、バトンタッチしたい!

『は?』

何言ってるの?』

だから、バトンタッチ…

『……………』

今すごく嫌な目で見られた気がします。

なのでもう少し頑張ってみようと思う。

以上!

―無人SIDE―

トーヤが一人(?)漫才をやっているころ、

沢田綱吉 VS XANXUSの戦いはヒートアップしていた。

「……………」

カスごときに武器をとるとはな…」

そう言って煙の中から姿を現したXANXUS――…

その手には、銃が握られていた。

「2代目の炎に7代目の銃…

こいつは凶悪な組み合わせだぞ……」

その銃のカードリッジには、死ぬ気弾と良く似た弾が入っており、

それには炎を吸収する性質がある

2代目の炎は破壊力は抜群…

よってその銃の威力はとてつもない威力になるだろう…

「ああ？

とつとと片付けるんじゃないかったのか？

それとも超直感が死を予感したか」

ツナは炎の力を使う高速移動でXANXUSに近づこうとする。

しかしXANXUSは銃を使って高速移動を可能にした。

それにより、機動力は並ばれてしまったツナ。

コオオ…

「散れ」

チラ…

一瞬後ろを確認したツナ。

「!？」

ドン

「うっ」

ツナは少しひきつけて弾を避ける。

「（なぜあんなよけかたを？）」

「あの方向はやべーんだ」

「!!?」

ドコオ！

「体育館!!」

そう、XANXUSが一撃を放った先には、霧の両守護者がいるのだ

「ボ……ボス！

あと少しで当たってたよ…」

ツナが一瞬ひきつけたおかげでマーモン、クロームは共に無事だっ

た。

タンッ

ダッ

ツナとXANXUSが校舎の壁に立つ。

「ふっ そうか……………」

ほざいていたな 守護者は誰も死なせんと

それで貴様は 何を得た」

「？」

ツナは、XANXUSが何を言っているか分かっていなさそうだった。

「オレは部下が死のうがどーでもいい

見ろ」

「！」

スクリーンを見る。

そこに映し出されていたのは毒に苦しむVARRIA幹部達だった。

晴…

『お願いボス！助けて！！』

な…何だってしちゃう！！』

霧…

『もう…負けないよ！！』

一生ついていくよ！

ハア…ハア…

財産も半分あげるから！』

嵐…

『リング…集めんの…』

手伝うからさ…』

雷…

『お助けを…

そして何なりと…ご命令を！！』

暁…

『あっボスか？

やっべ、苦しんでるフリしとけばよかった…』

「「「！！？」」」

モニターを見ている全員が驚いている

「そんな…」

デスヒーターは野生の象ですら歩行不能となる猛毒…」

『あー、オレにはどんな毒も効かねーぜ』

あいつが小さい頃から仁ジィに

ありとあらゆる毒の耐性をつけさせようとしてたらしいからな…

恐ろしいぜ…

あ、まだ誰のところにも行ってないぜ？

…オレは誰が死のうと知ったことじゃないからな…』

「…お前が毒が効かないのは知っていた

誰の解毒をしていないのもな…

…これこそが大空だ!!」

銃で上空に行く。

「施しだ!!」

銃を構え、二つの方向に撃つ

そこは、嵐と雷のポールが…

「ししし

助かった」

ドシュッ

「ありがたき幸せ!」

ドシュッ

解毒された守護者が野放しになる

ツナサイドは不利になった…

と思われた矢先…

「君…」

天才なんだって？」

「「「！！」」」

束縛を嫌う雲雀…

その意地で自分で解毒をしたのだ

そのころ、画面を見ていたトーやは…

「ふうん…」

っつーか雲雀恭弥がいなかったらあいつら終わってたじゃん…

先につぶしとくか…?」

と言って、雲雀とベルがいる場所に向かった…

第44ワ。 リング争奪戦―“解毒”大空の戦い―（後書き）

変なところで終わってしまいました…

次回、

リング争奪戦―“零地点突破？”大空の戦い―（仮タイトル）

それでは！！

第45ワ。 リング争奪戦―“零地点突破”大空の戦い―

―無人SIDE―

雲雀恭弥VS・ベルフェゴール、獄寺隼人VS・レヴィ・ア・タンの戦いはすでに終わっていた。

結果は、引き分けと獄寺隼人の勝利。

雷のリングはツナサイドの手に渡った。

「!!!!」

ガキンッ!

何者かが雲雀に攻撃をしてきた。

「へえ〜… よくかわしたじゃん。

そんな傷だらけなのにな♪」

「……………蘭？」

「うゝん、残念。」

「トーヤだ。」

「!？」

そう、雲雀に攻撃をしてきたのは、トーヤだったのだ。

「…言ってなかったっけか？」

オレは…二重人格だ。

主はお前の言う蘭だ。ま、『蘭』つつーのは偽名なんだがな…」

「ふうん

そんなの関係無いよ

君を咬み殺せば…」

ダッ

雲雀はトーヤに向かって走り出す。

「ね」

キンッ

トンフアーでトーヤを攻撃するが、簡単に弾かれる。

キキキンッ

ガッ

「!?!?」

雲雀のトンフアーが鎖鎌の鎖で絡みとられ、動かせなくなる。

「ハアー…」

少しはできると思ってたのにな…

!?
ぐっ」

突然頭をおさえたトーヤ。

驚いていた雲雀だったが、すぐに気を取り直し攻撃を仕掛けようとする。

が。

キンッ

「…恭弥先輩。

……………すみません」

ドゴッ！

雲雀は腹に重いパンチを入れらる。

「…………ら、…ん……………」

ズル……

ドサ…

「ふう…

なんとか気絶してくれましたね。

さて、武でも助けに行きましようかね…

雲のリングは貰って行きますよ。

恭弥先輩ならすぐに起きられると思いますからね…」

そして、仮面の取れた蘭は、山本の所へ向かった。

一方、大空の両ボスの戦いは、XANXUSが有利な状況にあった。

しかし――――…

ボッ

ボッ

ボボッ

ボボボッ

ノッキングするような不規則な炎———

ツナは、死ぬ気の零地点突破を繰り返そうとしていた。

「させねえ！」

XANXUSはさらにスピードを上げ、零地点突破を防ごうとする。

「消えろ！！」

ドドドドッ

XANXUSが銃の連射でツナを攻撃する。

煙が晴れて、そこに見えたのは死ぬ気モードの解けたツナだった。

XANXUSは地上に降りて言った。

「ふっ死んだか…

バカなカスめ てめーの死期をてめーで早めやがった

くだらねーサルマネしやがって

ふっふっふっ

よく考えりゃカスごときにできるわきゃねーのにな…

カスはカスらしく灰にしてやる」

XANXUSがとどめをさそうとした時だった。

メラッ

ツナの額に、再び炎が灯された。

ドンッ

「なに！？」

「「！！」」

「リボーンさん！！」

「ああ成功だな」

「死ぬ気の零地点突破」

第45ワ。 リング争奪戦―“零地点突破”大空の戦い―（後書き）

そう言えぱいつの間にか全部で50ワ突破してましたね。

応援ありがとうございます！

感想はいつでもおまちしております。

第46ワ。 リング争奪戦―“改”大空の戦い―

―無人SIDE―

「どーなってやがる

確かに：ツナは直撃をくらったはずだぜコラ」

コロネロが言うと、少し嬉しそうなリボンが答えた。

「XANXUSの憤怒の炎を中和したんだ

死ぬ気の逆の状態になってな」

「！

死ぬ気の逆？」

「ああ マイナス状態とも言うけどな

死ぬ気の零地点突破とは

普通のニュートラルな状態を0地点

死ぬ気になって炎が出ている状態をプラスとした場合

それは逆のマイナス状態になる境地のことなんだ」

つまり、何もしていないときよりも更に死ぬ気が空であり、

空になった分は敵の炎を受けても吸収してダメージをなくせる

「…………それが初代が使ったという

死ぬ気の零地点突破か」

「そうだ」

その言葉を聞いて、笑い出すXANXUS

「ぶっはっはっは

こいつあケツサクだあ……!!」

「!？」

「誰に吹き込まれたかは知らんが

零地点突破はそんな技ではない!!」

「!!」

XANXUS以外の者が驚く。

「本物とは似ても似つかねーな

考えてもみろ 腐ってもボンゴレの奥義だぜ

使い手がそれほどダメージを受ける

チャチな技なわけねーだろ!!」

確かに、ツナは憤怒の炎を吸収し切れておらずにいる

しかし、死ぬ気の零地点突破というのは

初代が使った技という印象が強いが、

正確には技を導くための死ぬ気とは逆にある境地のこと…

もしもツナがその境地に達していたとしても、

編み出される技は初代とは違う可能性がある

「終わりだカス

灰になるまで撃ちこんでやるぞ」

「しっかり狙えよ」

「なに？」

ス…

ツナが、構える。

さっきとは違う構えのようだが…？

「次はうまく

やってみせる」

「!？」

「沢田殿…？」

リボーン以外の人は驚いていた。

ブラッド・オブ・ボンゴレ
「ボンゴレの血」

ツナの超直感が何かを見つけたらしいな」

「零地点突破

改」

ここで、XANXUSが本物にはそんな構えは無いというが、

ツナは、『オレはオレの零地点突破を貫くだけだ』と言った。

「次元の差を…」

ドゥッ

XANXUSが銃で高速移動をする。

「!？」

ドカッ

ツナは蹴られて、大きくふっ飛ぶ

そして、また銃で移動し、

「思い知れ!!」

「!!」

「ああ!？」

ドウッ

銃で撃ちこむ。

撃たれ続けながらも、XANXUSに目を向ける。

それは、9代目と同じ目をしていた。

それに苛立ちを感じたXANXUS

「どいつもこいつも カスの分際で!!」

キュオオ…

銃に炎がためられていく…

「オレに楯突くんじゃねえ!!!」

コルボ・ダッデイオ
決別の一撃!!!

今までとは比べ物にならない位の炎がツナを襲う。

ドゴオッ

「永遠に散ってやがれ…」

ドカスが……!」

XANXUSはこの一撃でだいぶ消耗していた

ボウッ

ボッ

「!!!」

なんと、さっき撃たれたはずのツナがXANXUSの背後にいたのだ

「「「!」」」

「次はオレの番だ XANXUS」

「なに!!!」

ボウッ

「くっ

死にぞこないが!!!」

上に行こうとするが、すぐに追いつかれて一撃を食らう。

今までとはまるで違う動きを見せるツナ。

「おのれ!!」

ス…

また零地点突破改の構えをするツナ。

マルテロー・ディ・ファイアンマ
炎の鉄槌!!!!

ドドドド

ゴアッ

キイイイイイ…

炎が吸い込まれていく…

フッ

ゴアッ

「!!」

なんと、ツナは吸収した炎を自分の力に変えていた…

ツナが、XANXUSを圧倒し始めた――…

一方。

「ヤッ 武！」

「ハアツハアツ…蘭…？」

カチ

ドシュツ

「解毒かんりよー♪

だいじょーぶ？武」

「ああ… 平気だ」

それは良かった、と安心する蘭。

「はい」

そう言って差し出したのは、雨のリングと雲のリングだった。

「…？」

オマエ、ヒバリに会ったのか？」

「え、うん。」

（星空と暁は私が持つてるけどね…）」

「そーか。」

じゃ、これから一緒に行動s「しないよ？ 私一応VARI Aだし」

…そっか… じゃ、また後でなっ」

そう言って、山本と蘭は別れたのだった…

第46ワ。 リング争奪戦―“改”大空の戦い―（後書き）

更新おくれてすみません。

がんばらなくては…

次回

『リング争奪戦―怒りと初代零地点突破”大空の戦い―』（仮タイトル）

です。

それではっ

第47ワ。 リング争奪戦―“怒りと氷” 大空の戦い―

―無人SIDE―

大空戦、沢田綱吉VS・XANXUS…

初めはXANXUSが圧倒していたが、

ツナが零地点突破を使ってからはツナが優勢になっていた

「おの…れ…

このオレがまがいモノの零地点突破ごときに…

あんなカスごときに…

くそが… くそが!!

ド畜生があ!!!!」

ブア!!

「!!」

XANXUSの顔に古傷が浮かび上がる

「よくもカスの分際で…

許さねえ…!」

ギョオオオオオ…

「ぶっ殺す!!!!」

ドンッ!!!!

「何て奴だ…ここに来て更に炎が増幅してやがる」

「奴の実力は底無しか」

「あれは怒りだぁ…」

誰かが観覧席にやってきた。

「……この声……！」

スクアードだった。

ディーノに連れてこられて来たのだった。

体中包帯だらけで車椅子に乗っている――……

蘭は、武を助けた後、その場から少し行ったところで立ち止まっていた。

―蘭SIDE―

さうて、どうしよっかな？

マーモンさんとかベルさんのところ行くか…

それとも観覧席行くか…

あるいはボス様の所にいくか…

いや、それはダメだな。

かと言っていつまでもじっとしてゐる訳にはいかないし…

よし。

観覧席の方に行こう！

そして私はダッシュで観覧席の方に向かった。

はー…

やっと着いた…

って、「スクアーロさん!？」

「「「!?!?」」」

しまった、声に出してしまった!

「なんでお前がここにいるんだ？」

「そ、そんなことは置いときましょうよ。

戦いも進んでますし…」

「……………」

『かつ消す！！！！』

おお、カッコイイ！

…それにしても…無事でよかったな…スクアーロさん…

「ツナ！！何をする気だ！？」

綱吉、ボス様の炎を受けてたつつもり…？

カツ！！

ゴオオオオオオオオ……

「ツナ……」

「沢田殿！！」

モニター煙で見えないー…

「！！」

「誰かいるぜコラ！」

おお、ボス様…！？

これって…！？

「奴の手を見ろ」

…気づいたか…

「「！」」

「……！！凍ってる！？」

「この現象は…

ま…まさかあの時と…」

…スクアールさん、これを知っているのかな？

「ツナ！！」

「そうか…」

リボーンが笑った。

「恐らくこれが初代の編み出した零地点突破

死ぬ気の境地の逆とは死ぬ気の逆の状態でもあるんだ」

「そうか 炎の逆つまり冷氣！」

「しかもただの冷氣じゃない」

「XANXUSの炎ごと凍らすなんて…

この技のあり方はまるで……」

「死ぬ気の炎を封じるためにあるような技だな」

わー、息ピッタリ———…

じゃ無くて。

行かなければ…

ボス様の所へ――――：！！！！

「オイ日狩い！！！！」

どこへ行くつもりだあ！！！！」

「――――決まってるじゃないですか。

ボス様の所ですよ。」

ダッ！！

そうして私は全速力でボス様の所へと向かった。

そこに着くと、今まさに凍らせようとしていたところだった。

「いくぞ」

「やめ…ろおおおおお！…！！！」

「——！！」

…零地点突破 初代エディション
ファースト

「ぐおお！！」

ビキビキ

「なぜだ… なんでお前は…」

「うるせえ！！！！」

「老いぼれと同じことをほざくな！！」

「9代目と…？」

「！」

ビキイッ

綱吉は、大空のリングを完成させた。

そしてボス様は—————…

凍った。

「もうこれが溶けることはない」

！！！！

そのとき、私の中でさまざまな感情が渦巻いていた。

怒り、哀しみ、絶望、そして—————

憎しみ。

「ハア ハア ハア…

XANXUS…

うぐ…」

ガクッ

綱吉は限界に近いようだった。

しかし、私はその場を動くことができなかった。

第47ワ。 リング争奪戦―“怒りと氷” 大空の戦い―（後書き）

訂正です。（活動報告にも書きましたが…）

黒曜編の時、『トーヤは9年前に死んだ』となっておりましたが、

『トーヤは5年前に死んだ』ということにします。

そうしないと後々蘭（日狩）の過去を書くつもりなのでやばいこと
になりますので…

よろしく願います。

次回、

リング争奪戦―“終わり” 大空の戦い―

です。

それでは！

第48ワ。 リング争奪戦―“終戦”大空の戦い―

―日狩SIDE―

ボス様が氷漬けになった後――…

「今がチャンスね！」

…レヴィさんに…ルツスーリアさん…？

「死になさーい？」

「「幻覚………」」

見事にハモった綱吉と私

「ムム よく見破ったな

でももう這う力すら残ってないみたいだね」

…マーモンさん…

「ところで…

大丈夫かい？ 日狩」

「…はい……ボス様は…」

「無駄だ… XANXUSは眠りについた………」

……ッ！

「それはどうかな？」

「!!」

「!？」

「むしろボスが次期ボンゴレの後継者になるための

儀式の準備がととのったのさ」

「……………」

「どういう…ことですか？」

「ボスは再び復活する」

そういつて見せたのは、大空と暁、星空以外のボンゴレリングだった

「なぜリングを半分ずつ保管するのか…」

そしてボンゴレの正統後継者にしか授与されないのかわかるかい？

それはリング自身にも秘められた力があるからさ」

「力…？」

「日狩は知らなかったね。」

ボスにかけられた9代目の零地点突破が溶かされた床には

7つの小さな焦げ跡が残されていたという…

誰がやったかさだかではないが

この形跡は一つの仮説を立てるには充分だ」

「……………！」

ボウッ

ボンゴレリングに炎が灯る。

「思った通りだ 見るがいいさ」

ジュウウウウウ……

氷が…溶けていく…

「これだけではないよ

7つの…この場合は9つの完全なるボンゴレリングが継承されし時

リングは大いなる力を

新たなるブラッド・オブ・ボンゴレに授けると言われる」

「！　ボンゴレの…血に……？」

キンッ

綱吉のリングがはじかれる

シュッ

「返してもらうぜ

これは正統後継者のリングだし

日狩ー、リング貸して♪」

「ん、わかった…」

ヒュッ

リングを投げる。

「ボンゴレリング全部コンプ！」

「こっちも準備できたよ」

ドサッ

「ボス様!!」

「大丈夫だよ日狩

おかえりボス！」

「いよいよだよ」

「リングを… よこせ…」

「もちろん これはあんな亜流のニセモノじゃなくて

9代目直系のボスにこそふさわしいからね」

「! ま…ハア まて…」

「結局最初からこうなるって決まってたのさ」

カチ、とリングをはめていく

チエルベツロ、綱吉側の守護者（恭弥先輩以外）がやってきた

「!! ああ!!」

ベルさんがリングを指にはめようとする

「どいつもこいつも新ボス誕生のために立ち会いごくろーさん」

「受け継がれしボンゴレの至宝よ

若きブラッド・オブ・ボンゴレに大いなる力を！」

「……………！」

カアア

キュオオオオオ…

リングが光る

「こ…………… これは……………！」

「！」

「力だ…………… とめどなく力があふれやがる……………」

これがボンゴレ後継者の証……………！

ついに!! ついに叶ったぞ!!

これでオレはボンゴレの10代目に…

!!
」

ゴ
パ
ッ

血をふきだすボス様……

「がっ
」

「!!
」

「がはあっ!!!!
」

「ボス!
」

「どーしたんだ!？」

「ボス様…？」

「リングが…」

XANXUSの血を… 拒んだんだ…」

「がはあっ!!!!」

ボス様…!!

「ムム!おまえ何か知っているな？」

リングが血を拒んだとはどういうことだ!？」

しかし、何も言わない綱吉

「ぐふっ

さぞ…かし… いい気味だろうな!

……そうだ

オレは老いぼれとは

血なんて繋がっちゃいねえ!!」

沈黙――――

全員が驚いている…

シューウウウ…

死ぬ気モードの解けた綱吉。

「XANXUS………」

「同情すんな……！」

カスが……！」

ボタボタ……

ボス様から血が流れる

『おまえの裏切られた悔しさと恨みが……オレにはわかる……』

「！ スクアーロ……！」

武が思わず叫ぶ

「生きてやがったのか……カスザメ……」

……わかる……だと……

てめーに……オレの何がわかる……

知ったような口を……きくんじゃねえ……」

『いいやわかる!!』

知っているぞお!!』

「なら言ってみろ!!」

オレの何を知っている!! ああ?

言えねーのか!!」

すこしためらった後、

『おまえは下町で生まれ生まれながらに炎を宿していた

そしておまえの母親はその炎をみて

おまえが自分とボンゴレ9代目の間に子供という妄想にとりつかれたんだあ』

――!!

『おまえの母親は何も知らないおまえと9代目を面会させた

おまえは9代目の言葉を信じて疑わなかった……

引き取られるとおまえは

9代目の息子としてふてぶてしくでかくなっていった…

おまえは威厳・実力ともに9代目の息子として後継者として

文句のない男に成長した

だがある時知っちゃったんだ

おまえの母親は9代目とは何の繋がりもなく

おまえは養子として9代目に引き取られたことと

そして自分はボンゴレとは何の血の繋がりもないことを…

しかもブラッド・オブ・ボンゴレなくしては後継者として認められぬ掟!!

オレがおまえを初めて見たのもその頃だ……

一目でかなわねえと悟った……

そしてその怒りについていくと決めた

それから半年……

【あなたは…… まさか!!】

〔ガッ ドスッ ゴト………〕

【老いぼれをひきずりおとし

ボンゴレを手に入れる】』

『そして揺りかごにつながるんだな』

『これがオレの知る事の全てだ

揺りかごの後に調べた』

「くだらねー……………」

ボス様……………

そのあと綱吉が言った。

「9代目が……………」

裏切られてもおまえを殺さなかったのは…

最後までおまえを受け入れようとしていたからじゃないのか……
……？

9代目は血も掟も関係なく誰よりおまえを認めていたはずだよ

9代目はおまえのことを本当の子供のように……………」

「つるせえー！！」

気色の悪い無償の愛など!! クソの役にも立つか!!

オレが欲しいのはボスの座だけだ!!

カスはオレを崇めてりゃいい!!

オレを讃えてりゃいいんだ!!

ワオ———

「な」

「なんて奴だ…」

「かっき———」

「ぐあっ」

ゴパッ

ボス様からさらに血が流れ出る

「ぐお……!!」

ぐっ…」

カラン…

指から大空のリングが抜ける

そしてチェルベツロがボス様にこう言う…

「XANXUS様！

あなたにリングが適正するか協議する必要があります」

「だ……だまれ!!」

「!」

「叶わねーなら道連れだ!!」

「どいつもこいつもぶっ殺してやる!」

「XANXUS様!!」

「大さんせーだボス やろーぜ」

「当初の予定通りだよ」

「————ここにいる者たちの殲滅ですね？」

「とっとと終りにしましょう」

「ここで、隼人達がやってくる

「どこまで腐ってやがる

やらせるかよ!」

「どいつも死に損ないじゃん

おっあっちにも…」

ヨロ…と、恭弥先輩が来る。

回復するのはやいね。さすが先輩。

「ししし　こりゃ1000%間違いなし

おまえら死んだわ」

「てめー見えねーのか？

3対5だ！！　分わりーのはそっちだぜ？」

隼人がいうが、マーモンさんがすました顔(?)で

50人の幹部クラスの次に強い精鋭がここに来る、という。

それに抗議をしようとしたチェルベツロの一人がベルさんに殺される

それによって観覧席の奴らが出せ、と言い、

チェルベツロが赤外線を解除しようとするが、

マーモンさんが細工をしておいたので解除されなかった

「くっそう!!」

こうなりゃオレ達だけでやるしかねえ!!」

その時――――

ザンッ

ヴァリアー隊の三名が到着する。

「ナイスタイミング 待ってたぜ」

ガクンッ

!!?」

「報告します

我々以外のヴァリアー隊全滅……!!

奴は強すぎます!! 鬼神のごとき男がまもなく………

「!!!」

ギョオツ

鬼神————?

「げげ!!」

「暴蛇烈覇……!!」

ゴキヤツ!!

「!」

『……ランチア……!!』

日狩、かわれ!!』

!!

…ダメだ…

ここは、私がやる…!

『ッ…』

「取り違えるなよボンゴレ

オレはおまえを助けにきたのではない

礼を言いに来た」

「ランチアさん！……！」

「ランチア……あのランチアがなぜ……」

「あいつ何者？」

「ベルは知らなかった？」

北イタリア最強と言われたファミリー惨殺事件のランチア、だよ」

「しししそー来たか……」

そんじゃあ……

とつとと済まそつと♪」

ビッ

ベルさんがナイフを投げるが、武が防ぐ

「ムム…こうなっていると…」

「？」

ボコッ

ドンッ！

「逃がさない」

クローム…

「ねえ

決着つけようよ」

恭弥先輩…

「行かせんぞ」

笹川先輩か…

「10代目！おケガは！」

隼人…

カラン…

ナイフを落とし、ベルさんとマーモンさんが降参する

でも…

「まだ…まだだっ…!!」

「「「「?!?!?」」」」

「私はっ…

死んでもボス様の意にしたがう…!!

絶対に…!!!!」

「蘭!!」

「日狩…」

「まずは…

らんちあ、おまえからだ」

―無人SIDE―

ダッ

日狩がランチアに向かって走り出す

「くっ」

ガキンッ！！

日狩の刀（夜切鉄）とランチアの鉄球がぶつかる。

「ああああああっ！！！！！！」

「…！」

ドンッ

日狩がランチアを押し切り、吹っ飛ばす

「くっ…」

さすがは夜切家、というところか…

うっ…」

「やめろ蘭！！！」

獄寺がいうが…

「ウルサイ」

日狩がクナイを投げる

「！！
くっ」

それを紙一重でかわす獄寺

「喝っ!!!」

「!?!?!?」

「はあ…」

仁さんがせっかく来てくれたってのに…」

「まあそう言うな。」

————日狩」

ざ…

「…おじいちゃん…?」

そう…

ここにやってきたのは、仁とセシルだった。

シュッ

瞬間、セジル、仁、日狩の姿が消える

「……………!?!」

「消えた…!?!」

「……………役立たずのカス共が…」

くそ！　ちくしょう！

てめーら全員…!!　呪い殺してやる…!!

ぐはっ…!!」

そして、チェルベツロが告げる――…

「よって、ボンゴレの次期後継者となるのは

沢田綱吉氏とその守護者8名です」

リング戦、終了

第48ワ。 リング争奪戦―“終戦”大空の戦い―（後書き）

変な終わり方ですみません…

Special Episode of プロローグ

―日狩SIDE―

「!?!?!」

…夢…?

いや、ちがうな。

おじいちゃんと師匠が来て、気絶させられて帰ってきた――――

多分だけど。

…負けたのかな？

私たちは…

それに…

「!?!?!」

ボスさ…ッ！」

昨日の傷の痛みがまだ…

みんなはもうイタリアに帰ったのかな………

はぁ…

ピンポーン

？

ピンポーン

…だれだろ？

こんな朝早く…

ピンポーン

…出なきやな…

ガチャ

「どちら様…って、

武に…

沙絵？」

「よッ蘭！」

「お久っ！」

…ノー天気達キタ——…

「なんだよ暗いなー…

もつとノリで行こうぜ★」

「いや意味わかんねからッ！

…それで？　なんか用事？」

それを言うと、急に二人がまじめな顔になった。

「…ああ。

オマエの——…

過去のことだ。

何から何までじゃなくていい…

少しでもいいから、教えてくれないか？」

——！

過去、か——…

「蘭…

ずっとナニカを隠してたんでしょ？

…知ってたよ…」

…親友にはなにを隠しても無駄か…

……しょうがないかな…

「…分かった。話すよ…

とりあえず上がって？」

そうして、二人を私の部屋へ案内した。

「まず。」

私の本名は“日狩”っていうんだ：

そこは分かかって？」

まずは本名を名乗らなきゃ、なんにもはじまらない。

「…蘭じゃなくて、日狩？」

「そ…

これからの呼び名は蘭でも日狩でもいい。

なるべく日狩のがいいけど…」

「…じゃあ、日狩…？」

あとは…

「あと、もうひとつ。

私はマフィアなんだ…

で、武。

マフィアごっこじゃあ無いからね？

命を賭けた、本当のマフィアなんだよ…」

…あれ？

「「……………」」

もっと驚くと思ったのに…

あんま驚かないな。

残念。

「…前から薄々気づいてたよ。

蘭…日狩が、ナニカ裏のことをやってたって…」

――！

「ハア…

ほんとに沙絵には何を隠しても無駄だね。

今度自衛用に武器の扱いを教えたいよ。

私のせいで命を狙われるかもだしね…」

「本当？　ありがとう！

…で、日狩…

早速だけど、聞かせてくれない？

本当の…話を」

「……………うん。」

今から8年位前の事なんだけど――…」

Special Episode of 1 波夜輝

―無人SIDE―

今、日狩はジャンキードファミリーの殲滅をしている。

そして、やっとそのファミリーのボスの所まできた。

ザシュッ

ボスの側近を殺す。

「ジェロイ!!」

!!

や、やめてく…

あゝあああああああ!!!!」

悲鳴が聞こえるが、そんなものは気にしない。

「(―――やはり、こんなに小さいマフィアの相手はつまらない
……)」

「よう！　日狩、久しぶりだな！」

不意に、後ろから声が聞こえた。

「……なんの用だ？」

ハヤテ
波夜輝……」

波夜輝と呼ばれた少年は、

「んだよ……」

せつかくきてやったn「オレがおまえに来てほしいと言った」

……はぁ…

バツサリしてんねー…日狩サンは…」

「フン…

「オレがこんな小さいマフィアごときに負けるとでも思ってたのか？」

「…思っていない」

「————この頃の日狩の一人称は、『オレ』だった。」

「じゃ、この死体たちはオレに任して先帰ってろよ。」

「いや…

オレはオレが殺した奴らを最後まで見届けたい。

「…燃やすだけだろ？波夜輝は…」

「…そーだけど…」

ハア… ま、いいよ。墓とか作るなよ?」

「…分かってるって…」

そう言って、ジャンキードファミリーの人たちの遺体とアジトに火を付けた。

「…………帰ろうか。日狩…」

「…………うん」

―日狩SIDE―

オレと波夜輝が出会ったのは、だいたい3歳くらいの頃。

師匠のふるさとでのことだった。

「ここがオレのふるさとだ。

ここには何もないが、修行には最適の場だ。

村の人もいい奴ばかりだしな。」

「…はい」

少し硬くなっていたが、「師匠は心配ないさ」といっている。

この人はウソをつくような人じゃないから、きっと大丈夫だろう。

「この村で1〜2年位修行したら、

小さいマフィア位なら余裕で倒せるようになるだろう…

丁度、おまえと同じ年のチビもいるし…

暇はできないと思うぞ」

…オレと同じ年？

「どんな奴なんですか？」

すると師匠は笑いながら、

「会えば分かる。

ついてこい、宿…オレの家はこっちだ。」

と言って歩き出した。

少し歩いて分かったことだが、大人、じいさんばあさんが少ない。

というより、人の気配も少ない。

「…この村、なんでこんなに人がいないんですか？」

「……………みんな出てったのさ。」

この村が恐ろしくてな。」

頭上から声が聞こえた。

「…ッ!!?」

みると、桜の木に誰かがいる。

「ハハ、気配も感じなかったろ。」

恥じることじゃないぜ、オレは暗殺者だからな。」

それが、オレと波夜輝の初対面だった。

「よっ」

タッ

恐らく、この少年（？）が『オレと同じ年くらいの奴』なんだろう。

「…名前、なんて言うん？」

…非常識なやつだ。

「相手の名前を聞いたら、まずは自分の名前を名乗れ」

「!…波夜輝、だ。」

波夜輝か…

「オレは日狩だ。」

一応、女」

「!!おんな…!?!」

じっと見る奴だったが、

ドゴオッ!!

「!! ツ痛～～～」

って、何すんだ!!」

「は? 殴っただけだけど?」

「～～～ッおまえな」

しかしここで師匠が呆れたように、

「フウ…」

日狩、行くぞ。」

と言ったので、師匠に着いて行った。

「…なんなんですか？

アイツ…」

師匠の家に着き、

さっきの波夜輝とか言う奴を思い出してイライラしていた。

「あいつは、波夜輝…

この村を出てった奴が捨てた子供だ。

オレが拾って育てた。今は違う家に住んでいる。

………家は腐るほど余っているからな…

日狩といい勝負になると思うぞ？」

絶対勝つし…

「さ、早く食え。

最初の一カ月はオレの家で生活して、過ぎたら別の家に住んでもらう。

なるべく自給自足だ。レシピとかはオレが1週間で叩きこむ。

分かったな？」

…はい？

ある意味、おじいちゃんよりもキツイ修行じゃん!!!

「…きいてるか？」

「あ、はい!!」

わかりました…」

そう言って、ご飯を食べ始めた。

次の日…

「おはようございます…」

「おう。おはよう…」

さっさと着換えろ。やることがたくさんあるからな…」

…やること？

疑問に思いながらも身支度をして、再び師匠の下へ来る。

「…出てこい波夜輝。」

隠れているのは分かっている。」

トン、と廊下から波夜輝がでてきた。

「……なんの用？」

「…別に…」

ただ……」

「ただ？」

「……………昨日は、……………ごめん…」

「…別に気にしてないし、こっちこそごめん。」

思いつきし殴ったりして…」

ほんとだよ、とか言いそうな奴だな…

「…おう…」

素直だな…

ちょっと赤くなってるのは気のせいかな？

「…キリがいいところで、二人とも。

まずは手合わせだ。戦え」

「「……………はい？」」

ガ
ッ

—セ
ジ
ル
S
I
D
E
—

ドンッ

…なかなか二人とも、やるな。

しかも楽しそうだな…

「ハアッハッ…

なかなかやるな…波夜輝」

「ハッ…そっち、こそっ…！」

ドゴッ！！

「「！！！」

両者のパンチが両者の頬にぶつかり、

ドサ……

互いに気絶する。

……こんなもんか……

家に帰って介抱するか――――

—無人SIDE—

時は戻り、ジャンキードファミリーを殲滅した日———

「ただいまー…

つつつてもこの家はオレと日狩しかいねーけどな…」

「なに言ってるの…

さ、はやくご飯作っちゃおうよ」

「おう…」

師匠にいわれてこの村で暮らし始めて、2年がたった。

「…そろそろ日狩ともお別れか……」

バンッ

「「!?!?」」

「って、師匠…?」

「日狩…連続で悪いが…」

決して弱い方じゃない…アフィアの殲滅に行ってくれないか?」

「? はい…分かりました…」

それで、何ファミリーですか…?」

「…ナオニードファミリー…だ…」

「なっ

…ナオニード!? 無茶だ!」

「…行きますよ。」

なに、すぐ帰ってくるし、無理はしないから…波夜輝、心配すんな」

「…ッ……………」

しかし、帰ってくるのはすぐには無かった———…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4862w/>

嘆きの月夜

2011年12月5日20時54分発行